



大学教育再生加速プログラム

平成 28 年度報告書

大学教育再生加速プログラム(AP)

[テーマ I・II 複合型]



宮崎国際大学
Miyazaki International College

目次

I. はじめに	1
II. 平成 28 年度宮崎国際大学の AP 事業	3
1. 本学 AP 事業の概要	4
2. 平成 28 年度 AP 事業の概要及び成果	5
3. 平成 28 年度 AP 事業の活動スケジュール及び具体的な成果	7
III. 平成 28 年度活動報告	12
1. ワーキンググループの活動報告	13
アクティブ・ラーニングワーキンググループ (ALWG)	13
クリティカル・シンキングワーキンググループ (CTWG)	24
e-ポートフォリオワーキンググループ (ePWG)	32
ループリック・ベース・シラバスワーキンググループ (RBSWG)	43
2. 第 65 回九州地区大学教育研究協議会プログラム	49
3. 宮崎国際大学・アクティブ・ラーニングシンポジウム 2016	52
4. 山口大学・国際シンポジウム 2017	81
IV. 平成 28 年度外部評価委員会	84
1. 第 2 回 AP 外部評価委員会	85
2. 外部評価委員長の総評まとめ	86
V. 本学 AP 事業のこれまでの成果	93
VI. 参考資料	96
1. MIC-AP ニュースレター	96
2. 宮崎国際大学 AP プロジェクト・メンバー	100

I. はじめに

－AP 事業への取り組みについて－

宮崎国際大学 学長 山下 恵子



平成 27 年に中央教育審議会答申で「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入試選抜の一体的改革について」が提言され、国としての改革の具体的プランである「高大接続改革実行プラン」が策定されました。その後、平成 28 年には、高大接続システム改革会議「最終報告」（平成 28 年 3 月 31 日）が出されました。この間、本学では教育の質向上に向けた取組をはじめとし、3 つのポリシーの見直しなど種々の改革に取り組んで参りました。

本学では、創立以来 22 年間、リベラル・アーツ教育をアクティブ・ラーニングの手法によって行い、より多面的な思考を促す学修を追及しています。

「テーマⅠ（アクティブ・ラーニング）・テーマⅡ（学習成果の可視化）の複合型」として 3 年目を終えた本学 AP 事業は、22 年間の本学教育を振り返る機会となり、さらなる教育の質向上に向けた取組になっていると言えます。

本年度は、これまで 22 年間実践してきたアクティブ・ラーニング手法の類型化が進みました。4 つのカテゴリーに分けたマトリックスは今後の機能別の検証に大きな示唆を与えるものとなっています。また、本学独自に開発したクリティカル・シンキングテストは、多面的思考を評価するツールとして、学修成果の可視化への大きな試みであります。本年度実施したパイロットテストは、本格実施に向けて開発を進めています。更に、ループリック・ベースシラバスは、学部のディプロマポリシーに基づいた基本となるループリック（学習到達度評価）を提示したことにより、カリキュラムマップによる可視化の前段階まで到達しました。完成すれば、学生自らが自己の能力開発の到達状況を把握でき、そのことによって学修意欲も増すことを期待しています。

本学の AP 事業を通して明らかとなってきた、アクティブ・ラーニングの手法やそれによって培われるクリティカル・シンキングの可視化は、今後の学校教育において目指そうとしている使える英語、つまり英語で思考できる人材を育てようとするこれからの日本の英語教育に大きな貢献ができるのではないかと自負しているところです。

AP フォーラムにおける意見交換、助言、AP 外部評価委員会によるコメントなど、本学事業の推進には多くの力を頂きました。心よりお礼申し上げます。

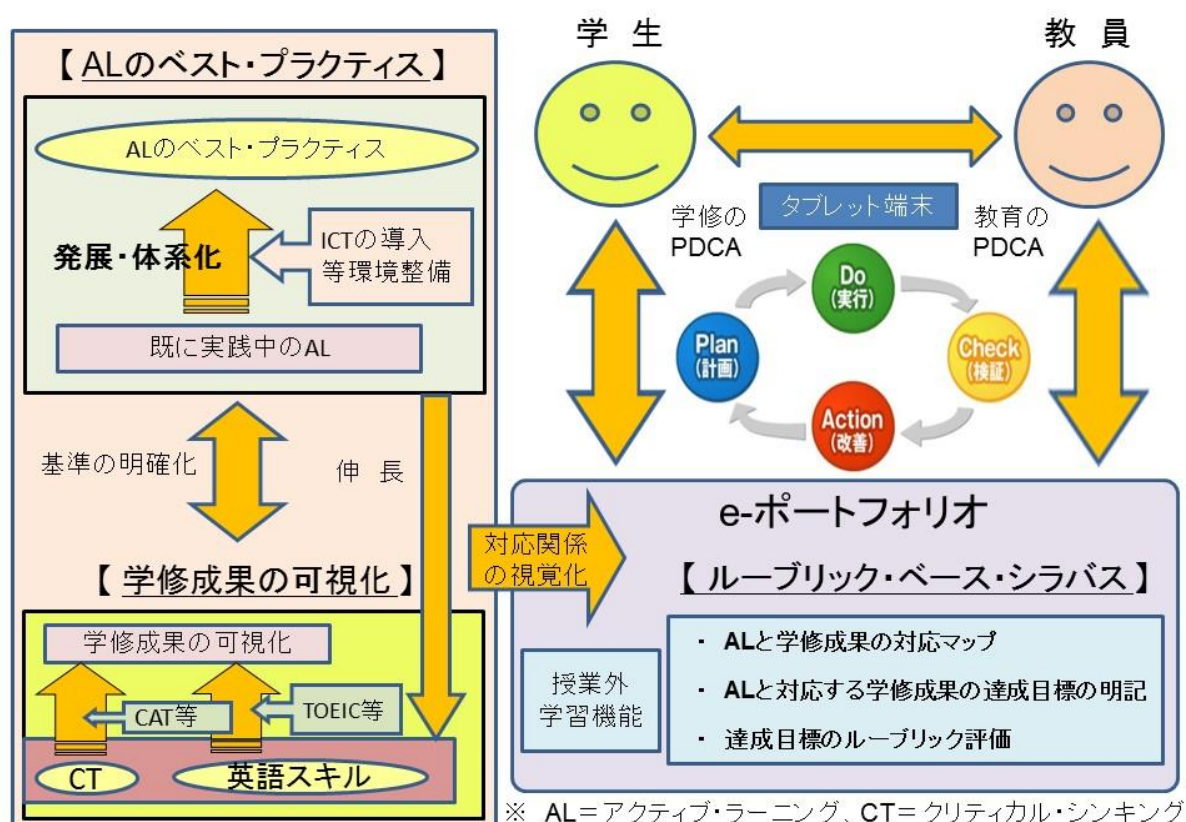
本学の AP 事業が、日本の教育界に少しでも貢献できるよう、全力で取り組んで参ります。今後ともご理解、ご支援をよろしくお願いいたします。

II. 平成 28 年度宮崎国際大学の AP 事業

1. 本学 AP 事業の概要

宮崎国際大学は、開学以来国際的リベラル・アーツ教育を軸に、ほぼ全ての授業を英語で行い、またアクティブ・ラーニングを導入している。しかし、これまでの取組では、効果的なアクティブ・ラーニングに必要なクリティカル・シンキングの技能をはじめ、アクティブ・ラーニングによる学修成果を可視化する客観的な測定・評価が不完全であり、またアクティブ・ラーニングをさらに発展させるための物的資源の環境整備が整っていない等、不十分な点があった。そこで、本事業では、①従来のアクティブ・ラーニングをさらに発展させ、ベスト・プラクティスの明確化と達成を目指す、②クリティカル・シンキングを客観的に測定・評価するツールを開発する、③②の開発に伴う英語スキルを向上させるアクティブ・ラーニングプログラムを構築する、④e-ポートフォリオを用いて学修成果の可視化を行う、⑤ルーブリック・ベース・シラバスの導入による学修のPDCAサイクルを確立させる、の5つの取組を包括した事業を展開することで、本学教育のさらなる質向上を目指すことを目的とする。

本学 AP 事業の概要図



2. 平成 28 年度 AP 事業の概要及び成果

本事業の本年度の目的は、主に 3 つあった。1 つ目は、平成 27 年度に実施したアクティブ・ラーニングのベスト・プラクティスの明確化のための協議事項に基づいて、本学が考えるアクティブ・ラーニングのベスト・プラクティスの 1 つのモデルを提示することである。特にタブレット端末を用いた ICT を導入したアクティブ・ラーニングの実施については、前年度に引き続きより効果的な実施方法についての開発を進め、その事業成果をシンポジウムで報告する。2 つ目は、過年度に実施・検証した米国テネシー工科大学のクリティカル・シンキング・テストの結果を参考に、本学独自のクリティカル・シンキングテストの開発とその試行を行い、その結果の検討・分析を行うことである。3 つ目は、ルーブリック・ベース・シラバスの本格的運用開始である。平成 27 年度に整備したシステムを基にルーブリック・ベース・シラバスを本学の教員と学生が効果的に活用できるように、ルーブリック・ベース・シラバス・ワーキンググループと e-ポートフォリオセンターが中心となり、ルーブリック・ベース・シラバスの全学的な活用を推進する。

(目的 1 に関して) 昨年度に引き続き、教員が授業で使用するアクティブ・ラーニングの手法のデータを収集し、アクティブ・ラーニングの手法の更なる体系化が進んだ。この調査を通じて、教員は自己のアクティブ・ラーニングの手法を鑑みる機会を得た。アクティブ・ラーニングワーキンググループ主催の FD において、アクティブ・ラーニングのベスト・プラクティスに関する議論がされ、教員の効果的なアクティブ・ラーニングに対する共通認識が生まれ、授業での有効なアクティブ・ラーニングの実践が促進された。このような機会を通じて、教員の授業改善が促進され、授業での効果的なアクティブ・ラーニングを通じて、学生は効果的な教育が受けることができたと考えられる。今年度の目標としていた本学が考えるベスト・プラクティスのモデルの提示の達成できなかったのも、来年度は、どのようにベストを見出すかの議論を再び重ねて、モデル提示ができるようにする。タブレット端末を用いての ICT を導入したアクティブ・ラーニングも、少しずつ具体的な活用法が提示されたので、来年度以降は汎用性のある形で ICT を利用したアクティブ・ラーニングを提示し学内で共有することで、学生にとって教育効果の高い ICT 使用を目指す。

(目的 2 に関して) 昨年度に実施・検証した米国テネシー工科大学のクリティカル・シンキング・テストで得た貴重な経験を基に、本学独自のクリティカル・シンキングテスト (MICCAT) の開発に着手し、クリティカル・シンキングワーキンググループが MICCAT の初版が作成した。MICCAT 初版の有効性と改善点を見つけるために、学生に対して MICCAT

を試験的に実施し、その結果の検討・分析が行われた。成果分析に基づいて、MICCAT 第2版が作成され、来年度の更なるデータ収集を通じて、本学で育成するクリティカル・シンキング能力がより効果的に反映されたテストが作成される予定である。クリティカル・シンキングワーキンググループが主催するFDを通じて、今年度のMICCATに関する成果が教員に報告され、MICCATに沿った、学生のクリティカル・シンキング能力を効果的に高める教授法についても議論された。また、テスト完成後、学生は自分のクリティカル・シンキング能力を有効的に測ることができ、テスト結果に応じて、より明確にクリティカル・シンキング向上を意識して学修に臨むことができる。よって、クリティカル・シンキング能力向上に対して、教員が一方的に指導するのではなくて、学生もクリティカル・シンキングの実態を理解し、その能力向上に励むことができる。

（目的3に関して）昨年度試験的に導入したシラバスへのルーブリック導入が、今年度の春学期より、国際教養学部において本格的運用が始まった。このルーブリック・ベース・シラバスにより、教員は何に重点を置いて教えたらいいいのか、また、学生が授業において、どのような知識・技能をどういう風に身に付ければ良いのかが明確になり、学生は意欲的に授業に取り組むことができたと考えられる。また、ルーブリック・ベース・シラバスを導入することで、教員は国際教養学部の学修目標を常に意識した指導ができ、学生も学修目標を念頭に置いて学修に取り組むことができるので、学部全体で学修目標に沿った教育効果の高い授業の実践につながった。課題としては、ルーブリックの活用は教員の個人差があるために、効果的なFDを通じて、ルーブリックの活用方法を教員に周知し、大学全体でルーブリックに取り組む必要がある。また、8月には、ルーブリック・ベース・シラバスの活用に関するデータを教員と学生から収集し、ルーブリックの活用及びルーブリック・ベース・シラバスに対する考え方などの実態を把握することができた。今後の運用に参考となる情報が得られたことで、来年度のルーブリック・ベース・シラバスワーキンググループの活動が明確となり、より効果的なルーブリックの活用法が議論され、学生の学修目標がより明確になるルーブリック運用を目指す。

3. 平成 28 年度 AP 事業の活動スケジュール及び具体的な成果

日程	実績	具体的な成果
4 月	ループリック・ベース・シラバスの本格的運用を始める。	
	シラバスにループリックを組み込むループリック・ベース・シラバスの運用が国際教養学部において始まった。また、昨年度作成されたインスティテューショナル（全学的）ループリックの授業での活用も盛り込まれた。	ループリック・ベース・シラバスの本格的運用を始めることで、学生がそれぞれの授業において、なにをどこまで身に付ければ良いのかが明確になった。これにより、学生は目標を持って意欲的に授業に取り組めるようになった。また、教員にとってもループリック・ベース・シラバスを使用し、学生がループリックの項目を達成できたかを確認することができた。これによって、自身の教育を見直し改善できる機会を得ることができた。
4 月～ 5 月	e-ポートフォリオの教員向け及び学生向けオリエンテーションを行う。	
	e-ポートフォリオの目的や使用方法について、教員及び学生に周知を図り、より適切な運用のために意見交換を行った。	4 月に e-ポートフォリオに関する FD が行われ教員の e-ポートフォリオに対する知識が深まった。学生に対しては、6 月、7 月及び 1 月にオリエンテーションが開催されて、学生に e-ポートフォリオの使用法を指導し、大学全体でのより効果的な e-ポートフォリオ使用が可能となった。e-ポートフォリオを導入した授業の他に、新入生は学年の学修をまとめたページを作成し、自身の学修を振り返ることができた。
5 月	平成 28 年度入学生にタブレット端末を貸与する。	
	新入生に対しタブレット端末を貸与すると共に、その基本的な使用方法についての説明会を開催した。	新入生にタブレット端末の基本的な使用方法を指導することで、新入生は本学での授業内外の学修におけるタブレットの積極的な活用法を理解できた。
5 月～ 10 月	独自のクリティカル・シンキングテスト（MICCAT）の開発を開始する。	
	昨年度に米国テネシー工科大学が開発した CAT を実施したことで得た経験に基づいて、本学独自のクリティカル・シンキングテストの開発が行われた。	アクティブ・ラーニングで涵養されるクリティカル・シンキングを可視化する一つの方法が開発されることになり、学生のクリティカル・シンキング能力を効果的に測定するテストの開発に着手した。

6月	国内の学会でe-ポートフォリオ導入に関する発表を行う。	
	東京のLakeland Collegeで開催されたGlobal Higher Educationの学会でe-ポートフォリオ導入に関する発表を行うことで、e-ポートフォリオに関する専門知識の共有をした。	本学の実践成果を発表し、他大学の研究者らと交流することで、専門知識を共有、獲得した。本学学生に合ったe-ポートフォリオ活用を考える上で、役に立つ情報が得られた。
6月～7月	ループブリックに関して教員と学生に調査を行う。	
	7月に、学生及び教員に対して、ループブリック・ベース・シラバスの活用に関するアンケート調査を行った。	ループブリック・ベース・シラバスの活用に関するデータを得ることで、教員と学生のループブリック・ベース・シラバスに対する考え方などの実態を把握することができた。学生の学修にとって有効なループブリック使用に役立てることができた。
7月	アクティブ・ラーニングのベスト・プラクティスに関するFD（平成28年度第1回）を行う。	
	アクティブ・ラーニング・ワーキンググループが中心となり、全教員に対してアクティブ・ラーニングの効果的な手法についての講習を行った。	教員に対してアクティブ・ラーニングの効果的な指導法の1つの形を提示することで、教員に効果的なアクティブ・ラーニングに対する共通認識を持たすことができた。授業での実践を促進することで、有効的なアクティブ・ラーニングの活用が促進され、学生も効果的に教育を受けることができる。
7月～8月	e-ポートフォリオの運用に関する中間報告書を作成する。	
	これまでのe-ポートフォリオの活用をまとめた中間報告が作成された。	平成27年度より本格的に教員・学生に導入したe-ポートフォリオの運用に関する中間報告書を作成し、これまでの活動をまとめ、e-ポートフォリオが本学でどれくらい普及しているのか、どこでどの程度効果的に活用されているのかが把握できた。これを基に、学生にとってより教育効果が高まるe-ポートフォリオ活用が議論されて、今度のより効果的な使用法が促された。
10月	ループブリック・ベース・シラバスの活用に関する中間報告書を作成する。	
	ループブリック・ベース・シラバス・ワーキンググループを中心として、本	これまでのループブリックワーキンググループの活動及びループブリックの活用状

	学におけるルーブリックの活用に関する中間報告書がまとめられた。	況がまとめられた。これにより、今後の課題及び改善点が浮き彫りとなった。学生にとって効果的なルーブリック活用法を見出し、学内で促進することがこれからの課題である。
10 月 ～1 月	MICCAT の開発の継続および試験的運用を始める。	
	MICCAT 初版が作成され、国際教養学部の 1、3、4 年生に対して試験的に実施された。	MICCAT 開発の継続および試験的運用を始めることで、クリティカル・シンキングの効果的測定についての理解が深まり、その研究が加速された。データ分析を基に、学生にとって意味のあるテスト開発が議論され、テストの改善に役立った。
11 月	アクティブ・ラーニングのベスト・プラクティスに関する FD（平成 28 年度第 2 回）を行う。	
	ベスト・プラクティスに関する FD が行われて、教員間でアクティブ・ラーニングに関する知識を共有した。	ベスト・プラクティスに関する FD を開催することで、本学独自のアクティブ・ラーニングの研究・教育の手法について教員間でその知識を共有し、今後のベスト・プラクティスの体系化の推進に役立った。体系化が進むにつれて、より意図的かつ効果的に学生に対してアクティブ・ラーニングを行うことが期待でき、学生への教育効果も上がるものと考えられる。
11 月	アクティブ・ラーニングのベスト・プラクティスに関する第 2 回目のシンポジウムを開催する。	
	11 月 12 日に東京で、「2016 アクティブ・ラーニングシンポジウム」を開催した。アクティブ・ラーニンググループの発表「本学におけるアクティブ・ラーニングの可視化」(担当: アン・ハワード准教授、カタリーナ・モーク講師)を中心とし、以下の内容ですべてのワーキンググループがこれまでの活動を発表した。「クリティカル・シンキングテストの開発」(担当: クリストファー・ジョンソン講師)、「e-ポートフォリオを使ったアクティブ・ラーニングの成果の可視化」(担当: ア	今年度は東京でシンポジウムを開催することで、日本全国の教員及び研究者から本学のアクティブ・ラーニングのベスト・プラクティスに関する貴重な意見を聴くことができた。本学 AP の概要及びそれぞれのワーキンググループがこれまでの活動を発表した。また、アクティブ・ラーニングに関するワークショップも開き、有効なアクティブ・ラーニングの教授法を紹介し、参加者はその教授法を体験しながら学ぶことができた。参加者からは概ね肯定的な評価を頂いたが、同時にそれぞれのワーキンググループの課題も明確にすること

	<p>ンデルソン・パッソス准教授)、「学修目標と学修成果測定のためのルーブリック」(担当:ロイド・ウォーカー学部長補佐)。その他にも、クリスマス教授による「アクティブ・ラーニングワークショップ」も開催された。</p>	<p>ができ、今後の効果的事業推進に活かすことができる情報を得ることができた、本学にとって貴重なシンポジウムとなった。また、本学と同様のアクティブ・ラーニング(テーマ I) 及び学習成果の可視化(テーマ II)の AP 事業に取り組んでいる大学関係者も来場し、シンポジウム後に活発に意見交換が行われて、本学の AP 事業を他の高等教育機関へ発信することもできた。</p>
12 月	MICCAT の開発と成果に関する FD 報告会を行う。	
	<p>ワーキンググループの担当教員により本学独自のクリティカル・シンキングテスト (MICCAT) の開発と成果に関する FD が行われた。</p>	<p>現在、開発中の MICCAT の内容及び今年度の試験的運用に関する成果が FD 報告会で発表され、MICCAT の教員理解を促進することができた。また、授業において、MICCAT に基づいたクリティカル・シンキングの教授法も議論され、クリティカル・シンキングを育成する指導法の発展に役立ち、学生への効果も期待できる。</p>
1 月～ 3 月	ルーブリック・ベース・シラバスの成果分析(評価・検証)を行い、成果分析に基づいた見直しを行う。	
	<p>ルーブリック・ベース・シラバス・ワーキンググループを中心に、本学におけるルーブリック・ベース・シラバスの成果分析(評価・検証)が行われた。</p>	<p>これまでのルーブリック・ベース・シラバスの成果分析に基づき、より効果的なルーブリックの活用法が議論された。これにより、今後、教育効果の上がるルーブリック使用を促進できる。</p>
1 月～ 3 月	e-ポートフォリオの運用に関する評価・検証を行い、必要な見直しを行う。	
	<p>e-ポートフォリオ・センターを中心に、本学における e-ポートフォリオの運用に関する評価・検証を行った。</p>	<p>e-ポートフォリオセンターが中心となって、今年度の e-ポートフォリオの運用に関する評価・検証を行い、今後のアクティブ・ラーニングにおける e-ポートフォリオの効果的な運用について見直しを行った。来年度以降の e-ポートフォリオの活用法が明確になり、より学生の学修をサポートできるような e-ポートフォリオの使用法も議論された。</p>

2 月	MICCAT の成果分析（評価・検証）を行う。	
	クリティカル・シンキング・ワーキンググループを中心に、MICCAT の成果分析（評価・検証）を行った。	MICCAT 初版の有効性を確認し、今後の課題が明確になり、より効果的な MICCAT 第 2 版の作成が始まった。これにより、学生のどのようなクリティカル・シンキング能力を育成すべきかがより明確となり、その能力を育成させるアクティブ・ラーニングの手法の開発にも役立つ。
3 月	平成 28 年度の年次報告を行い、外部評価委員会による評価を受ける。	
	平成 28 年度の事業の進捗状況と成果の年次報告を行い、平成 29 年 3 月 24 日に「平成 28 年度宮崎国際大学 AP 外部評価委員会」を開催し、本学の AP 事業全般に関して、昨年度に引き続き、外部評価を受けた。外部評価委員会は、学外の有識者 3 名（林透山口大学准教授、藤埴智一宮崎大学准教授、中村清子テレビ宮崎報道記者）、本学の卒業生 1 名（現高校英語教諭）、本学在学学生 1 名で構成された。	外部評価委員会の構成を、アクティブ・ラーニングを研究課題としている大学教員 1 人、本学と同じ AP テーマ I・II 採択校で AP 担当の大学教員 1 人、現在本学の授業を受けている学生 1 人、その成果を持って社会で、かつ高校の教育現場で活躍する卒業生 1 人、そして、教育現場とは違った分野で活躍する有識者 1 人、とし、教育現場のみならず様々な観点から、本学の AP 事業への取組についての評価を受けた。平成 28 年度の AP 事業内容の問題点の把握と、今後の事業活動における見直しや改善点が明確になると共に、平成 29 年度の効果的事業展開についても貴重なアドバイスを受けることができた。本学側からの AP 事業の趣旨、目的、そして進捗状況等に関する説明に対し、外部評価委員からは活発な質問と意見があり、外部評価委員会はその主旨に沿い、本事業の PDCA を適切に行うという観点からみて、成功裏に終わったものと考えられる。

III. 平成 28 年度活動報告

1. ワーキンググループの活動報告

アクティブ・ラーニングワーキンググループ (ALWG)

Group Members (グループメンバー): Gregory Dunne(リーダー), Cathrine Mork, Anne Howard, Aya Kasai, Haruko Aito

Summary of Working Group Activity this year 今年度のワーキンググループの活動の要約

Activities 2016-17

The study group embarked on surveying teachers and students with regard to active learning practice on campus. This was done as a means of acquiring information and data on how often particular strategies were being used in and out of class. This research followed upon our earlier work of building an index of active learning strategies in use at MIC and then categorizing them into readily understood heuristic matrix. The ongoing survey work on the teachers and students is continuing as we gather more information on which strategies are being used, how often they are being used and in which classes they are being used. It is thought that this information will allow us to eventually determine which strategies constitute “best practices” in active learning at MIC. The surveys will allow us to forgo the building of a documentation system, which was earlier considered as a means of determining “best practices.” The group feels that the surveys are a much more efficient way of gathering the needed information. Much of the year has been spent in designing and implementing the surveys.

In October, the study group presented an FD on campus and informed the faculty of their work, past, present and future. In Nov, the group presented their preliminary findings at the AP Active Learning symposium in Tokyo. In Feb, Professor Mork travelled to Kumamoto to speak about categorization of active learning strategies at Sojo University Teaching and Learning Forum: Conference on “Active Learning in a Globalized World.” At the end of the semester fall semester in February, both teachers and student surveys were conducted.

今年度の活動 (2016 年 4 月から 2017 年 3 月)

まず、ALWG は学内でのアクティブ・ラーニング (AL) を把握するために、教員及び学生へのアンケート調査に取り組みました。目的は、授業や授業外でどのくらいの頻度で特定の AL の手法が使われているかのデータを得るためです。本学で使用されている AL の手法をインデックス化し、理解しやすい表の上で AL の手法を分類していくという ALWG がこれまでに行った研究に基づいて、この調査は行われました。どの AL の手法がどの授業でどの頻度、使用されているかのデータを得るために、このアンケート調査は現在も続いています。この調査からのデータは、

後に効果的な AL の手法を特定するために役立つと考えています。ALWG は、アンケート調査でより効率的に必要なデータを収集できると考えていて、このアンケート調査の作成・実行のために時間を費やしました。

10 月には、学内の FD（教員へのワークショップ）を通じて、ALWG の過去、現在、そして未来の活動を本学の教員に報告しました。11 月に、東京で開催したアクティブ・ラーニングシンポジウムの中で、初期データを発表しました。2 月に、ALWG のモーク先生が熊本県の崇城大学で行われた「Active learning in a Globalized World」にて、ALWG のアクティブ・ラーニングの分類に関するポスター発表を行いました。また、平成 29 年度 2 月には、学生及び教員へのアンケート調査で引き続き、AL のデータを収集しました。

Plan for Next Year:来年度の計画

Plan 2017-18

Going forward next year, the study group intends to develop and refine its survey practice related to active learning. This will entail more surveying of both teachers and students. The goal is to acquire a significant amount of data on the use of active learning strategies in the classroom as reported by teachers and to also collect data on the students to ascertain to what degree they are aware of the strategies being used. It is thought that this frequency of use determination will aid the study group significantly in determining which active learning strategies in use at MIC constitute best practice.

In addition to the ongoing survey work, the study group intends to work more closely with the study group on critical thinking in order to more clearly draw out the relationship between active learning and the development of critical thinking skills. We would like to determine which active learning strategies are most beneficial within specific disciplines for the development of critical thinking skills.

2017-18 の活動予定

来年度は、AL に関するアンケート調査を更に改良する予定です。これによって、教員及び学生から更なるデータを収集します。この目的は、教員が授業で使用している AL の手法に関するより多くのデータを収集することです。また、教員の使用している AL の手法を学生はどれくらい認識しているかを調査することも目的としています。このデータを収集することで、本学で使われているどの AL の手法が効果的なのかを特定するのに役立ちます。

現在行っているアンケート調査の他に、AL とクリティカル・シンキング（CT）の発達に関連性を調べるために、ALWG は CT ワーキンググループと連携し活動する予定です。これによって、特定の科目において、CT の能力を育成するにはどの AL の手法が有益なのかを特定したいと思います。

How to Achieve the Final Goal of your WG

どのようにして、ワーキンググループの最終目標を達成するかについての記述

Vision 2018-2020

In 2018, we will have ample data (from our surveys), reflective of the active learning strategies in use at MIC and their frequency of use within specific disciplines. Armed with this data we will be able to determine active learning “best practices” within specific disciplines. We may also be able to determine which strategies the students themselves feel to be most desirable and effective in helping to develop their critical thinking skills. We envision the development of a website or data base that will house lessons plans that incorporate best practices in active learning strategies to be easily accessed by both MIC faculty and by instructors teaching at other colleges and university in Japan. This will significantly enhance visibility of best practices in active learning at MIC. In 2018 and 2019, we will be working more closely with the study group on critical thinking. We will work to more fully clarify the relationship between active learning and the development of critical thinking skills.

2018-2020 のビジョン

2018 年には、本学で使用されている AL の手法及び特定の科目で使用されている AL の頻度を反映した多大なデータをアンケート調査から収集できます。このデータを解析することで、特定の科目における有効的な AL の手法が特定できます。また、CT 能力を養成するのに最も望ましく役に立つと学生が考える AL の手法も特定することができます。ALWG の研究を続けることで、本学の教員のみならず、日本の他の大学で教えている教員も使用できる、効果的な AL の手法を盛り込んだ教授案を整理し保存するウェブサイトやデータベースの構築ができます。データベースを作成することで、本学での効果的な AL の手法を可視化することに非常に役立ちます。2018 及び 2019 年度には、CT ワーキンググループと連携して活動し、AL と CT 発達の関連性を明らかにしたいと思います。

アクティブ・ラーニング WG の具体的な活動内容

List of AP-related Faculty Development AP 関連の FD

FD1	
Date 日付	June 9, 2016
Number of participants 参加人数	12
Title タイトル	Enhancing Active Learning Tool Kit: Using Drama in Classroom, By Dr. Aya Kasai アクティブ・ラーニング技法の充実：授業でのドラマ手法の活用
Purpose 目的	To develop faculty's range and knowledge of active learning strategies that they may wish to consider using in their classrooms. 授業で応用できるアクティブ・ラーニングの手法の知識を増やし範囲を広げるため
Content of FD 内容	Drama is frequently used in MIC classes to facilitate active learning. Dr. Kasai share drama warm-up exercises from drama therapy, theatre of the oppressed and playback theatre that enhance learning, fun and care in classrooms. アクティブ・ラーニングを促進するために、ドラマの手法は本学の授業で取り入れられることがあります。この FD では、学習効果、楽しさなどを促進するドラマ療法を応用した授業内で使用できるアクティブ・ラーニングのウォームアップエクササイズを紹介します。
Result of FD 結果	The faculty participated actively in this workshop and learned how to adapt and apply this strategy in their varied classes. 教員はこのワークショップに積極的に参加し、自分の授業でこの手法の効果的な活用方法を学習することができた。
FD2	
Date 日付	October, 24 th , 2016
Number of participants 参加人数	13 人
Title タイトル	Defining “Best Practices” in Active Learning at MIC: A provisional summary of ongoing observations and conversations regarding the use of active learning teaching strategies. By Dr. Gregory Dunne 本学でのアクティブ・ラーニングに関する「ベスト・プラクティス」の定義：これまでの観察における暫定的な総括及びアクティブ・ラーニングの教授法の使用に関する対話

Purpose 目的	Knowledge on research and educational methods are shared among faculty members and systematization of best practices is promoted. アクティブ・ラーニングの研究及び教育方法に関する知識を教員間で共有し、ベスト・プラクティスのシステム化を推進するため
Content of FD 内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. AP Grant Background: What it is? And how “Active Learning” is involved in the grant. (Increased Visible of Active Learning Strategies) 2. How the Study Group has approached the Challenge and Progress Made. 3. Future Directions <ol style="list-style-type: none"> 1. AP 事業の背景について (AP とは何か? AP におけるアクティブ・ラーニングの役割) 2. これまでの ALWG の取組及び進捗状況 3. これからの活動
Result of FD 結果	Faculty informed and updated on the current research and future direction of the study group’s activity as related to the grant. 教員に対して、AP に関わる ALWG の現在の研究及び今後の方向性について、周知することができた。

List of Other Presentations, excluding FD. FD 以外の発表

1	
Date 日付	November 12, 2017
Conference Name& Location 学会名及び場所	AP Active Learning Symposium, Tokyo
Title タイトル	AP Active Learning Symposium Active Learning Working Group Presentation
Content 内容	The presentation took the form of a yearly report and update as to the activities of the study group on Active Learning and how those activities could be of use to other colleges and universities. In brief, the groups continued work on documenting best practices in active learning strategies were shared. Chief among our activities have been the surveying of teachers and students as to which strategies have been used within classes and the building of a matrix which categories how various strategies are used and for what purpose.

	<p>このプレゼンテーションでは、ALWG の活動報告及び、どのようにグループの活動が他大学等で役に立つかに関するグループの年次報告を行なった。簡潔に言うと、プレゼンテーションでは、グループが行っているベスト・プラクティスを見出すためのアクティブ・ラーニングの手法の研究調査が共有された。グループの主な活動は、授業でどの手法が使用されたかの教員及び学生への調査及び、何の目的でどの手法が使用されたかを類型化するためのマトリックスの作成であった。</p>
2	
Date 日付	February 4 th , 2017
Conference Name& Location 学会名及び場所	<p>Active Learning in a Globalized World, Sojo University Teaching and Learning Forum Kumamoto 崇城大学でのアクティブ・ラーニング学会「Active Learning in a Globalized World」</p>
Title タイトル	<p>Heuristic for Categorizing Active Learning Teaching Strategies AL の教授法の類型化への発見的問題解決法</p>
Content 内容	<p>As part of its project with MEXT's Acceleration Program (AP) Grant, the Miyazaki International College Active Learning Working Group (MIC ALWG) compiled and defined a list of over 30 of what we have come to term Active Learning Teaching Strategies. (ALTSs). These strategies are essentially the teaching techniques that instructors employ in their classes to engage students in the learning process, encouraging them actively interact with the materials, the instructor, and each other and employ various levels of critical thinking. The list was compiled by researching strategies used at several American universities and through class observations and interviews with teaching faculty at MIC. The ALWG decided to organize the strategies in a logical fashion in hopes of determining how the AL strategies differ from each other, and how much of what kinds of activities are currently being employed at MIC. The group's efforts resulted in a categorization heuristic that may be of use to other institutions wishing to clarify their educators' preferred practices for AL teaching techniques. This poster presented includes a visual of the MIC ALWG's "matrix" and the group's compilation of ALTS's will be made available to those interested.</p> <p>AP 活動の一環として、ALWG は、30 種類以上のアクティブ・ラーニングの教授法を定めて、リストを作成しました。この AL の教授法という</p>

	<p>のは、学生が授業内容、教員及び他の学生と積極的に関わるように促し、様々なクリティカル・シンキングを用いるようする、授業内での学生への教授の技法です。いくつかのアメリカの大学で使用されている教授法を調べ、本学での授業見学や教員へのインタビューを通じて、この教授法のリストを作成しました。アクティブ・ラーニングの手法はお互いどう違うのか、どの手法がどの頻度で本学では使用されているのかを見出すために、ALWG は AL の手法を論理的に整理しました。AL グループの活動によって、教員が使用している AL の手法を明確化したい他の高等教育機関も使用できる AL を類型化できる発見的問題解決法が作成されました。このポスタープレゼンテーションでは、その類型可能なマトリックスの紹介及びこれまでの AL 調査結果を発表します。</p>
--	--

List of Data Collection Activity (Survey, Observation, Interview, etc.) データ収集活動

Data Collection 1.	
Date 日付	July 25, 2016
Purpose 目的	<p>The teacher questionnaire (a pilot) was conducted to ascertain which active learning strategies instructors are using.</p> <p>どの AL の手法を教員が使用しているのかの（パイロット）調査をするため</p>
Data Collection Method データ収集方法	Questionnaire (electronic) オンライン調査
Characteristics of participants 調査対象者（誰か、人数）	<p>23 of 29 potential respondents from the School of International Liberal Arts completed the survey</p> <p>国際教養学部教員の 23 人</p>
Major Findings 主な調査結果 (Please use a separate paper if needed)	<p>All of the strategies listed in the questionnaire were chosen by at least one teacher. At the top of the list for all teachers are “pause for reflection,” “interactive lectures,” “free discussion,” and “group-work.”</p> <p>“Pause for reflection” was used by almost all of the instructors.</p> <p>The most often used strategies fell into the “outward extemporaneous” quadrant in our matrix and the least commonly used fell into “inward extemporaneous” quadrant. This may be reflective of some sort of bias in how we think about active learning, but it may be indicative of how instructors want to spend their class time—they may feel that it is a good opportunity for students to interact. Inward extemporaneous may simply not lend itself to many</p>

	<p>things—when we are doing something alone which takes higher order thinking skills, we may just need more time or preparation to do it. Finally, teachers felt that completing the survey had enhanced their awareness of these strategies, writing comments saying that it helped them reflect on their practice or get new ideas.</p> <p>調査の結果、質問票に含んだ手法は少なくとも 1 人の教員に使用されていることがわかった。また、“pause for reflection” “interactive lectures” “free discussion” 及び“group-work”が、頻繁に使用されていたことがわかった。また “Pause for reflection”は、ほぼすべての教員が使用していた。</p> <p>一番頻繁に使用される手法は「外向き即興型」と分類される AL の手法で、一番使われていない手法は「内向き即興型」に分類される手法であった。AL に対する考え方の偏見から、この結果になった可能性はあるが、これは本学教員が学生にアクティブに授業参加する機会を与えたいことを示しているのかもしれない。内向き即興型の AL は、単にあまり他の活動につながらない場合が多い。つまり、高次元の思考能力を伴う個別の活動をするときは、それをするための準備がもっと必要になるので、内向き即興型の AL はあまり使われないのかもしれない。</p> <p>最後に、この AL のアンケートに取り組むこと自体が、AL の様々な手法を知るうえで役に立ったと教員は回答した。自身の教授法や新しい教授法のアイデアを得るのに役立ったというコメントがあった。</p>
Data Collection 2	
Date 日付	July 25, 2016 STUDENT QUESTIONNAIRES 学生調査
Purpose 目的	<p>The purpose of the student questionnaires was to gain a fuller understanding of student perceptions on the frequency of ALTS used by instructors as well as their views on Bloom’s hierarchy of critical thinking as it related to that given course.</p> <p>この調査の目的は、教員が使用する AL の頻度に関する学生の認識及び特定の授業におけるブルームのクリティカル・シンキングに関する学生の認識をより深く理解するためである。</p>
Data Collection Method データ収集方法	Questionnaire (electronic) オンライン調査
Characteristics of participants	A total of 165 students responded to the survey, surpassing requirements for a valid sample size.

<p>(Who and how many) 調査対象者（誰か、人数）</p>	<p>A Selective Sampling approach was taken in the piloting. We attempted to select students in courses that were distributed among language courses in the 1st and 2nd years, team-taught CLIL courses in the 1st and 2nd years, and content-only courses taught in the 3rd and 4th year. It was hoped that this sampling would give a good representation of learner-driven activities occurring at MIC.</p> <p>十分なサンプル数である、165名の学生がオンライン調査に解答した。選択サンプルの方法が採用され、1, 2年生の言語の授業、1, 2年生のチーム・ティーチングの授業、及び3, 4年生の授業から、アンケートに答える学生を選んだ。この方法により、学習者主体の授業活動を行っている本学の授業から、データが収集できたと考えられる。</p>
<p>Major Findings 主な調査結果</p>	<p>The teacher surveys showed that group discussions are done in many kinds of classes, and this is reflected here as well, and we can see that students actually participate in them. 36% said they participate every day and an addition 17% participate at least once per week.</p> <p>One of the surprising findings was the number of students who said they persist in challenging learning activities despite initial setbacks: 96.23 of the students. One third of the students (33.33%) said they do this every day, and an additional 32% said they do this at least once per week. Maybe we can say that students are aware of the cognitive challenge in taking college courses in English, and even in their first year they've learned to persist through difficulties. We think that this is one of the strengths of our program, which we have uncovered through this project</p> <p>教員への調査結果によると、様々な種類の授業で、グループディスカッションが行われたが、この結果は学生への調査からも明らかになった。36%の学生は毎日と回答し、更に17%は、少なくとも1週間に1回はグループディスカッションをするというのが調査結果からわかった。驚くべき結果の1つとして、約96%の学生が、初めは難しくても、学習課題に挑戦し続けると答えたことである。詳しく言うと、33%はこれを毎日続け、32%が少なくとも1週間に1度と回答した。このことは、本学学生は英語で学修する本学の授業における認知的負担を認識し、1年生の内から、挑戦し続けることの重要性を学んでいるからかもしれない。ALWGは、AP事業を通して発見したこの結果は国際教養学部の特長の1つであると考えている。</p>
<p>Data Collection 3</p>	
<p>Date 日付</p>	<p>Feb.13, 2017</p>

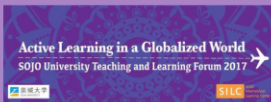
Purpose 目的	Instructor Survey 教員への調査
Data Collection Method データ収集方法	Questionnaire (electronic) オンライン調査
Characteristics of participants 調査対象者（誰か、人数）	19 ILA faculty members. 国際教養学部 of 教員 19 名
Major Findings 主な調査結果	Analysis is in process データ分析中
Data Collection 2	
Date 日付	Feb.7, 2017
Purpose 目的	<p>The purpose of this survey was to follow up on an earlier piloted version with a refined survey that could be administered to a larger number of students. It was designed to gather student perceptions of active learning in their classes: what strategies were used and which strategies they felt to be effective.</p> <p>この調査の目的は、前回行った学生への調査票を改良し、より多くの学生に調査を行うことである。調査は、授業内でのアクティブ・ラーニングに対する学生の認識、具体的に、どの手法が使用されて、どの手法を学生は効果的と感じたかを調べるためである。</p>
Data Collection Method データ収集方法	138 Students 138 人
Characteristics of participants (Who and how many) 調査対象者（誰か、人数）	<p>ILA students comprised of first, second, third, and fourth year students in classes that were team taught and single teacher taught</p> <p>The surveys were administered among language classes and content classes.</p> <p>チーム・ティーチング及び教員 1 人による普通の授業における、国際教養学部の 1, 2, 3 及び 4 年生対象。言語の授業及び普通の授業において、調査が行われた。</p>
Major Findings 主な調査結果	Analysis is in process 分析中

List of any other activity (Training Received, Conference Attended) その他の活動

Date 日付	Description of Activity 活動内容
June, 2016	<p>Publication of research article in Comparative Culture, the in-house research journal at MIC: "An Investigation into Active Learning at MIC a Beginning and the Way Forward." By Anne McLellan Howard and Catherine-Mette Mork.</p> <p>本学発行の研究雑誌: Comparative Culture に掲載された文献 「An Investigation into Active Learning at MIC a Beginning and the Way Forward.」ハワード准教授、モーク講師</p>

アクティブ・ラーニンググループの参考資料

ポスター発表: 崇城大学でのアクティブ・ラーニング学会「Active Learning in a Globalized World」



宮崎国際大学
Miyazaki International College

ACCELERATION PROGRAM

As part of the Acceleration Program for University Rebuild (AP) grant received by Miyazaki International College (MIC) from Japan's Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT) in 2014, the Active Learning Working Group (ALWG) was charged with investigating the active learning (AL) practices of MIC faculty over the next several years, in order to:

- facilitate the growth of AL by giving the MIC community a common definition
- share practices among differing disciplines (MIC has a liberal arts program featuring CLIL courses)
- improve instructors' overall teaching skills
- Increase visibility of MIC's mission to stakeholders in Japan, where knowledge and practice of AL is not so widespread (particularly in universities).

ACTIVE LEARNING DEFINED

Active learning (AL) is an approach to instruction in which students dynamically engage with the material they study through reading, writing, speaking, listening, and reflecting. It stands in contrast to traditional modes of instruction in which teachers do most of the talking and students are passive.

The philosophy of AL is at the core of the MIC program, and asserts that academic capability "... is achieved through explorative activities that require students to be actively engaged in reading, writing and discussion as part of the process of problem solving. Through this kind of active learning, students engage in the dynamic development of higher-order thinking skills that enable them to analyze, synthesize, evaluate and create."

Heuristic for categorizing active learning teaching strategies

ACTIVE LEARNING TEACHING STRATEGIES (ALTSs)

An initial list of AL teaching strategies was made through informal conversations with instructors as well as checking several US universities for the AL strategies that they use. This was followed by observations and subsequent interviews to refine the list and possibly the strategies to critical thinking goals.

AL teaching strategies include activities or techniques that require students to be active through speaking, reading, writing, and reflecting in addition to listening. The MIC AL Working Group has defined over 30 separate teaching strategies, and has created an original, two-dimensional matrix into which these strategies can be categorized. We hope to be able to draw conclusions about MIC preferred strategies and about which type of strategy is used for a certain critical thinking goal or discipline by mapping them onto the matrix below.

INWARD (interpersonal strategies that are reflective, mostly written, mostly individual)	PREPARED (strategies that allotted longer preparation or rehearsal time and involve presenting to an audience or submitting work)	OUTWARD (interpersonal strategies that involve communicative involvement with others)		
	<table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <td style="text-align: center;">Category 1</td> <td style="text-align: center;">Category 2</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">Category 3</td> <td style="text-align: center;">Category 4</td> </tr> </table>		Category 1	Category 2
Category 1	Category 2			
Category 3	Category 4			
	EXTEMPORANEOUS (strategies that are more impromptu, often in pair or small groups)			

MIC'S CURRENT ALTSs, CATEGORIZED


CATEGORY 1: INWARD-PREPARED
Written Peer Review, Creative Writing, Self-Assessment, Written Paraphrases and Summaries, Feedback Survey/ Report, Journal Writing, Response/ Reaction Writing, Senior Thesis

CATEGORY 2: OUTWARD-PREPARED
Skits and Dramatic Productions, Formal Debates and Panel Discussions, Presentations and Reverse Presentations, Creative Recitations, Surveys and Interviews, Peer Teaching

CATEGORY 3: INWARD-EXTEMPORANEOUS
Written Peer Review of Written Work, Pause for Reflection, Active Listening, Close Reading, Symbolized Paraphrases and Summaries

CATEGORY 4: OUTWARD-EXTEMPORANEOUS
Interactive Lectures, Facilitated Discussions, Free Discussions, Case Studies, Role Plays and Impromptu Skits, Jigsaw Activities, Oral Paraphrases and Summaries, Informal Debates, Group Work on Questions, Think-Pair-Share and Think-Group-Share, Oral Peer Review of Written Work

ALTS IN ALL CATEGORIES
Cooperative Student Projects, Simulations and Experiments, Community Based Projects, Student-Created Assessment Criteria



ALWG GOALS

Complete:

- identify and categorize AL teaching strategies in use at MIC
- develop questionnaires for faculty and students to access type and quantity of AL and self-directed learning at MIC - to be given at end of each semester

In progress:

- determine AL "best" teaching practices (through results of AL questionnaires, interviews, class observations)
- share AL teaching practices via faculty development seminars

Future action:

- develop a documentation system for ALTSs
- investigate the relationship between AL and the development of critical thinking skills
- investigate further into active learning practices from the student end

KEY REFERENCES

Center for Teaching and Learning, University of Minnesota
<http://www1.umn.edu/ohr/teachlearn/tutorials/active/w/half/>

MIC Institutional Self-Study, Descriptive Analysis, 2003, p. 2

An investigation into active learning at MIC: the beginning and the way forward
<http://www.mic.ac.jp/active/almgpdf2015.pdf>

CURRENT ALWG MEMBERS

Presented by Catherine-Mette Mork
(cmork@ky-miyazaki-mic.ac.jp)

Developed in conjunction with MIC faculty:
Gregory Dunne, Anne Howard, Haruko Alto, Aya Kasai

クリティカル・シンキングワーキンググループ (CTWG)

Group Members (グループメンバー) : Christopher Johnson (リーダー) , Benjamin Peters, Yuko Matsumoto, James Furse

Summary of Working Group Activity this year 今年度のワーキンググループの活動の要約

Activities 2016-17

- April - August 2016: Development of MIC Critical Thinking test. Determination of core critical thinking skills to be assessed, and formulation of test questions by which to assess those skills.
- July 2016: Presentation to President of Kansai International University on the CTWG's progress and developments.
- August – October 2016: Pre-Pilot testing of MIC Critical Thinking test. Delivery of pre-pilot tests on two occasions (to 3 and 4 2nd year students respectively), and revision of test based on student feedback.
- October 2016: Delivery of pilot MIC Critical Thinking test to 50 1st year students and 47 3rd/4th year students.
- November 2016: Participation in MIC AL Symposium in Tokyo.
- October – December 2016: Assessment of results from pilot test.
- December 2016: FD Workshop informing MIC faculty of the CTWG's development of an MIC CT test.
- January – February 2017: Determination of testing schedule for 2017-2018; refinement of analysis methods; research into available automated test evaluation systems to be used for future testing.

今年度の活動 (2016 年 4 月から 2017 年 3 月)

- 4～8 月 : 本学独自のクリティカル・シンキングテスト (MICCAT) の開発を始める。MICCAT が測る CT の具体的な能力を特定し、その能力を測るテストの質問事項を作成した。
- 7 月 : 関西国際大学の学長に対して、CTWG の概要及び活動を発表した。
- 8～10 月 : MICCAT のパイロットテスト前の確認テスト。学生数人に受けてもらい、フィードバックを得て、MICCAT を改訂した。
- 10 月 : MICCAT のパイロットテストを国際教養学部 1 年生 50 名及び 3, 4 年生の 47 名に実施した。
- 11 月 : アクティブ・ラーニングシンポジウムで、これまでの活動について発表。
- 10～12 月 : 10 月のパイロットテストの結果分析。

- 12月：学内FDにて、教員に対してMICCATのこれまでの発展について発表、
- 1～2月：来年度の学生に対するテストのスケジュールを作成し、分析方法を改良した。
また、来年度以降のテスト採点を円滑に行うため機器の調べた。

Plan for Next Year: 来年度の計画

Plan 2017-18

- April – March: Collaborate with other AP groups (in particular ALWG)

As yet the CTWG has been working to develop the MIC CT test independently of other AP working groups. However, since the purpose of the CT test is to evaluate the development of students' critical thinking skills over the course of their degree programmes, it is important that faculty are aware of the particular critical thinking skills being tested, and can incorporate the teaching and evaluation of these skills into their daily lesson planning and overall course design. To this end, the CTWG must collaborate with other AP working groups to ensure that the goals and content of the CTWG are reflected in the activities of all other groups. This is particularly important since the development of critical thinking skills constitutes the ultimate justification of all other groups: active learning must be to the end of learning critical thinking; rubrics must be to the end of assessing critical thinking; and e-portfolio must be to the end of reflecting critical thinking. Beginning in January, the CTWG will begin to collaborate more closely with the other APWGs to ensure this integrity of purpose. Doing so during this period will also enable more informed budget requests to support more integrated long-term planning.

- April – July: Review and Revise CT Pilot Test

Revision and improvement (as necessary) of the CT Pilot Test to be delivered in 2017-2018.

- April: Deliver CT Second-year Pilot Test to 3rd year students.

In April 2017 the MIC CT second-year pilot test will be delivered to 3rd year students. The majority of these students will have returned from Study Abroad, and will not have written previous versions of the CT test. By testing 3rd year students (in addition to 1st and 4th year students) as part of an overall test design the CTWG will be able to gauge students' progress in developing their critical thinking skills at the midway point in their college programme.

- April – June: Assess and Analyze April CT Second-year Pilot Test (3rd year students)

Following delivery of the CT second-year pilot test in April the results must be analyzed and compiled with the results from previous CT Pilot tests to further establish the

reliability of test questions and/or to refine them as appropriate.

- July/August: Deliver CT Second-year Pilot Test to 1st year students

In July/August 2017 the MIC CT second-year pilot test will be delivered to 1st year students. This will be the first time the incoming 2017 cohort will write the test, and will provide a baseline for analysis of future development. By testing at the end of the first semester (as opposed to at the beginning) we hope to minimize language comprehension problems that would otherwise interfere with test results.

- August – October: Assess and Analyze CT Second-year Pilot Test (1st year students)

Following delivery of the CT second-year pilot test in July/August the results must be analyzed and compiled with the results from previous CT Pilot tests to further establish the reliability of test questions and/or to refine them as appropriate.

- December: Deliver CT Second-year Pilot Test to 4th year students

In December 2017 the MIC CT second-year pilot test will be delivered to 4th year students. This will be the last time that MIC students will write the MIC CT test, and will provide the final data for analyzing development of students' critical thinking skills at MIC. The test will be delivered in December so as to avoid conflicts with senior thesis work.

- January – March: Assess and Analyze CT Second-year Pilot Test (4th year students)

Following delivery of the CT second-year pilot test in October the results must be analyzed and compiled with the results from the previous CT pilot tests to further establish the reliability of test questions and/or to refine them as appropriate.

2017-18 の活動予定

- 4月～：他のワーキンググループ（特に ALWG）と連携して活動する。

CTWG は独立して MICCAT の開発を行ってきた。しかし、MICCAT の目的は、本学での学修を通じて発達する学生の経年的な CT スキル測定なので、本学教員は MICCAT が測定する CT スキルの知識を得て、そのスキルを指導し評価することを授業プランの中に組み込むことが重要です。この目的を達成するために、CTWG は他のワーキンググループと連携して、CTWG の活動内容や目標が他のグループの活動にも反映される必要があります。具体的には、AL を通じての CT の育成、CT を盛り込んだルーブリック、CT 能力を反映した e-ポートフォリオの活用です。

- 4月：MICCAT 第2版を国際教養学部3年生に実施する

新3年生の大半が昨年度に留学していたので、MICCAT を受けていない。新3年生に受けてもらうことで、本学での4年間の半分を終了した学生の CT 能力を測ることができる。

- ・ 4～6 月：MICCAT 第 2 版の結果分析

MICCAT 第 2 版実施後に、昨年度のパイロットテストの結果と共にその結果を分析し、必要に応じてテストの改訂をする。

- ・ 7, 8 月：1 年生に MICCAT 第 2 版を実施する。

新入生への初めての MICCAT の実施となるので、新 1 年生のベースラインとなるデータを収集することができる。学期の初めではなくて、7 月に実施する理由は、新入生は英語に親しむ時間が必要だからであり、英語力不足によるテストへの影響を少なくすることである。

- ・ 8～10 月：MICCAT 第 2 版の結果分析

1 年生に実施したテスト結果を分析し、必要に応じてテストを改良する。

- ・ 12 月：4 年生に MICCAT を実施する。

4 年生にとっては MICCAT を受ける最後となるので、本学学生の卒業前のクリティカル・シンキング能力を把握する貴重なデータとなる。12 月に実施する理由は、1 月の卒業論文の忙しい時期を避けるためである。テスト後は成果分析し、必要に応じて改定する。

Description of How to Achieve the Final Goal of your WG

どのようにして、ワーキンググループの最終目標を達成するかについての記述

Vision 2018-2020

Full completion of pilot testing of MIC CT test with all appropriate refinements, and scheduling of regular ongoing testing of MIC students. Collaboration with other APWGs to ensure core critical thinking skills are incorporated into Active Learning, Rubrics, and the e-portfolio system.

2018-2020 のビジョン

MICCAT を引き続き実施し、結果分析に応じてテストを改良し、信頼性の高いテストを作成する。また、他のワーキンググループと連携して、MICCAT のクリティカル・シンキング能力が、アクティブ・ラーニング、ルーブリック及び e-ポートフォリオに取り入れるようにする。

クリティカル・シンキング WG の具体的な活動内容

List of AP-related Faculty Development : AP 関連の FD

FD1	
Date 日付	December 8, 2016
Number of participants 参加人数	7 人
Title タイトル	CTWG: Developments and Prospects クリティカル・シンキングワーキンググループのこれまで及び今後の活動
Purpose 目的	To provide an update on the working group's recent developments and to discuss its plans going forward. CT ワーキンググループの進捗状況を発表し、今後の計画を議論するため
Content of FD 内容	The workshop included a review of the MIC Critical Thinking test and its pilot delivery in October 2016, analysis of its results, and a discussion of how the core skills assessed by the test might be incorporated into the activities of other AP working groups. MICCAT のこれまでの作成状況、2016 年に行われたパイロットテスト実施及び結果分析の発表。 MICCAT が測定する能力をどのようにして他のワーキング・グループの活動に内容に反映するか議論
Result of FD 結果	The above was achieved. 上記の目的は達成された。

List of Other Presentations, excluding FD FD 以外の発表

1	
Date 日付	July 22, 2016
Conference Name& Location 学会名及び場所	Information session with the President of Kansai International University, Miyazaki International College 関西国際大学長への発表
Title タイトル	Development and Progress of the MIC AP CTWG MICCAT の開発及びこれまでの成果
Content 内容	Presentation on the activities of MIC's AP CTWG MICCAT 開発のグループの活動

2	
Date 日付	November 12, 2017
Conference Name& Location 学会名及び場所	MIC AL Symposium, Tokyo 2016 アクティブ・ラーニングシンポジウム
Title タイトル	Developing Critical Thinking Assessment MICCAT の開発
Content 内容	A review of the CTWG's development of a critical thinking assessment tool. ワーキンググループの MICCAT 開発に関わるこれまでの活動

List of Data Collection Activity (Survey, Observation, Interview, etc.) データ収集活動

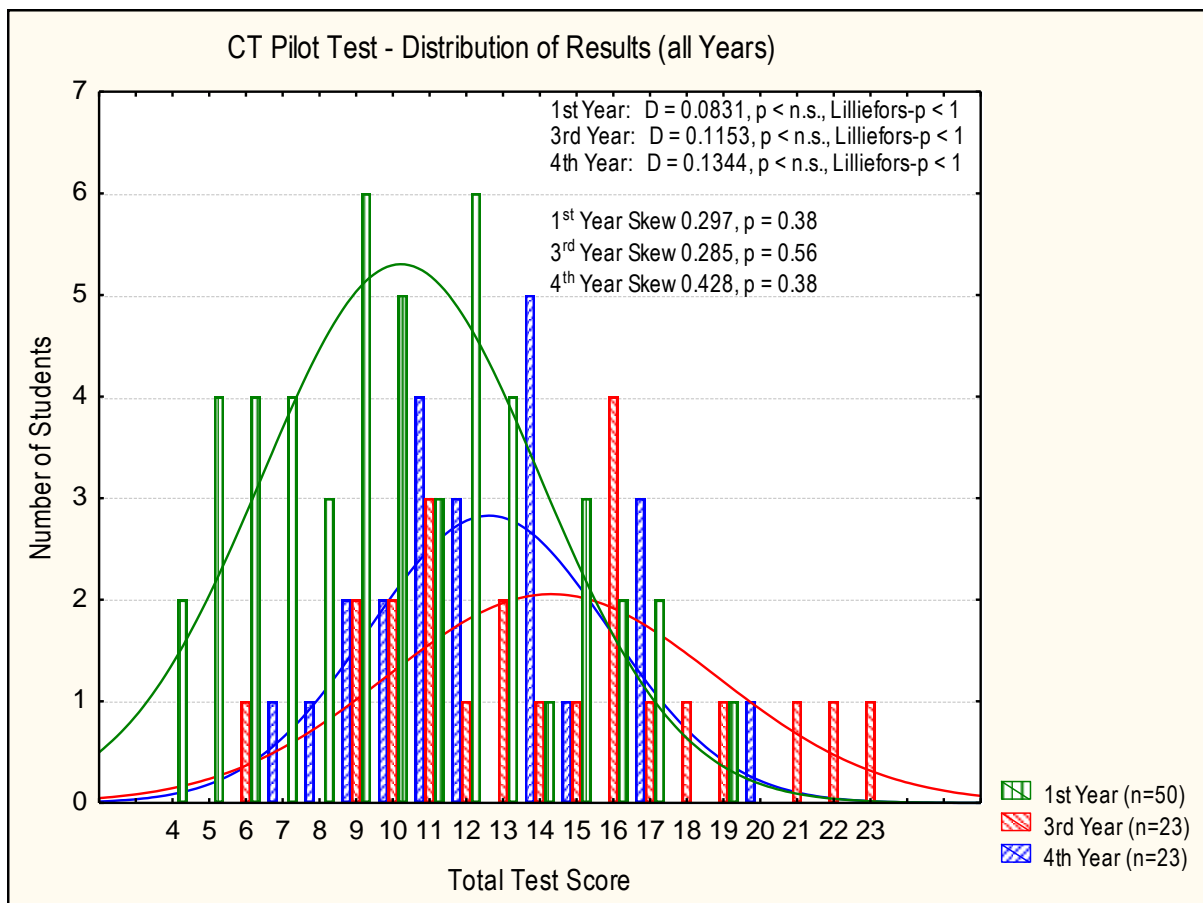
Data Collection 1	
Date 日付	August 2, 2017
Purpose 目的	To gather information and feedback on the CTWG's pilot test. MICCAT のパイロットテスト前の情報収集
Data Collection Method データ収集方法	Pre-Pilot Test #1, and post-test debriefing interviews MICCAT のパイロット前のテスト及びインタビュー
Characteristics of participants (Who and how many) 調査対象者（誰か、人数）	3 2 nd year students 国際教養学部 2 年生 3 名
Major Findings 主な調査結果	<p>Determination of problematic vocabulary on the CT test; determination of ambiguities in questions and answers on the CT test; determination of difficult grammatical structures on the CT test; determination of perceived difficulty of MIC CT test compared with TTU's CT test (delivered the previous year).</p> <p>テストを改善するために以下の事項を特定した。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 難しい語彙 • 分かりにくい質問及び解答の文章 • 難しい文法構造 • 昨年度実施したテネシー工科大学のテストと比較して、難しい項目

Data Collection 2	
Date 日付	October 6, 2017
Purpose 目的	To gather information and feedback on the CTWG's pilot test. Pre-Pilot Test #2 included revisions based on feedback from students who wrote Pre-Pilot Test #1. パイロットテスト前の MICCAT の更なる改良
Data Collection Method データ収集方法	Pre-Pilot Test #2, and post-test debriefing interviews MICCAT のパイロットテスト前のテスト（２回目）及びインタビュー
Characteristics of participants (Who and how many) 調査対象者（誰か、人数）	4 2 nd year students 国際教養学部 2 年生、4 名
Major Findings 主な調査結果	Determination of problematic vocabulary on the CT test; determination of ambiguities in questions and answers on the CT test; determination of difficult grammatical structures on the CT test; determination of perceived difficulty of MIC CT test compared with TTU's CT test (delivered the previous year). 第 1 回目と同様に、実際にパイロットテストを行う前のテストのチェックを行った。
Data Collection 3	
Date 日付	October 18 & 20, 2016
Purpose 目的	To gather preliminary data on the reliability and validity of the MIC CT test, and to revise the test accordingly. MICCAT の信頼性及びに関する初期データを収集するため
Data Collection Method データ収集方法	Pilot Test パイロットテスト
Characteristics of participants (Who and how many) 調査対象者（誰か、人数）	50 1 st year students 国際教養学部 1 年生 50 名 47 3 rd /4 th year students 国際教養学部 3、4 年生 47 名
Major Findings 主な調査結果	The number of students who took the test provided a usefully large overall sample size. The overall pattern of results from analysis supports the conclusion that there are not any obvious problems with the CT Pilot Test,

	<p>either in terms of design or difficulty for MIC students. Distributions of scores for 1st year, 3rd year and 4th year students were normal, and suggestive of a test that is moderately difficult. These findings justify continuing to administer the test with as few changes as possible to enable deeper analysis.</p> <p>標本の数には十分な学生数のデータを得ることができた。データ分析の結果、MICCAT の構成及び本学学生にとっての難易度に関しては、大きな問題はなかった。点数の分布は標準的で、テストはやや難しいということを示している。この結果は、MICCAT の大きな改訂は必要なく、引き続きテストを実施し、改良していけば良いということを示している。</p>
--	--

クリティカル・シンキンググループの参考資料

学年別：クリティカル・シンキングパイロットテストの結果



e-ポートフォリオワーキンググループ (ePWG)

Group Members (グループメンバー) : (SILA) Debra Occhi (リーダー) , Anderson Passos, Yukichi Shimizu; (SEDU) Adam Murray, Mai Sakakura

Summary of Working Group Activity this year

今年度のワーキンググループの活動の要約

Activities 2016-17

- Provided orientations for faculty and first year students in both departments (initial orientation, Intro to LA, and end-of-year page orientation) second year SILA (study abroad page) n.b., transforming the existing practice of study abroad portfolio into e-portfolio format results in savings of materials and postage while allowing Study Abroad leader to view portfolio creation in process. I suggest this might be something to show off in the report as it dovetails AP with existing practices of the college
- Created materials for SEDU end-of-year page criteria
- Worked with new AP leader to develop e-portfolio center
- Re-established roles/responsibilities according to AP grant with the successful establishment of the e-Portfolio center
- Through consultation with stakeholders, laid groundwork for development of SILA 3rd & 4th year e-portfolio pages to enhance senior thesis process
- Presented results of implementation and in-class case study at conferences and symposium

2016-17 の活動

- 教員及び学生へのオリエンテーションを実施した
新1年生へのオリエンテーション (国際教養学部、教育学部)、e-ポートフォリオ紹介、リベラルアーツ入門、学年末ページのためのオリエンテーション
- 国際教養学部2年生の留学ページに関するオリエンテーション
留学ポートフォリオは紙ベースで行っていたが、e-ポートフォリオに変更することによって、郵送や紙などの資源を使わずに、インターネット上でポートフォリオ作成の過程を随時見ることが可能になった。
- 教育学部1年生の学年末ページを評価するための評価基準作り
- e-ポートフォリオセンターを再構築
- AP事業の計画に沿ったe-ポートフォリオセンター確立のための役割や責任の再確認
- 国際教養学部3, 4年生の卒業論文作成のためのe-ポートフォリオの活用案の作成
- 学会やシンポジウムでのe-ポートフォリオ・ワーキンググループの活動発表

Plan for Next Year: 来年度の計画

Plan 2017-18

- Provide orientations for faculty and students in both departments as needed (1st, 2nd, 3rd year SILA and all years in SEDU)
- Develop or improve existing orientation materials to support these orientations
- Up to here is the extent of the AP plan for us
- Explore & implement ways to better support faculty/courses that incorporate e-portfolio (ICT, 1st year Intro to LA & Global Citizenship in SILA and whatever SEDU may be doing to enhance integration)
- Work with e-portfolio center to support development of new e-portfolio criteria.

2017-18 の活動予定

- 引き続き、教員及び学生へのオリエンテーションを行う。国際教養学部 1, 2, 3 年生及び教育学部全学年、教員へのオリエンテーション（必要に応じて）
- オリエンテーションを円滑にするために、オリエンテーション資料を見直し改訂する。
- 教員が授業でより e-ポートフォリオを有効活用する方法を考える。今年度は、ICT、リベラルアーツ入門、世界市民の授業で e-ポートフォリオが使用されたが、更に授業で活用できるようにする。
- 必要に応じて、新しい e-ポートフォリオの評価項目等を作成する。

どのようにして、ワーキンググループの最終目標を達成するかについての記述

Vision 2018-2020

The final goal is campus-wide implementation for e-portfolio use by all students for visualization of active learning outcomes. The e-portfolio system is already set up to support creation and assessment of evidence-based portfolios using rubrics as specified in the AP grant. The WG must continue orientation and outreach activities to support students and faculty, in cooperation with the e-portfolio center activities, to achieve these goals. We will continue using the PDCA cycle to improve our efforts.

2018-2020 のビジョン

e-ポートフォリオ・ワーキンググループの最終目標は、学修成果の可視化のための全学的な e-ポートフォリオ活用です。これまでの活動により、e-ポートフォリオを作成し評価する e-ポートフォリオシステムは構築されました。目標を達成するために、e-ポートフォリオセンターと協力して、ワーキンググループは教員及び学生の e-ポートフォリオ活用をサポートするために、引き続きオリエンテーションを行います。PDCA を使用しグループの活動をチェックして改善していきます。

e-ポートフォリオ WG の具体的な活動内容

List of AP-related Faculty Development AP 関連の FD

FD1	
Date 日付	8 April 2016
Number of participants 参加人数	2 人
Title タイトル	e-Portfolio orientation: A follow-through on the first steps of Mahara presented in September 2015 e-ポートフォリオ・オリエンテーション：マハラの第一歩のフォロースルー（2015 年度の 9 月に行われたものを改めて希望者に）
Purpose 目的	Teach how to use the e-portfolio system e-ポートフォリオ・システムの使用法を教えるため
Content of FD 内容	See materials from 2015 & orientation Moodle course Hands-on portfolio creation, Q & A 基本的な e-ポートフォリオの作成方法及び質疑応答
Result of FD 結果	Faculty learned basics of e-portfolio system 教員は e-ポートフォリオシステムの基礎を学んだ
Student orientation 学生へのオリエンテーション	
Date 日付	22 April 2016 SILA first years, 8 July 2016 SEDU first years
Number of participants 参加人数	教育学部 28 人
Title タイトル	e-Portfolio orientation e-ポートフォリオ・オリエンテーション
Purpose 目的	Teach how to use the e-portfolio system e-ポートフォリオ・システムの使用法を教えるため
Content 内容	See materials from 2015 Hands-on portfolio creation, Q & A
Result 結果	Students learned basics of e-portfolio system 学生は e-ポートフォリオシステムの基礎を学んだ
Student Orientation	
Date 日付	23 June 2016
Number of participants 参加人数	32 人
Title タイトル	e-Portfolio orientation for SILA 2 nd years 国際教養学部 2 年生への e-ポートフォリオ・オリエンテーション

Purpose 目的	To create a page collection for the Study Abroad portfolio 留学のためのページ作成
Content 内容	Hands-on portfolio creation, Q & A
Result 結果	Students created a page collection for the Study Abroad portfolio and submitted secret URLs by email to Occhi, who replied with editing suggestions and shared the URLs with Nishimura and Ozeki for assessment purposes. 学生は留学のためのページのコレクションを作成し、そのページが外部から見れるように秘密の URL を提出した。
Student Orientation	
Date 日付	11 Jan 2017 (18 th , 19 th , 20 th , and 23 rd for small group or individual session)
Number of participants 参加人数	34 人
Title タイトル	e-Portfolio orientation for EDU students: End-of-year Page 教育学部 1 年生の学年末ページのためのオリエンテーション
Purpose 目的	To create an end-of-year page for 1 st year EDU 教育学部 1 年生が学年末ページを作るため
Content 内容	Hands-on portfolio creation, Q & A
Result 結果	Students created a Mahara page for an EDU 1 st year end-of-year page and submitted secret URLs by email to Ozeki, who gave them feedback on their page using a rubric. 教育学部の 1 年生は、1 年の学修をまとめた学年末のページを作成し、秘密の URL を提出した。
Student Orientation	
Date 日付	13 & 17 Jan 2017 (20, 23, 24, and 25 for small group or individual session)
Number of participants 参加人数	55 人
Title タイトル	e-Portfolio orientation for SILA students: End-of-year Page 国際教養学部 1 年生の学年末ページのためのオリエンテーション
Purpose 目的	To create an end-of-year page for 1 st year SILA 国際教養学部 1 年生が学年末ページを作るため
Content	Hands-on portfolio creation, Q & A

内容	
Result 結果	Students created a Mahara page for a SILA 1 st year end-of-year page and submitted secret URLs through Moodle to Ozeki, who gave them feedback on their page 国際教養学部 の 1 年生は、1 年の学修をまとめた学年末のページを作成し、秘密の URL を提出した。

List of Other Presentations, excluding FD. FD 以外の発表

1	
Date 日付	21 May 2016
Conference Name& Location 学会名及び場所	JALT (Japan Association of Language Teachers) PANSIG Meio University, Nago, Okinawa 全国語学教育学会(JALT)の分野別研究部会(SIG) 名桜大学 (沖縄県)
Title タイトル	Implementing e-Portfolios for Reflective Learning: the early stages リフレクティブ学習のための e-ポートフォリオの実施：初期段階
Content 内容	Poster presentation (2015 symposium posters) and one-on-one discussion ポスタープレゼンテーション及び 1 対 1 の対話
2	
Date 日付	4 June 2016
Conference Name& Location 学会名及び場所	3rd Annual Conference on Global Higher Education Lakeland College, Tokyo 第 3 回世界高等教育会議 レイクランド大学 (東京都)
Title タイトル	Benefits and challenges in the campus-wide introduction of an e-portfolio system: a PDCA-based analysis of the first year (Occhi) e-ポートフォリオ・システムを大学全体へ導入する恩恵及び挑戦 PDCA サイクルから見た初年度の分析：オチ教授 A case study of e-Portfolio implementation in and out of the classroom (Passos) 授業内外での e-ポートフォリオ実施のケーススタディ：パソス准教授
Content 内容	https://youtu.be/PzDG9DvGILY?t=19m18s プレゼンテーションはこちらからアクセス可能 (オチ教授)
Content 内容	https://youtu.be/PzDG9DvGILY プレゼンテーションはこちらからアクセス可能 (パソス准教授)

List of Data Collection Activity (Survey, Observation, Interview, etc.) データ収集活動等

Data Collection 1	
Date 日付	First semester 前期
Purpose 目的	Student's portfolio pages 学生が作成した e-ポートフォリオページを調査するため
Data Collection Method データ収集方法	Retrieve students course pages from Mahara マハラから学生のページを収集した
Characteristics of participants (Who and how many) 調査対象者（誰か、人数）	All first year students who are enrolled in the mandatory Introduction to ICT class had their course pages analyzed 必修の ICT 入門を受講していた全ての国際教養学部の 1 年生
Major Findings 主な調査結果 (Please use a separate paper if needed)	The Intro to ICT course tried to address the need of orienting students on e-Portfolio page creation by having explanations delivered in class on how to create their pages. By looking at the final product, it is easy to see that students who asked questions outside classroom had better pages. This suggests that class orientation was not as effective as we thought. ICT 入門の授業では、新入生に e-ポートフォリオに親しんでもらう目的で、授業で e-ポートフォリオの作成法を指導した。学生が作成したページからは、授業外で質問をした学生ほど、良いページが作成できたことが考察できた。授業内でのオリエンテーションはあまり有効ではなかったのかもしれない。
Data Collection 2	
Date 日付	First semester 前期
Purpose 目的	Student's portfolio pages 学生が作成した e-ポートフォリオページを調査するため
Data Collection Method データ収集方法	Retrieve students course pages from Mahara マハラから学生のページを収集した
Characteristics of participants (Who and how many) 調査対象者（誰か、人数）	All first year students who are enrolled in the mandatory Intro to L.A. class had their course pages analyzed 必修のリベラルアーツ入門を受講していた全ての国際教養学部の 1 年生
Major Findings 主な調査結果	Instructors did not understand well the process of page creation and many students did not complete the

	assignment due to instructors not enforcing it. 教員は e-ポートフォリオ作成の過程をあまり理解しておらず、学生に強制しなかったので、多くの学生はきちんとしたページを作成できなかった。
Data Collection 3	
Date 日付	Second semester 後期
Purpose 目的	Student's portfolio pages 学生が作成した e-ポートフォリオページを調査するため
Data Collection Method データ収集方法	Retrieve students course pages from Mahara マハラから学生のページを収集した
Characteristics of participants (Who and how many) 調査対象者（誰か、人数）	All first year students who are enrolled in the mandatory Intro to Global Citizenship class had their course pages analyzed 必修の世界市民を受講していた全ての国際教養学部の 1 年生
Major Findings 主な調査結果	<p>Most students created great pages with all the content required by the instructors. In addition, many pages have evidence of active learning (by describing what students did or how they got information), as well as critical thinking (by explaining their thoughts and conclusions on things that were not explained in class).</p> <p>We believe the success of this data collection was due to:</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) To address problems from data collection 1, a model of the page was posted in the course Moodle page as well as a video showing how to build the page step-by-step. (2) Due to reluctance of some instructors to use the e-Portfolio system, one member of the e-Portfolio WG was in charge of making sure that students knew and completed the e-Portfolio component of the course. <p>教員に指示した通りの内容で、ほとんどの学生が e-ポートフォリオを作成することができた。それに加えて、学生の e-ポートフォリオの内容からは、アクティブ・ラーニング及びクリティカル・シンキングを使用していた証拠があることがわかった。以下が、e-ポートフォリオの実施が成功した理由だと思われる。</p> <p>(1)前学期の反省点を生かし、ムードル上にモデルとなるページ及び、作り方の手順を説明したビデオも載せた。</p>

	(2)e-ポートフォリオシステムをあまり使いたくない教員に柔軟に対処するために、e-ポートフォリオワーキンググループの教員が、e-ポートフォリオ作成を指導した。
Data Collection 4	
Date 日付	Second Semester 後期終わり
Purpose 目的	Student's portfolio pages 学生が作成した e-ポートフォリオページを調査するため
Data Collection Method データ収集方法	Retrieve students course pages from Mahara マハラから学生のページを収集した
Characteristics of participants (Who and how many) 調査対象者（誰か、人数）	SILA 1 st Year Students EDU 1 st Year Students 国際教養学部 1 年生 教育学部 1 年生
Major Findings 主な調査結果	<p>国際教養学部 1 年生の学年末ページ</p> <p>本学ではリベラルアーツの科目を、アクティブ・ラーニングを通じて学修し、クリティカル・シンキング能力を育成する教育を実施しているので、国際教養学部 1 年生のページは、それを反映したものとなっている。具体的に言うと、3 種類のリベラルアーツの科目群（一般科学及び ICT、人文学科、社会科学）から、アクティブ・ラーニング、クリティカル・シンキング及びその実社会での応用の証拠が含まれると学生が思う授業等で作成した課題の提示を義務付けた。また、大学での授業外での勉強や将来の目標、1 年間の学修の振り返りの項目も盛り込んだ。</p> <p>ページがきちんと作成されたかを評価するために、評価項目を含んだループリックを使用した。国際教養学部の 39 名の学生が学年末ページを作成した。ほとんどの学生がきちんとページを作成したが、1 年間の学修を振り返る項目は比較的あまりできていなかった。来年度は、何をどう振り返るかを明確に指導して、学生が意味のある振り返りができるようにする。実際に学生が制作したページの例は参考資料を参照。</p> <p>教育学部 1 年生は、1 年次で学修する科目群（教養教育分野、専門基礎科目、専門科目）に対しての振り返りができるページを作成した。英語及び忍ヶ丘教養は 2 年次でも履修する科</p>

	<p>目なので、これら 2 つの振り返りのセクションも作成した。教育学部の 1 年生 30 名がページを作成し、ほぼ全員が指示通りにページを作成することができた。実際に学生が制作したページの例は参考資料を参照。</p>
--	---

e-ポートフォリオ WG の参考資料

国際教養学部 1 年生の学年末ページの例

Site default (English)
Change
Login

Reflective Writing

1. The social science paper I put on this page shows evidence of my developed liberal arts because thinking about connection between climate change and psychology. The humanities paper show evidence for my developed critical thinking because thinking about difference and similarity between two things. My Mahara page that I created in ICT class show my developed of critical thinking skills to environmental issues.

2. To study at MIC is sometimes hard for me but I could study hard with my friends. My goal in first year student is to increase my English level. I think that I could become reality but I need more English skills.

3. In my second year, I will go to study abroad. I want to communicate with foreign people by using English more naturally. I don't have enough grammar skill so I want to study grammar more.

2. Goals and Plans

My career choice is a flight attendant. I study English hard to get high score in TOEIC. And also I study hard in all class. My goal are to get more than 860 on TOEIC by the end of third year and to be a flight attendant by graduation.

3. Active Learning

In addition to attending classes, I study for TOEIC when I ride a bus to go to school every day. And also I want to be able to speak Korean so I study Korean by reading text and listening Korean CD.

1-A General Science Assignment

Here is a link to the Mahara page I created in ICT class.

<http://portfolio.miyazaki-mic.ac.jp/mahara/view/view.php?t=OABQIRnSXW8vlsjrD2cK>

1-B Social Science Paper


Page: 1 of 4
Automatic Zoom

Climate Change

"How Psychology can help Climate Change"

Climate Change

Climate change is the difference in the Earth's global climate or in regional climates over time.



Site default (English)
 Change
 Login

< Previous page

Collection: Stusy Abroad Portfolio

Navigate to page:
 You are on page 3/3

Area Studies

Tags: SA 2nd year

On this page I wil upload materials for my SA portfolio.

The Homosexual

There is a country where even Japanese citizens can marry formally as a same-sex couple. It is Canada. Ten years has passed since same-sex marriage was legalized in the whole land of Canada. Canada was the fourth country in the world to approve same-sex marriage It is said that Canada is understanding and kind to homosexuals.

Many same-sex couples from all over the world where same-sex marriage was not allowed, including the United States, visited Canada and held a wedding ceremony in those days. This is because in Canada, people besides Canadian can marry regardless of being a man or a woman.

It is sure that same-sex marriage is accepted in Canada rather than Japan. Therefore, it is sure that there is still the sense of discrimination. Vancouver is the city that is very kind and friendly to gays. The gay pride parade is held every year and also Vancouver is the city where is

Remembrance Day

Today is November 11th, which is the Canadian Remembrance Day. Remembrance Day is the anniversary of the official end of World War I on November 11, 1918. It is a national holiday.

Many people died and were injured during the war, so Remembrance Day is the day to rememeber those who died in war conflicts since World War I. I often see many people who wear artificial red poppies on their clothes close to Remembrance Day regardless of age. This artificial poppy is the symbol of Remembrance Day. The origin of the poppy symbol is a poem by John McCrae, a soldier who fought in World War I. According to his poem, after a battle was over in Flanders, which was a fierce battlefield, many red poppies seemed to bloom to fill up the battlefield. In Canada, one out of two people wear artificial poppies on their left breast. In addition, I often see people who had a donation box at shopping mall or everywhere in downtown. This money is usually spent on veterans.

Personality of Canadians

When I encountered Canadians, I found various characteristics of Canadians. Furthermore, I can find a lot of good parts that are uncommon for Japanese. It seems that people in Canada tend to say their opinion directly and people are assertive.

At first, seen from a Japanese perspective, they do not have a sense of reserve or hesitation, so people in Canada express their feeling directly. People in Canada make clear their true intention and what they say in public and clarify their opinion like their favorites and not so favorite ones. On the other hand, people in Japan don't say yes or no clearly. Also people in Japan have a character such as reading the atmosphere of a place and have a tendency to align themselves with the opinions of those around. People sometimes endure that they want to say, or control their emotion and endure a thing that they want. Words show the Japanese way of thinking. I think it is important for

教育学部 1 年生の例

1年次の振り返り・目標

一年次では、入学当初新しい生活に慣れることが最優先でしたが、徐々に慣れていき前期の期末テストでは、先輩方から勉強法を教えてもらい友人と一緒に勉強することで成績をとることができました。後期からは、授業が終わってから放課後にアルバイトがない平日や空き時間に図書館に行き課題や予習・復習をするようになりました。また、教員採用試験に向けての理数科ゼミにも参加し理科に力を入れて勉強しています。

二年次では、教員採用試験に向けてのゼミに理数科だけでなく他のゼミにも参加していきたいと思っています。また、ボランティアや学校行事にも積極的に参加してさまざまな経験を積み重ねていきたいと思っています。一年次よりも忙しくはなると思いますが、勉強に対しての意欲も高まりもっと基礎的知識はもちろん専門的知識を増やし、自分の苦手なをなくしていく為にも、何事にも努力を惜しまず挑戦し、一生懸命頑張りたい、充実した一年にしたいと思います。

忍ヶ丘教養

一年次の授業では、授業に関することや常識として必要な知識をつける学習をしました。

前期の授業では、授業でのノートの取り方やレポートの書き方、論文の読み取り方、まとめる方を学習しました。論文を読むことはもちろん読んで序論・本論・結論にわかるなどしたことがなく、難しかったです。後期では、実際に教員になり現場で働き始めたときの自分の行動や言動について、例を元にするのがよいのかなどについて学習しました。

一年次で習った、大学生活に必要な知識や、レポートの書き方、論文の読み方などを生かしながら二年次では、もっと多くのことを学び理解し身につけたいと思います。特に、論文の読み取り方が難しかったので、これから卒論など重要な知識になってくるので、今のうちから少しずつ論文に関して学び身につけていきたいと思っています。

英語

英語は一番苦手な科目なのでどの科目よりも予習・復習に力を入れました。前期では、長文読解をする英語Ⅰを学習しました。長文読解は特に苦手意識を持っていましたが、毎時間UNIT1題を訳す課題を通して、少しずつ慣れていきました。後期では、コミュニケーション英語を通して、英語で会話をすることはできないと思っていましたが、簡単な文から話す練習をしたので英語に楽しさを覚えました。

1年次ではわからなくて辞書で調べる単語が多かったので、春休みを利用して1つでも多くの単語を身につけます。また、学内にはたくさんの外国人の教員の方々がいるので、学内であったときや、自分で時間を見つけて英語を話す時間を作りたいと思います。そして、2年次になったとき少しでも英語を聞き取れるように、そして会話ができるように頑張りたいと思います。英語は小学校でも重要科目になり必要なので、教員採用試験に向けても力を入れて、勉強していきたいです。

忍ヶ丘教養

 忍ヶ丘Ⅰ.docx

専門基礎科目

保育原理:この授業では、保育所・幼稚園・認定こども園についてそれぞれの違いや基礎知識、現状についての学習をしました。自分の知らないことや知っていても深く知らないことがたくさんあり授業を受けることが毎週楽しみでした。

反省点:覚える量が多く、テスト前に見返した時、覚えていないことが多く、日々の復習が足りなかったと思いました。

改善点:教員を目指すうえで、直接関係するわけではないけど保育についての知識はしっかりと理解しておくべきだと思うので今のうちから復習をしっかりとしたいと思います。

専門基礎科目

 教育原理.docx

15.7KB | Thursday, 12 January 2017 | Details

専門科目

(よくできた科目)

理科:得意な科目ではなかったが、わからないことは友人や先生にその日のうちに聞き、疑問を残さないようにしました。また、週一である放課後の教員採用試験に向けての理数ゼミに通うようになり、理科の授業で毎回ある小テストが少しずつですがとけるようになりました。これからは教員採用試験に向けてより理解を深め知識をつけたいと思います。

(反省科目)

国語:あまり得意な科目ではなく、特に漢字が苦手な為、予習・復習またテスト勉強でもつまづきました。しかし、漢字は日常でも使うし、小学校では形、バランス、書き順を教えないといけいないので小学校で習う漢字の書き順はもろもろの学年でどの漢字を習うなど今から復習して身につけたいと思います。

専門科目

 音楽(0歳児).pptx.1

483.2KB | Thursday, 28 January 2017 | Details

ループリック・ベース・シラバスワーキンググループ (RBSWG)

Group Members (グループメンバー) : Katherine Bishop (リーダー) , Julia Christmas, Koji Watanabe, Lloyd Walker

Summary of Working Group Activity this year

今年度のワーキンググループの活動の要約

平成 28-29 年度

4 月: 国際教養学部において大学共通ループリックの導入

7 月: ループリック使用に関する教員へのアンケート

8 月: ループリックに関する学生へのアンケート

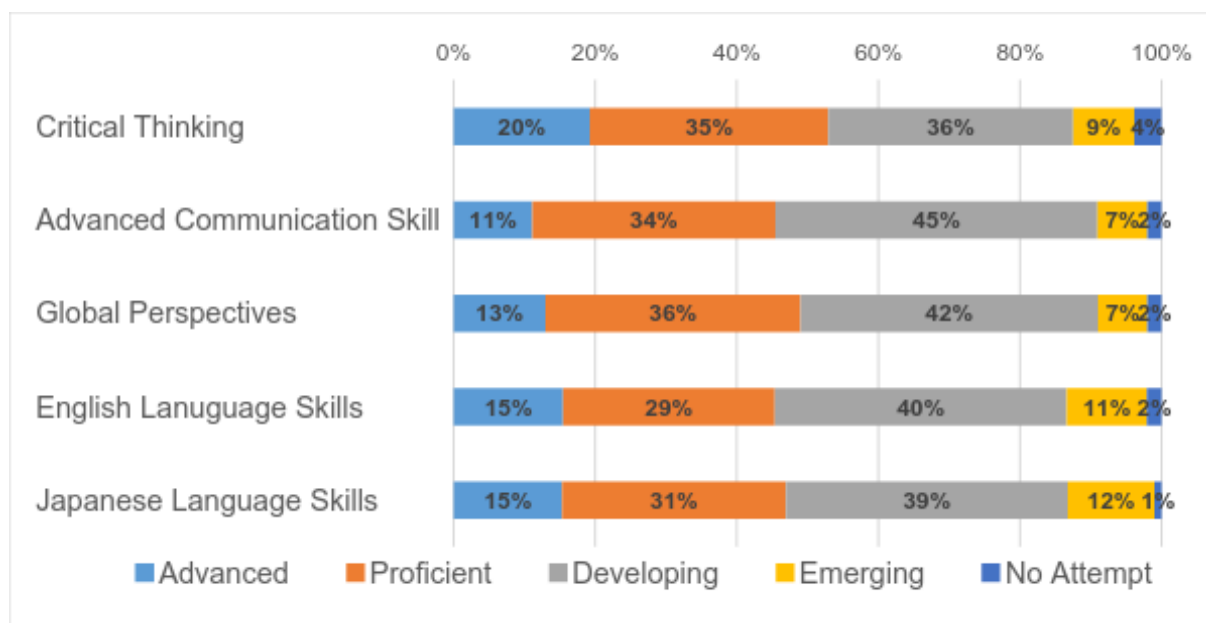
11 月: アクティブラーニングシムposium

Faculty Rubric Evaluation/Use 2016 年 9 月

学内でのループリック使用を調査するために、2016 年 9 月に教員にオンライン調査を行った。このオンライン調査の目的は、教員のループリックに対する理解度、考え方などの実態及び使用についての評価であった。まず、全学ループリックである MIC ループリックについて質問をした。6 割のアンケート回答者がループリックは役に立つと答えた。56%が授業の目標を計画するのに役立つと答え、44%が学生にその時点での学生のレベルを示すのに役立ったと回答した。次に、「科目や授業活動に合わせてループリックを調整したか? 調整した場合、なぜそうしたか?」を質問した。ループリックの内容を 50%以上変更した教員の 67%は、「該当する授業の内容に合っていないため変更した」と回答した。また、ループリックの使用目的は、プレゼンテーション (67%) 及びレポートや小論文 (66%) の評価と回答した教員が多かった。また、今後の改善点としては、61%の教員はループリックを個別のニーズ (目標) に合わせて調整する方法に関するワークショップや研修が必要と感じていると答えた。

学生への調査

MIC ループリックにおいて、本学の学生の自己評価アンケートを行った。このアンケートは、国際教養学部の 1 年生 37 名、2 年生 30 名、3 年生 15 名、4 年生 21 名が回答した。以下のグラフからわかるように、Critical Thinking (クリティカル・シンキング能力)、Advanced Communication Proficiency (高度なコミュニケーション能力)、Global Perspectives (国際的な視野)、English Language Ability (英語能力)、Japanese Language Ability (日本語能力) のそれぞれの項目に対して、Advanced (洗練された能力)、Proficient (高い能力)、Developing (向上中)、Emerging (育成中)、No Attempt(能力向上へ努力していない)の 5 段階で学生が自己評価を行った。結果は以下のグラフで示されている。



グラフが示すように、全体的に全ての項目に対して、45%～55%の学生が **Advanced** 及び **Proficient** という自己評価を持っていることがわかった。項目別にみると、**Critical Thinking** では、20%の学生が **Advanced** と自己評価をしていて、**Emerging** と **No Attempt** は合わせて13%であった。**Advanced Communication Skill** に関しては、11%が **Advanced** と比較的少なかったが、**Proficient** と **Developing** が79%と多かった。**Global Perspectives**、**English Language Skills** 及び **Japanese Language Skills** においては同様の傾向が見られて、**Advanced** は10%台であったが、**Proficient** 及び **Developing** が学生の多くを占めた。回答者の半数以上の学生が1, 2年生ということを考慮すると、本学の学生の自己評価は比較的高いという結果が得られた。

Plan for Next Year: 来年度の計画

Plan 2017-18

① Plan institutional visits (他大学への訪問・視察)

Description: Investigate and visit other AP and non- AP institutions using rubrics (AP 大学以外の大学を含めて、ルーブリックを活用している大学の視察を行う。)

Expected Results: Develop collaborative networks, gather information to improve MIC program and disseminate information where appropriate. (協働研究等のネットワークづくりを促進しながら、本学の教育改善と情報の普及を図る。)

② Collate and analyze data from second surveys (第2回アンケートのデータ分析)

Description: Analyze data from surveys conducted at end of March 2017 in both departments. (2017年3月実施の両学部対象のアンケート結果を分析する。)

Expected Results: Better understanding of ILA and EDU student and faculty rubric needs and usage. (両学部のルーブリックの活用の仕方とルーブリックに対する必要性を把握する)

③ Faculty Development Seminars on Use of the Institutional Rubric (全学ルーブリックの活用に関するFDの実施)

Description: FD to develop greater consensus among faculty on how to use and rubrics for institutional assessment and individual course assessment. (全学の学修成果及び個別授業における評価への適応に関して教員間の理解を深める。)

Expected Results: Improve and deepen understanding and use of rubrics; modification of rubrics based on faculty and student needs. (ルーブリックの活用状況の改善及び理解の促進、教員及び学生のニーズに答えるルーブリックの改定)

④ Continued institutional rubric modification (さらなる改善)

Description: Modify rubrics based on results of surveys and outcomes of FD activities. (アンケートやFD活動の成果を生かし、ルーブリックの改定を図る。)

Expected Results: Develop a more up-to-date rubric that better represents the revisions in the Curriculum, Diploma and Admission policies. (3つのポリシーの改定に対応したルーブリックの改善を図る。)

⑤ Investigation of the value of integrating rubric items into the e-Portfolio (e-ポートフォリオへのルーブリックの導入検討)

Description: Meet with e-Portfolio Office and the working group to discuss integration of rubrics (e-ポートフォリオ・オフィス (AP事務局) と協働で検討を行う。)

Expected Results: Collaboration and integration between working groups ワーキンググループ間の協働研究活動等を促進する。

Description of How to Achieve the Final Goal of your WG

どのようにして、ワーキンググループの最終目標を達成するかについての記述

Vision 2018-2020

Visualization of learning outcomes will be achieved through continued communication with faculty and students and use of PDCA cycle to assess and improve the curriculum and student performance, and to achieve more use of and understanding of institutional rubric.

2018-2020 のビジョン

教員と学生とのコミュニケーションを促進しながら PDCA を引き続き活用し、教育課程や学生における学修成果の改善・向上及び全学ルーブリックへの理解を深めることで、学修成果を可視化する。

ルーブリック・ベース・シラバス WG の具体的な活動内容

List of AP-related Faculty Development AP 関連の FD

FD1	
Date 日付	November 19, 2016
Number of participants 参加人数	10 人
Title タイトル	Individualizing Rubrics Within the MIC Curriculum 個々の科目に合わせたルーブリックの作成
Purpose 目的	To further understand the various uses of Rubrics ルーブリックの活用方法の多様性に関する理解を促進すること
Content of FD 内容	Sharing specific ways of using rubrics for student self-assessment in content classes. ルーブリックを活用した学生自己評価の方法に関する情報交換。
Result of FD 結果	Instructors were able to apply a course-specific rubric to self-evaluation of progress in a course. この FD を通して、教員は個別科目に特化したルーブリックの学生自己評価への応用法を学習し、授業で利用することができた。

List of Other Presentations, excluding FD. FD 以外の発表


1	
Date 日付	November 26, 2016
Conference Name& Location 学会名及び場所	AP Active Learning Symposium AP アクティブ・ラーニングシンポジウム Tokyo, Odaiba 東京、お台場
Title タイトル	Rubrics Update & PDCA
Content 内容	Described the past, present and future activities of the RBS Working Group, and interim results and observations of surveys of faculty on the use of rubrics. ルーブリック・ベース・シラバスワーキンググループにおける過去、現在及び今後の活動報告及びアンケートの実施・分析結果の説明を行い、今後の展望について述べた。

List of Data Collection Activity (Survey, Observation, Interview, etc.) データ収集活動

Data Collection 1	
Date 日付	July 28 through August 3, 2016
Purpose 目的	To collect data on rubric use ルーブリック使用に関するデータを収集するため
Data Collection Method データ収集方法	Qualtrics Surveys: “Student Self Reflection (ILA)” “All Faculty Spring 2016 Rubric Use/Evaluation Assessment (Bilingual)” オンライン調査：学生の自己反省及び、教員のルーブリック使用及び評価
Characteristics of participants (Who and how many) 調査対象者（誰か、人数）	All Faculty and Students 全学生及び全教員
Major Findings 主な調査結果	See Attachments 今年度の活動を参照

ループリックWGの参考資料

国際教養学部のカリキュラムに導入された共通ループリック

文部科学省から採択された 大学教育再生加速プログラム 		Advanced	Proficient	Developing	Emerging	No Attempt
Critical Thinking	Ability to Identify & Solve Problems	Insightful comments in class discussions Student shows proven ability to analyze data, gather and assess resources, and disseminate opinions in a scholarly manner.	Able to contribute to class discussions, and to perform a basic analysis of data, gather and assess resources, and express opinions in an adequate manner.	Beginning to visualize the ways in which information can be combined and applied to solving a given problem, but struggles with complex and relationships	Student shows motivation but must learn the concepts and mechanisms that apply to critical thinking, such as information gathering, assessment and synthesis	No attempt was made to achieve these objectives.
	Information Gathering					
	Assessment of Credibility					
Advanced Communication Proficiency	Public Speaking	Speaking is clear, using a broad range of vocabulary and relative jargon. Student uses appropriate social cues and nuance.	Able to create a relevant response when asked to express an opinion or respond to a complicated situation, but pronunciation and grammar can often make responses and explanations unclear to a listener and must be interpreted.	Able to answer questions and give basic information. However, inconsistent pronunciation, intonation and stress may sometimes make their responses difficult to understand or interpret.	Student is unsuccessful or finds it very difficult when attempting to explain an opinion or respond to a complicated scenario. The response may be limited to a single sentence or part of a sentence.	No attempt was made to achieve these objectives.
	Social Skills					
	Professional Skills					
Global Perspectives	Cultural Relevancy	Fully engaged in current events and shows understanding of social inequalities and cultural differences.	Student is aware of current events and world cultures, but is unable to apply macro-level situations to her/his own life.	Exhibits interest and intrigue in current events and world culture, but has difficulty understanding relevancy.	Student expresses one-sided ideals from an ethnocentric point of view. Completely lacks awareness of world issues or events.	No attempt was made to achieve these objectives.
	Awareness of Current Events & Global Issues					
English Language Ability	Reading	Exhibits fluency/near fluency in speaking and writing. Grammar and reading ability similar to native English speaker. Able to use context clues when faced with unfamiliar vocabulary.	Proficient English ability; relies mainly on familiar vocabulary. Should be encouraged to advanced beyond comfort zone.	Adequate English ability; must reference dictionary often	Student has some English ability, but lacks confidence in using and understanding. Very limited vocabulary knowledge, struggles with grammar and pronunciation Unable to form questions	No attempt was made to achieve these objectives.
	Writing					
	Oral Communication					
Japanese Language Ability	Reading	Able to express one's self clearly and succinctly both in writing and orally. Able to use context clues when faced with unfamiliar vocabulary.	Proficient oral and written communication; relies mainly on familiar vocabulary. Should be encouraged to advanced beyond comfort zone.	Adequate oral and written communication; tends to have difficulty clearly expressing ideas.	Student shows a lack of confidence in writing, reading, and oral communication. Very limited vocabulary knowledge, struggles with grammar Unable to form questions	No attempt was made to achieve these objectives.
	Writing					
	Oral Communication					

2. 第 65 回九州地区大学教育研究協議会プログラム

日時：平成 28 年 9 月 2 日（金） 13：00～17：20

場所：鹿児島大学 学習交流プラザ 2 階 学習交流ホール

本学発表：事例発表 2（15：40～16：15）

発表者：宮崎国際大学 国際教養学部 学部長 マイケル トンプソン

演題：Miyazaki International College and the AP grant: Work in progress
toward visualizing outcomes

《 発表：全体会 》

Miyazaki International College and the AP grant: Work in progress toward visualizing outcomes

宮崎国際大学 マイケル トンプソン

1. Miyazaki International College and the AP grant

My talk was about how we applied for the AP grant at Miyazaki International College (MIC) and how we set about implementing it. The application process is key because the application itself was not based merely on what is trending in Japanese education which would be likely to appeal to the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology, but on two other things: 1) the work of MIC to date which from its beginning in 1994 has concentrated on Active Learning, Critical Thinking, through the medium of English in a Liberal Arts Program; 2) Pre-existing faculty research in these areas which was both evaluative of our efforts to date and suggestive of improvements by the introduction of a rubrics based set of syllabi and the use of individual e-portfolios by students. The grant was intended to further increase our work in the fields that we have pioneered and to add rubrics and e-portfolio to them. The latter through the use of tablet computers by all incoming students. Specifically we wanted to: 1) establish a basis of "best practices" in Active Learning which could be used for FD at MIC and more widely; 2) A test of Critical Thinking which would provide measurable statistics in a bilingual format to assess critical thinking skills; 3) Utilizing rubrics to create a goals/objectives basis for individual courses and the program as a whole alongside more traditional knowledge acquisition measurements; 4) A system of e-portfolios whereby students could form a personal record of their progress over time.

2. An Interim Report on Work in Progress Toward Visualizing Outcomes

I then presented an interim report on these. An Active Learning composite of Best Practices is being established, workshops have been held, FD sessions have also been held, an Open Symposia in both Miyazaki and Tokyo. Various Critical Thinking tests have been studies and faculty trained in the Critical Thinking test of Tennessee Technical University. Our own bilingual test has been created and will be administered for the first time in 2017. Rubrics workshops have been held and all syllabi now include a rubrics element. Subject variability has proven to be a retarding factor but rubrics can still be used across disciplines. All incoming students are loaned tablet computers and trained in their usage. They are extensively employed in the first two years at the college and there are plans to extend their usage throughout the degree program. While there were expected and unexpected problems, the AP program has been of benefit to MIC and to the students and we hope that these benefits will both continue and multiply as we move towards the end of the grant.

1. 宮崎国際大学と AP への取り組み

本発表は、宮崎国際大学（以下「本学」という）の大学教育再生加速プログラムへの応募と AP プロジェクト始動の過程についての発表でした。本学の AP 事業案が採択された理由は、本学の応募が、文部科学省が興味のある日本教育の動向に沿っていただけではなくて、2 つの重要なことに基づいていたことです。一つは、開学の 1994 年以来、リベラルアーツ教育を英語で学ぶことで、アクティブ・ラーニングとクリティカル・シンキングに焦点を当てた本学の取り組みです。そして、二つ目は、AP 事業採択以前から行われたアクティブ・ラーニングとクリティカル・シンキングに関する本学教員の研究です。そして、AP 事業によるルーブリックを取り入れたシラバスと e-ポートフォリオの導入により、その研究を評価し改善することができます。つまり、AP 事業の目的は、本学がすでに率先して行ってきた研究を更に発展させることと、すべての新入生がタブレット PC を使用することで、その研究にルーブリックと e-ポートフォリオを追加することでした。具体的に言いますと、本学の AP 事業の目的は、1) 本学での FD や他の教育機関でも利用できるような効果的なアクティブ・ラーニングの基盤を作ること 2) クリティカル・シンキング能力を測定するためのテストの開発、3) 従来の知識を測るテストと共に、本学の学修及びそれぞれの授業の目標を盛り込んだルーブリックの使用、4) 本学での学修の成果を記録できる e-ポートフォリオ・システムの開発でした。

2. 成果可視化への取り組みの中間報告

それから、これらの目的に対する取り組みの中間報告をしました。アクティブ・ラーニングに関しては、効果的なアクティブ・ラーニングの調査が進んでいます。それに伴うワークショップや FD も行われていて、宮崎と東京でアクティブ・ラーニングのシンポジウムも開催しまし

た。クリティカル・シンキングへの取り組みに関しては、様々なクリティカル・シンキングテストについての知識を深めて、何人かの教員はテネシー工科大学が作成したクリティカル・シンキングテストを学びに行きました。そして、その研究を基に、本学独自のクリティカル・シンキングテストの開発が進んでいて、2017年にはそのテストが実施される予定です。ループブックに関するワークショップも開催し、現在ではすべてのシラバスにはループブックの要素が取り込まれています。それぞれの授業によってループブックの内容が変わってしまうので扱いが難しいのが課題ですが、すべての学科での使用が可能です。すべての新生は、AP 事業により、タブレット PC を借りることができて、正しく活用できるようにオリエンテーションも開いています。本学での最初の2年間は、学生はタブレット PC を活用する方針が定められていて、タブレット PC の活用は4年間の学修すべてとなるように検討されています。想定内の問題及び予期していなかった問題もありましたが、AP 事業により、本学の教育及び学生はその恩恵を受けることができます。AP 事業は終わりに近づくにつれて、この事業がもたらす恩恵が続く、更に発展することを期待しています。

3. 宮崎国際大学・アクティブ・ラーニングシンポジウム 2016

日時：平成 28 年 11 月 12 日（土） 10：00～16：10

場所：東京国際交流館（お台場）

主催：宮崎国際大学



Miyazaki International College
アクティブ・ラーニングシンポジウム 日本語通訳あり
2016 11/12 会場：東京国際交流館（東京・お台場）

9:30～ 受付開始
10:00～10:20 開会の挨拶及び本学入プロジェクトの概要
 Opening Remarks and Overview by Benjamin Peters
10:30～11:45 本学におけるアクティブラーニングの測定
 Measuring Active Learning Activity at MIC by Anne Howard, Catherine-Mette Mark
11:45～12:00 質疑応答 Questions and Answers

セッション I
13:00～14:45
 1. MICのアカデミック・シンキングテストの開発
 Developing Critical Thinking Assessment by Christopher Johnson
 2. e-ポートフォリオを使ったアクティブラーニングの成果の可視化
 Visualizing Outcomes of Active Learning with e-Portfolio by Anderson Pausan
 3. 学習目標と学修成果測定のためのルーブリック
 Rubrics for Assessment of Learning Objectives and Outcomes by Lloyd Walker
14:45～15:00 質疑応答 Questions and Answers

セッション II

15:10～16:10 アクティブ・ラーニング ワークショップ
 Active Learning Workshop by Julia Christmas

セッション III

日本では27年の英語教育経験を持つクリスマス教授による英語教授法のワークショップを開催します。
 現場の先生方の参加もお待ちしております!!

参加費無料
 参加者名・所属を明記してメールでお申し込み下さい。
 E-mail: ap@sky.miyazaki-mic.ac.jp
 右記のQRコードからでも申し込みできます。

会場案内
 東京国際交流館は東京湾海浜地区1 東京国際交流館
 プラザ第3階3F メディアホール
 ゆりかもめ「海の科学館」駅より徒歩約3分
 りんかい線「東京テレポート」駅出口より徒歩約15分

宮崎国際大学
 文部科学省・大学教育再生加速プログラム（AP）テーマ1-III複合型採択校
 宮崎国際大学 〒905-1505 宮崎県宮崎市宮内1-1-5 5階 電話 0985-95-5531 E-mail ap@sky.miyazaki-mic.ac.jp



平成28年11月12日(土)
2016アクティブ・ラーニングシンポジウム
 2016 ACTIVE LEARNING SYMPOSIUM
 宮崎国際大学 大学教育再生加速プログラム（AP）
 MIYAZAKI INTERNATIONAL COLLEGE
 Acceleration Program for University Education Rebuilding (AP)
プログラム(Program)

午前の部 Morning Session 司会 AP事務局 大岡智史 MC: AP Office Satohi Ozeki

9:30 受付開始 Reception

10:00 開会の挨拶 Opening Remarks and Overview
 新学長 ベンジャミン・ピーターズ
 Vice President Benjamin Peters

10:30～11:45 本学におけるアクティブラーニングの可視化
 Measuring Active Learning Activity at MIC
 発表者 アン・ハワード 教授、カタリーナ・マーク 講師
 Presenter: Prof. Anne Howard, Lecturer Catherine-Mette Mark
 通訳 並井 謙朗 Interpreter: Lecturer Aya Kasai

本発表では、アクティブラーニング・ワーキンググループによって開発されたアクティブラーニングの概念的な分類について説明します。また、本学で実践されている典型的なアクティブラーニングの手法について数例を挙げて行ったアンケート結果、並びにアクティブラーニングにおける学生の行動を理解するための行った数例の学生のアンケート結果について発表します。
 This presentation explains a conceptual categorization of Active Learning Teaching Strategies (ALTS) devised by the MIC Active Learning Working Group (ALWG). Results of a faculty questionnaire on typical ALTs will be presented, in addition to results from a questionnaire posed to students in selected MIC courses to gauge their behaviors.

11:45～12:00 質疑応答 Q and A

午後の部 Afternoon Session

13:00～13:45 クリティカル・シンキングテストの開発
 Developing a Critical Thinking Assessment Test
 発表者 クリストファー・ジョンソン 講師
 Presenter: Lecturer Christopher Johnson
 通訳 大岡智史 Interpreter: Satohi Ozeki

クリティカル・シンキング・ワーキンググループでは、今年初めから、本学での適用を想定したクリティカル・シンキングスキル測定テストの開発を始めています。このテストは、学生のクリティカル・シンキングスキルを測るとともに、その成長の経年的変化を測定することを目的としています。本プレゼンテーションでは、MICクリティカル・シンキングテストの開発、また、これによって本学で開発の過程に遭遇した課題等について発表します。
 In early 2016, the Critical Thinking Working Group began developing a critical thinking test for use at MIC. The test is designed to measure students' critical thinking skills and the development of those skills over the course of their programs of study. This presentation discusses the development of the MIC Critical Thinking Test, its prospects for the future, and the challenges encountered along the way.

13:50～14:20 e-ポートフォリオを使ったアクティブラーニングの成果の可視化
 Visualizing Outcomes of Active Learning with e-Portfolio
 発表者 アンデルソン・パウス 准教授
 Presenter: Associate Prof. Anderson Pausan

学生のe-ポートフォリオ提出に係る効果的基準とその評価の設計は、本学のe-ポートフォリオ導入における必須の要件です。本プレゼンテーションでは、本学のe-ポートフォリオシステムの概要を述べるとともに、2学期の学生に4年間の学修におけるアクティブラーニングの成果を定めたための基準をどのように構築したのかについて発表します。
 Developing effective criteria for student e-Portfolio submissions and their assessment is an essential element of the implementation of our e-Portfolio. This presentation will describe our MIC Portfolio system and explain how criteria are developed to guide students in two Schools to visualize outcomes of active learning throughout their college education.

14:25～14:45 学習目標と学修成果測定のためのルーブリック
 Rubrics for Assessment of Learning Objectives and Outcomes
 発表者 ロイド・ウォーカー 学部長補佐
 Presenter: Assistant to the Dean of Faculty Lloyd Walker

本学の教育方針は、ディプロマ・ポリシー、アミューズメント・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーで明確に示されています。ルーブリック・ベース・システム（ルーブリック・グループ）では、その3つの方針で明確化された教育目標を基に、インクスタチュショナル（全学的）ルーブリックを作成しました。本発表では、当該ルーブリックの内容を説明するとともに、学生及び教員への調査から得られた、その効果に関する中間報告を行います。
 The educational goals of the institution have been defined through our Diploma, Admission and Curriculum Policies. The Rubric-Based System Working Group has identified the educational goals as specified in the three policies and arranged them into an institutional rubric. This presentation will describe the content of the rubric and interim results as observed through student and faculty surveys.

14:45～15:00 質疑応答 Q and A

15:00～15:10 休憩 Break

15:10～16:10 アクティブ・ラーニング ワークショップ
 Active Learning Workshop
 担当: ジュリア・クリスマス 教授
 Instructor: Prof. Julia Christmas


講師中心の授業は重要であり、決して必要ありません。しかしながら、それは学生にとってしばしば受動的な学習体験となります。研究報告では、学生が授業で積極的に活動し、また、授業内容や学習目標をより深く理解し、より多く学ぶことが示されています。このワークショップでは、主にアクティブ・ラーニングの学びを重視し、学生中心の授業にするためのアイデアや教授法の一環を紹介することにあります。
 Lecturer-based teaching is important and sometimes necessary. However, it is often a passive experience of learning for students. Research shows that students learn more when they are active and engaged with the content and the process of learning. This short workshop will focus on helpful classroom activities, including active lecturing. The goal for this workshop is to introduce ideas and techniques that teachers can take back to their schools and can use to make their classrooms more learning-focused and student-centered.

開会の挨拶




開会の挨拶及び本シンポジウムの概要

1. 学校法人宮崎学園
2. 宮崎国際大学：英語でリベラルアーツ教育
3. 本学における大学教育再生加速プログラム (AP)




AP Active Learning Symposium
APアクティブ・ラーニングシンポジウム



創立者
初代理事長
大坪資秀先生
(明治30年一昭和63年)

1939 宮崎女子商業学院


1940 宮崎高等裁縫女学校




学校法人宮崎学園傘下の教育機関(現在)

宮崎国際大学
宮崎学園短期大学
宮崎学園高等学校
宮崎学園中学校
宮崎学園短期大学附属みどり幼稚園
宮崎学園短期大学附属清武みどり幼稚園

国際・地域社会の人材育成、教育の発展に貢献



AP Active Learning Symposium
APアクティブ・ラーニングシンポジウム



宮崎国際大学の始まり

創立者 第2代理事長大坪久泰先生

設立 平成6年4月
比較文化学部 比較文化学科
日本で初めて英語でリベラル・アーツ教育を実践する大学


宮崎国際大学

その後


平成18(2006)年 学部名改称
比較文化学部 → 国際教養学部

平成26(2014)年 学部新設
教育学部・児童教育学科

開会の挨拶



AP Active Learning Symposium
APアクティブ・ラーニングシンポジウム



宮崎国際大学

英語でリベラルアーツ教育

- ・国際色豊かな教授陣
- ・チーム・ティーチング
- ・アクティブ・ラーニングを通じたクリティカル・シンキング能力の養成
- ・留学




AP Active Learning Symposium
APアクティブ・ラーニングシンポジウム






「大学考」大坪久泰

(文藝春秋発刊、H26.5)




AP Active Learning Symposium
APアクティブ・ラーニングシンポジウム




なぜクリティカル・シンキングなのか

「良いクリティカル・シンキングは、科学や自由民主主義社会の基盤と言えるかもしれません。」(「大学考」40ページ)

次はどのようにしてこれを学ぶのかを説明しなければなりません。一言でいえば、「アクティブ・ラーニングするのです」というのが答えです。(「大学考」46ページ)



AP Active Learning Symposium
APアクティブ・ラーニングシンポジウム




宮崎国際大学

大学教育再生加速プログラム


チーム 複合型(Ⅰ・Ⅱ)

Ⅰ アクティブ・ラーニング

Ⅱ 達成目標の可視化




AP Active Learning Symposium
APアクティブ・ラーニングシンポジウム




宮崎国際大学

大学教育再生加速プログラム

- ・1つ目は、これまで実践してきたアクティブ・ラーニングのベスト・プラクティスの明確化である。
- ・2つ目は、このことに関連してクリティカル・シンキングと英語スキルの可視化を行うことである。
- ・3つ目は、アクティブ・ラーニングとクリティカル・シンキング及び英語スキルの対応関係をルーブリック・ベース・シラバスにより視覚化し、学修のPDCAサイクルを確立することである。



AP Active Learning Symposium
APアクティブ・ラーニングシンポジウム





宮崎国際大学


APアクティブ・ラーニングシンポジウム


- ・宮崎国際大学におけるアクティブ・ラーニングの測定
- ・クリティカル・シンキング・テストの開発
- ・eポートフォリオを使用したアクティブ・ラーニングの成果の可視化
- ・学修目標と学修成果測定のためのルーブリック
- ・アクティブ・ラーニング ワークショップ


アクティブ・ラーニングの可視化


**AP Active Learning Symposium**
APアクティブ・ラーニングシンポジウム


**大学教育再生推進プログラム**


**Outline**


**大学教育再生推進プログラム**


**What is Active Learning (AL)?**

**大学教育再生推進プログラム**

**Initial Research Questions**
初期の研究課題

**大学教育再生推進プログラム**



**Pre-2016 Efforts**
2016以前の活動

**大学教育再生推進プログラム**

**Categorization of ALTSS**
ALTSSの分類

**大学教育再生推進プログラム**

アクティブ・ラーニングの可視化





3) **PREPARED** - strategies allotted longer preparation or rehearsal time and involving presenting to an audience and/or submitting work

準備型 — 事前に準備をしておく学習活動

4) **EXTEMPORANEOUS** - strategies that are more impromptu, often in pairs or small groups

即興型 — その場の状況に応じて展開させる学習活動

7



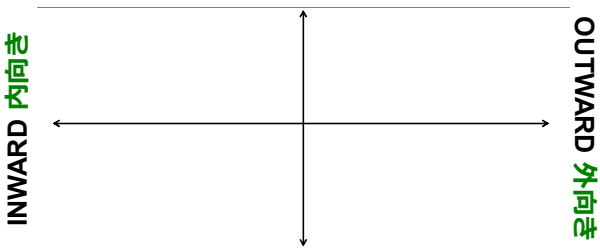
MIC ALTS “Matrix”

PREPARED 準備型



EXTEMPORANEOUS 即興型

INWARD 内向き

OUTWARD 外向き



8





OUTWARD-EXTEMPORANEOUS

外向き-即興型

Examples 例:

- Role Play **ロールプレイ**
- Facilitated Discussions **ファシリテートされたディスカッション**

9





OUTWARD-PREPARED

外向き-準備型

Examples 例:

- Formal Debates **構成されたディベート**
- Presentations **プレゼンテーション**

10





INWARD-EXTEMPORANEOUS

内向き-即興型

Examples 例:

- Written Peer Review of Written Work **学生同士の相互評価を記述**
- Pause for Reflection **思案する時間をとる**

11



INWARD-PREPARED



内向き-準備型

Examples 例:

- Self-assessment **自己評価**
- Written Paraphrases / Summaries **言い換えたり、概要をまとめて書くこと**

12

アクティブ・ラーニングの可視化

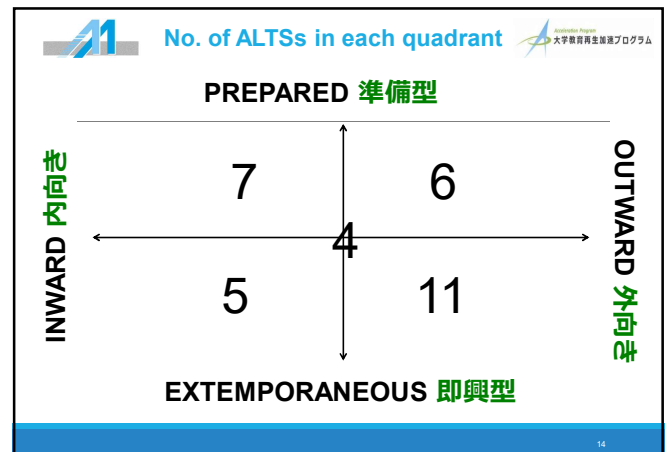
ALL Four Quadrants


4つのカテゴリー

Examples 例:


- Cooperative Based Projects
他者と協力して行うプロジェクト
- Simulations and Experiments
実践への応用と実験

13



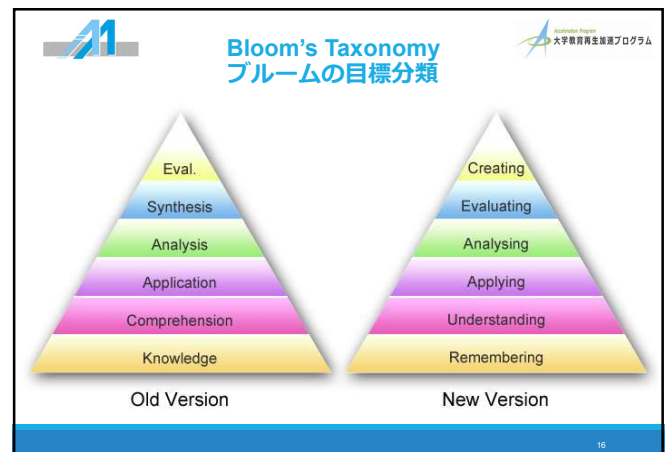



Instructor Questionnaire
先生へのアンケート




- 1) Demographic questions 人口学的背景
- 2) ALTs use どのようなALTsを使っている？
- 3) Other ALTs? その他のALTsは？
- 4) Efforts to give students encouragement, feedback, and time outside class 授業時間外に、学生に対してどのような学習支援やフィードバックをしているか？
- 5) Bloom's Taxonomy ブルूमの目標分類
- 6) Self-reflection on ALTs use ALTsの使用についての振り返り

15






National Survey of Student Engagement (NSSE)
生徒の学習行動に関する全国調査




- Indiana University Bloomington インディアナ大学
- Assesses "the extent to which students engage in educational practices associated with high levels of learning and development." 高度な学習と発達に関連性のある教授法や学習行動とは？

Carr, R., Palmer, S., & Hagel, P. (2015). Active learning: The importance of developing a comprehensive measure. *Active Learning in Higher Education*, 16(3) 173-186.

17



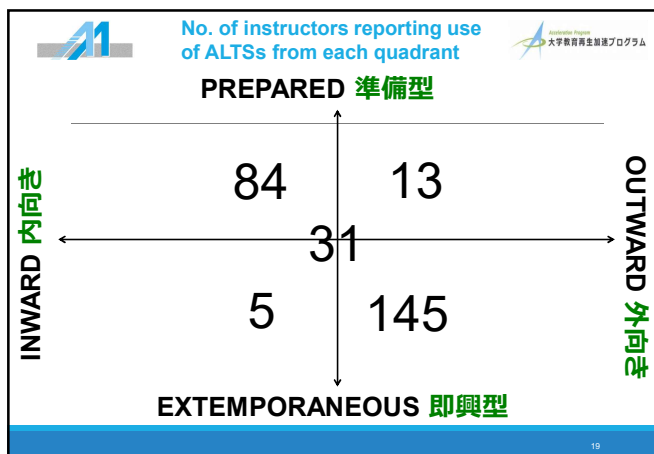
Student Questionnaire
学生へのアンケート



- 1) Demographic questions 人口学的背景
- 2) Perceptions of class activities (ALTs)
ALTsについての理解
- 3) Self-analysis of self-directed learning behaviors
能動的学習行動についての自己評価
- 4) Bloom's Taxonomy ブルームの目的分類
- 5) Self-reflection 振り返り

18

アクティブ・ラーニングの可視化

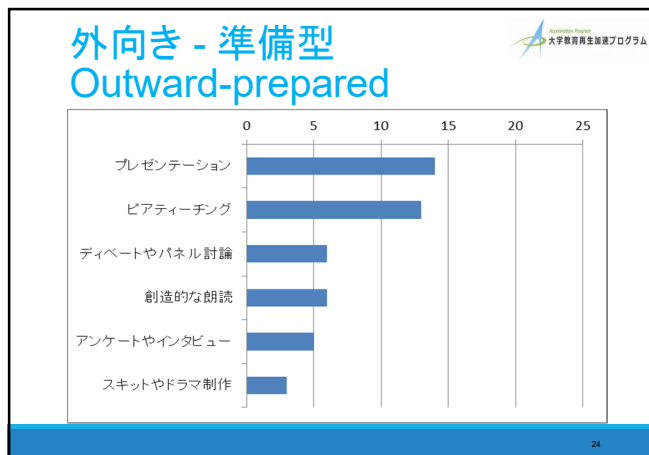
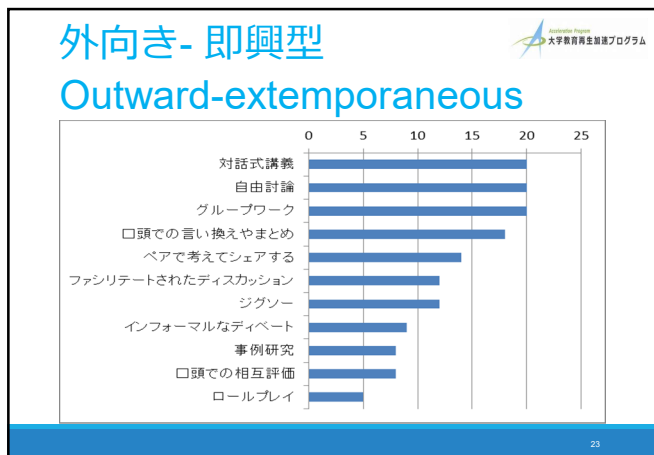


Results

思考する時間を取る	内向き-即興型	21
対話式講義	外向き-即興型	20
自由討論	外向き-即興型	20
質問に対するグループワーク	外向き-即興型	20
要約やまとめを記述する	内向き-準備型	19
口頭での言い換えやまとめ	外向き-即興型	18
読解	内向き-即興型	18
ペアで考えてシェアする、グループで考えてシェアする	外向き-即興型	14
プレゼンテーション	外向き-準備型	14
アクティブ・リスニング	内向き-即興型	14
ピアティーチング	外向き-準備型	13

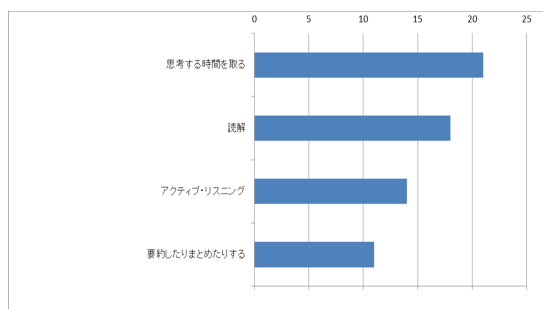
クリエイティブ・ライティング	内向き-準備型	13
リアクション・ライティング	内向き-準備型	13
学生が協力して行うプロジェクト	すべてのカテゴリーに含まれる	13
ファシリテートされたディスカッション	外向き-即興型	12
ファシリテートされた講義	内向き-即興型	12
自己評価	内向き-即興型	12
ジグソーアクティビティ	外向き-即興型	12
要約したりまとめたりする	内向き-準備型	11
フィードバック・アンケート/レポート	外向き-即興型	10
インフォーマルなディベート	外向き-即興型	9

作文に対する相互評価の記述	外向き-準備型	9
事例研究	外向き-準備型	8
作文についての口頭での相互評価	外向き-即興型	8
ジャーナル・ライティング	内向き-準備型	8
学生による評価基準の作成	すべてのカテゴリーに含まれる	8
実践への応用や実験	すべてのカテゴリーに含まれる	8
ディベートやパネル討論	外向き-準備型	6
創造的な朗読	外向き-準備型	6
ロールプレイや即興のスキット	外向き-準備型	5
アンケートやインタビュー	外向き-準備型	5
スキットやドラマ制作	外向き-準備型	3



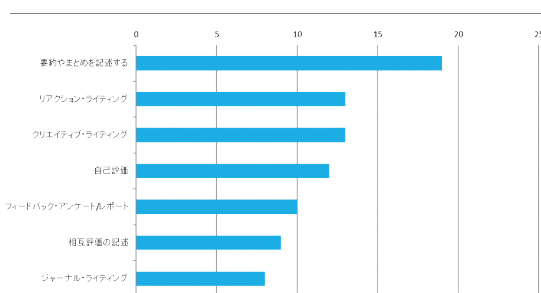
アクティブ・ラーニングの可視化

内向き- 即興型 Inward-extemporaneous



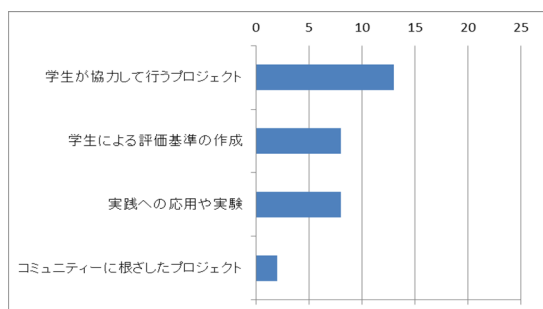
25

内向き- 準備型 Inward-prepared



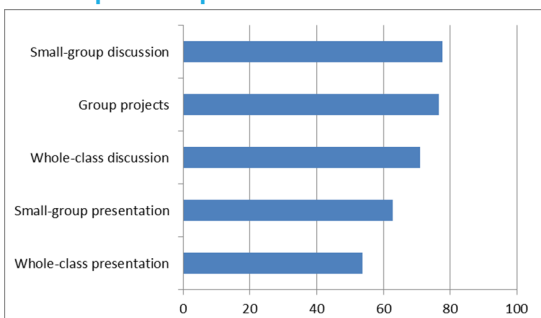
26

Multi-category すべてのカテゴリーに含まれる



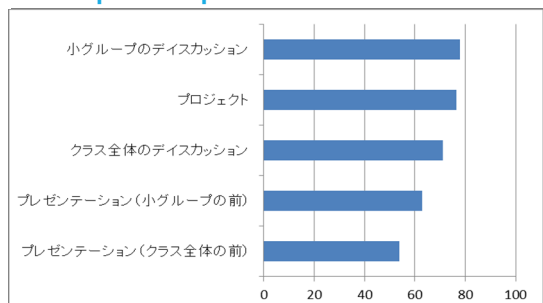
27

Student views of their own participation



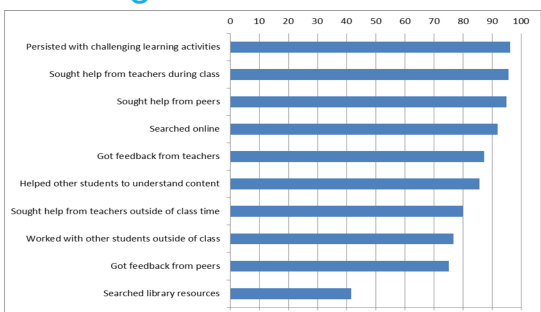
28

Student views of their own participation



29

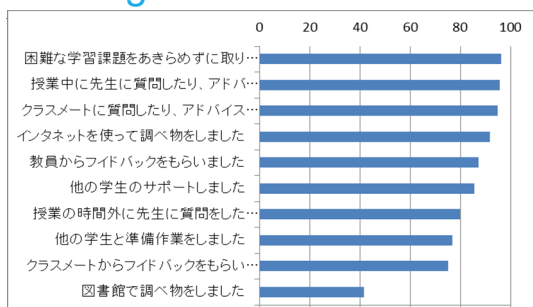
Students' autonomous learning behaviors



30

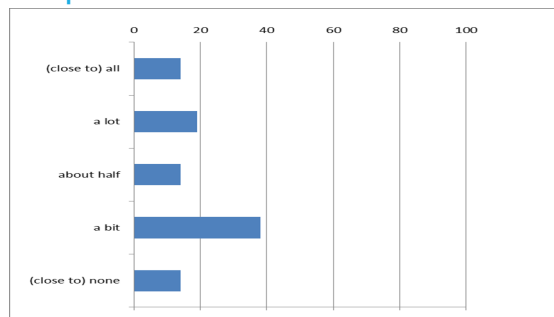
アクティブ・ラーニングの可視化

Students' autonomous learning behaviors



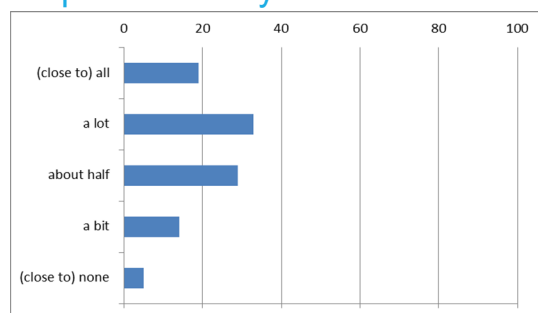
31

How much did the class emphasize memorization? Teachers:



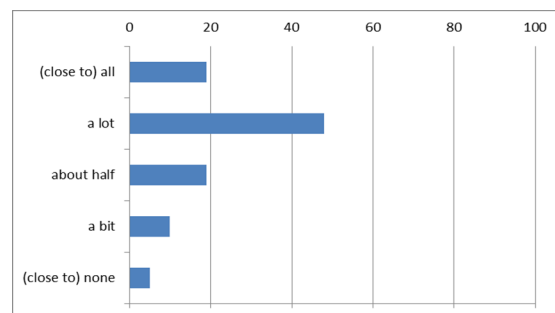
32

How much did the class emphasize analysis? Teachers:



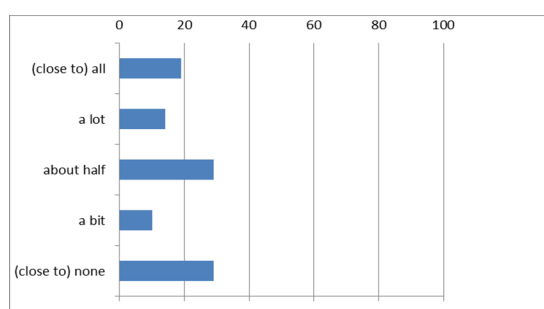
33

How much did the course emphasize synthesis and organization? Teachers:



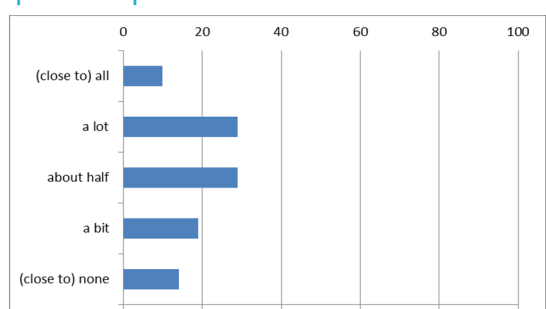
34

How much did the class emphasize making value judgements about information? Teachers:



35

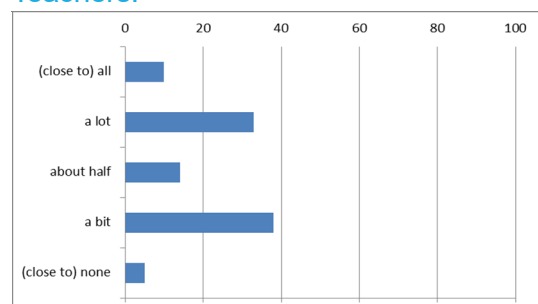
How much did the class emphasize applying concepts to practical problems? Teachers:



36

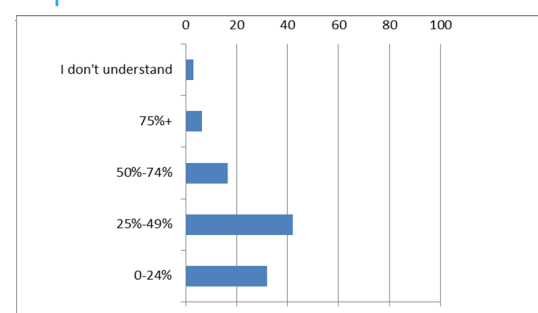
アクティブ・ラーニングの可視化

How much did the class emphasize getting students to use their creativity? Teachers:



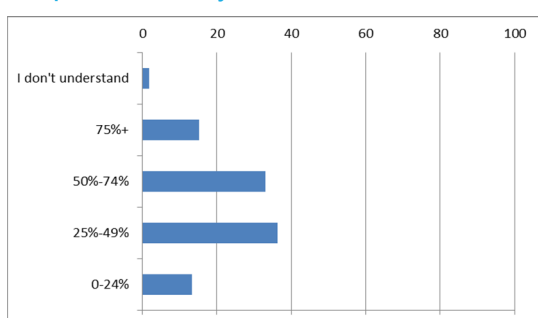
37

How much did the class emphasize memorization? Students:



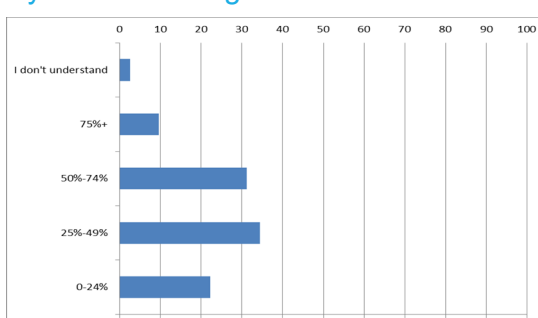
38

How much did the class emphasize analysis? Students:



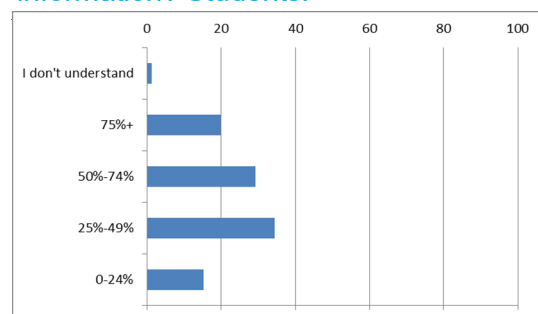
39

How much did the course emphasize synthesis and organization? Students:



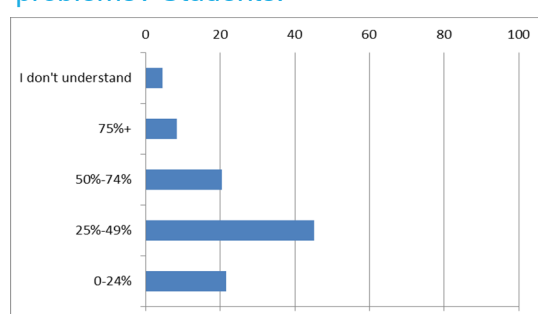
40

How much did the class emphasize making value judgements about information? Students:



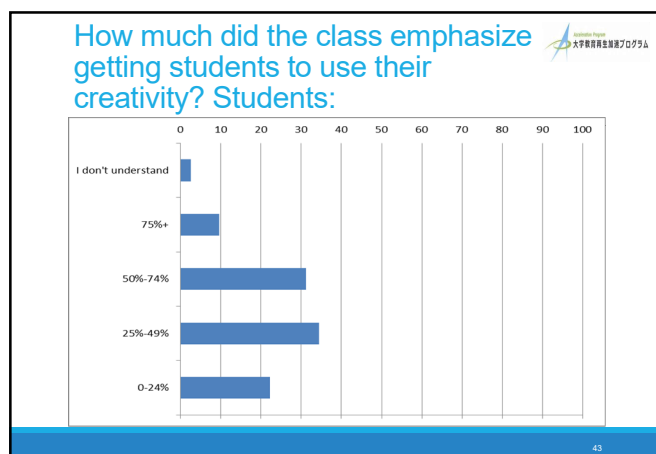
41

How much did the class emphasize applying concepts to practical problems? Students:

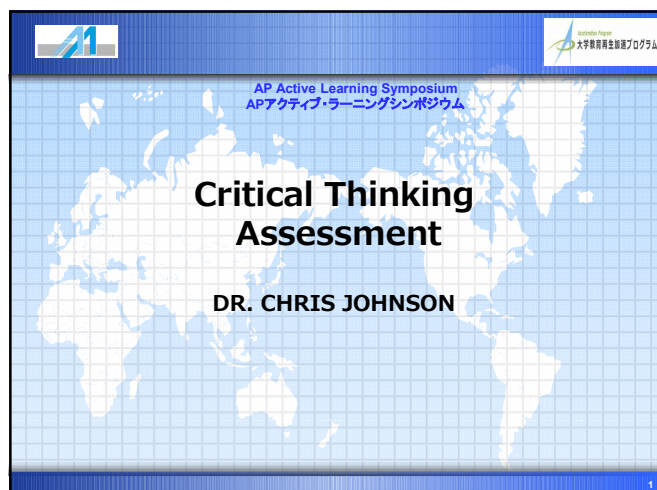


42

アクティブ・ラーニングの可視化



クリティカル・シンキング



概要

1. クリティカルシンキング(CT)グループの目的と使命
2. MICにおけるCTの開発
3. テスト問題の作成
4. テストの試行:パイロットテスト
5. 今後の予定

概要

1. クリティカルシンキング(CT)グループの目的と使命
2. MICにおけるCTの開発
3. テスト問題の作成
4. テストの試行:パイロットテスト
5. 今後の予定

CTグループの目的と使命

- MICにおける教養教育の伝統
アクティブラーニングとクリティカルシンキング
- 人文主義の伝統
賢明な探求と人格形成
責任感のある市民育成
- 思慮深い目標
現代の就労環境

教育実践としての目標

1. 学生の能力に関するフィードバック
2. 能力開発のための焦点を絞った教育
3. 教室における学習成果の査定

概要

1. クリティカルシンキング(CT)グループの目的と使命
2. MICにおけるCTの開発
3. テスト問題の作成
4. テストの試行:パイロットテスト
5. 今後の予定

クリティカル・シンキング

概要

1. クリティカルシンキング(CT)グループの目的と使命
2. MICIにおけるCTの開発
3. テスト問題の作成
4. テストの試行:パイロットテスト
5. 今後の予定

MICのCTテスト

1. 内容:どのスキルを測るのか？
2. 形式:どのようにしてそれらのスキルを測るのか？
3. 実施:誰を対象にどれくらいの頻度で行うのか？

基本のスキル

1. 関連情報を見極める
2. 情報の信頼性を見極める
3. 演繹的で論理的な推測
4. 帰納的で論理的な推測
5. 手法と攻略法
6. 分類的思考
7. 見通しを持った思考
8. 適用と評価

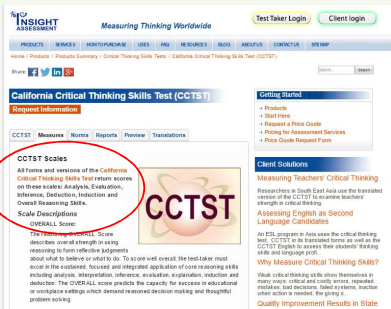
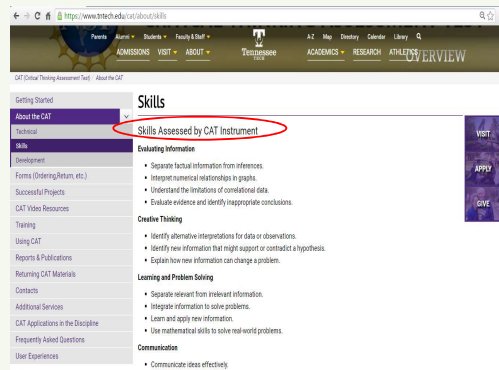


Table 1.2
Topics for Evaluating
Critical Thinking Ability
(Abbreviated Version)

- Elementary Clarification
 - 1. Focusing on a question
 - 2. Analyzing arguments
 - 3. Asking and answering questions that clarify and challenge
- Basic Support
 - 4. Judging the credibility of a source
 - 5. Making and judging observations
- Inference
 - 6. Making and judging deductions
 - 7. Making and judging inductions
 - 8. Making and judging value judgments
- Advanced Clarification
 - 9. Defining terms and judging definitions
 - 10. Identifying assumptions
- Strategies and Tactics
 - 11. Interacting on an action
 - 12. Interacting with others

Norris & Ennis, *Evaluating Critical Thinking*. Midwest Publications: Pacific Grove, 1989. p. 14

クリティカル・シンキング

概要

- 1. クリティカルシンキング(CT)グループの目的と使命
- 2. MICにおけるCTの開発
- 3. テスト問題の作成
- 4. テストの試行:パイロットテスト
- 5. 今後の予定

概要

- 1. クリティカルシンキング(CT)グループの目的と使命
- 2. MICにおけるCTの開発
- 3. テスト問題の作成
- 4. テストの試行:パイロットテスト
- 5. 今後の予定

基本スキル:詳細

- 1. Identifying Relevant Information
 - Identify relevant information
 - Identify relevant information
 - Identify relevant information
- 2. Evaluating the Reliability of Information
 - Evaluate sources of information
 - Evaluate sources of information
 - Evaluate sources of information
- 3. Identifying Logical Inference
 - Identify logical inferences
 - Identify logical inferences
 - Identify logical inferences
- 4. Identifying Logical Inference
 - Identify logical inferences
 - Identify logical inferences
 - Identify logical inferences
- 5. Identifying Logical Inference
 - Identify logical inferences
 - Identify logical inferences
 - Identify logical inferences
- 6. Identifying Logical Inference
 - Identify logical inferences
 - Identify logical inferences
 - Identify logical inferences
- 7. Identifying Logical Inference
 - Identify logical inferences
 - Identify logical inferences
 - Identify logical inferences
- 8. Identifying Logical Inference
 - Identify logical inferences
 - Identify logical inferences
 - Identify logical inferences
- 9. Identifying Logical Inference
 - Identify logical inferences
 - Identify logical inferences
 - Identify logical inferences
- 10. Identifying Logical Inference
 - Identify logical inferences
 - Identify logical inferences
 - Identify logical inferences
- 11. Identifying Logical Inference
 - Identify logical inferences
 - Identify logical inferences
 - Identify logical inferences
- 12. Identifying Logical Inference
 - Identify logical inferences
 - Identify logical inferences
 - Identify logical inferences
- 13. Identifying Logical Inference
 - Identify logical inferences
 - Identify logical inferences
 - Identify logical inferences
- 14. Identifying Logical Inference
 - Identify logical inferences
 - Identify logical inferences
 - Identify logical inferences
- 15. Identifying Logical Inference
 - Identify logical inferences
 - Identify logical inferences
 - Identify logical inferences
- 16. Identifying Logical Inference
 - Identify logical inferences
 - Identify logical inferences
 - Identify logical inferences
- 17. Identifying Logical Inference
 - Identify logical inferences
 - Identify logical inferences
 - Identify logical inferences
- 18. Identifying Logical Inference
 - Identify logical inferences
 - Identify logical inferences
 - Identify logical inferences
- 19. Identifying Logical Inference
 - Identify logical inferences
 - Identify logical inferences
 - Identify logical inferences
- 20. Identifying Logical Inference
 - Identify logical inferences
 - Identify logical inferences
 - Identify logical inferences
- 21. Identifying Logical Inference
 - Identify logical inferences
 - Identify logical inferences
 - Identify logical inferences
- 22. Identifying Logical Inference
 - Identify logical inferences
 - Identify logical inferences
 - Identify logical inferences
- 23. Identifying Logical Inference
 - Identify logical inferences
 - Identify logical inferences
 - Identify logical inferences
- 24. Identifying Logical Inference
 - Identify logical inferences
 - Identify logical inferences
 - Identify logical inferences
- 25. Identifying Logical Inference
 - Identify logical inferences
 - Identify logical inferences
 - Identify logical inferences
- 26. Identifying Logical Inference
 - Identify logical inferences
 - Identify logical inferences
 - Identify logical inferences

パイロットテスト:質問項目別測定スキル

	Identifying Relevant Information	Evaluating Reliability of Information	Deductive Logical Inference	Inductive Logical Inference	Methods & Strategy	Categorical Thinking	Perspectival Thinking	Application & Evaluation
Question 1								
Question 2								
Question 3								
Question 4								
Question 5								
Question 6								
Question 7								
Question 8								
Question 9								
Question 10								
Question 11								
Question 12								
Question 13								
Question 14								
Question 15								
Question 16								
Question 17								
Question 18								
Question 19								
Question 20								
Question 21								
Question 22								
Question 23								
Question 24								
Question 25								
Question 26								

概要

- 1. クリティカルシンキング(CT)グループの目的と使命
- 2. MICにおけるCTの開発
- 3. テスト問題の作成
- 4. テストの試行:パイロットテスト
- 5. 今後の予定

概要

- 1. クリティカルシンキング(CT)グループの目的と使命
- 2. MICにおけるCTの開発
- 3. テスト問題の作成
- 4. テストの試行:パイロットテスト
- 5. 今後の予定

クリティカル・シンキング

テストスコア

	CT score (SD)	TOEIC (SD)	GPA
1 st year	10.18 (3.76)	395 (87.46)	2.97
3 rd , 4 th year	13.36 (3.93)	589 (141.06)	2.99
ALL	11.72 (4.19)	486 (88.20)	2.98

相関: CTテストと英語力

ピアソンR: 0.6179

$p < 0.0001$

95% 信頼区間: 0.4747 to 0.7292

.00 - .19	とても弱い相関
.20 - .39	弱い相関
.40 - .59	中程度の相関
.60 - .79	強い相関
.80 - 1.0	とても強い相関

相関が強すぎる場合の問題点: 言語能力を測るテストになる

概要

1. クリティカルシンキング(CT)グループの目的と使命
2. MICにおけるCTの開発
3. テスト問題の作成
4. テストの試行: パイロットテスト
5. 今後の予定

概要

1. クリティカルシンキング(CT)グループの目的と使命
2. MICにおけるCTの開発
3. テスト問題の作成
4. テストの試行: パイロットテスト
5. 今後の予定

工程スケジュール

2016年11月—12月:

- CTテストの評価と校正を継続

2017年1月—3月:

- 基本スキル全体のスキルを分析する
- CTテストに参加するために必要な大学規定

2017年4月:

- 改訂版CTテスト実施

2017年4月—8月:

- 結果分析
- 必要に応じた改訂
- 既存のCTテストとMICのCTテストとの比較

未解決の問題と考慮すべき点

- 英語のみによるテスト
- 選択式問題の限界
 - 理論づけて説明するスキルを測れない
 - クリティカルシンキングの素質を評価できない
- 難易度の適切な設定

e-ポートフォリオ

2016アクティブ・ラーニング シンポジウム

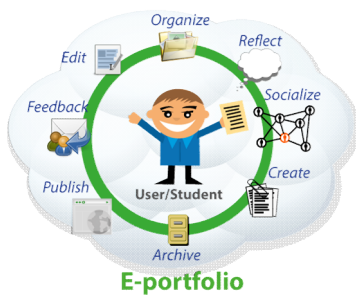
Visualizing Outcomes of Active Learning
with e-Portfolio
e-ポートフォリオを使ったアクティブ・
ラーニングの成果の可視化

准教授 Anderson Passos

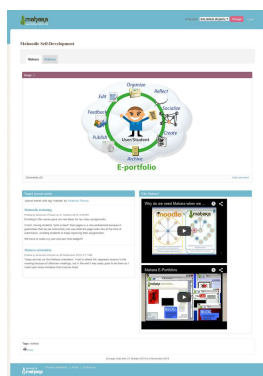
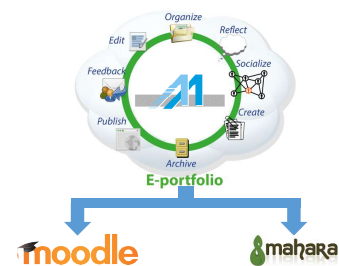
Agenda 本発表の概要

- What is the e-Portfolio
e-ポートフォリオとは？
- Schedule of implementation
実施スケジュールについて
- Orientation for faculty and students
教員と学生へのオリエンテーション
- Outcomes
成果
- Curricular changes
カリキュラム変更
- E-Portfolio intrinsic to a course
e-ポートフォリオの授業での使用

What is the e-Portfolio? e-ポート フォリオとは？



What is the e-Portfolio? e-ポート フォリオとは？



e-Portfolio Strengths 長所



- User Management ユーザーの管理



- Privacy プライバシー



- Controlled environment 制御環境

e-Portfolio Problems 問題点



- Technical limitations 技術的限界



- To get faculty on board 教員の賛同



- Assessment 評価

Schedule of implementation 実施スケジュール



Schedule of implementation 実施スケジュール

- 2014
 - Setting up of Moodle/Mahara environment
Moodle/Mahara (eポートフォリオ) 環境の整備
- 2015
 - Pilot use of Badges and Rubrics in Moodle
Moodleで、バッジとルーブリック使用のパイロット
 - Pilot use of journals in Mahara
Maharaで、日記使用のパイロット
 - End of year page for 1st year students
1年生の年末ページ
 - Study abroad (on campus) portfolio submitted in Mahara
Maharaで、留学ポートフォリオ(キャンパス内のみ)提出

Schedule of implementation 実施スケジュール

- 2016
 - Full implementation of e-portfolio course pages in Mahara (3 in total)
Maharaで、授業でのe-ポートフォリオページを学生が作成(計3つ)
 - End of year page for 1st and 2nd year students
1年生と2年生の年末ページ
 - Study abroad (on campus and off campus) portfolio submitted in Mahara
Maharaで、留学ポートフォリオ(キャンパス内とキャンパス外)提出

Schedule of implementation 実施スケジュール

- 2017
 - Continue efforts to train faculty through FD sessions
FDで、教員へのトレーニングの継続
 - End of year page for 1st, 2nd and 3rd year students
1、2、3年生の年末ページ

Orientation for faculty and students
教員と学生へのオリエンテーション



Orientation for faculty and students
教員と学生へのオリエンテーション



Orientation for faculty and students
教員と学生へのオリエンテーション



Outcomes 成果



Goals and Evidence: First Year
Portfolio
目標と証拠: 1年生の学年末のページ

understand:
meaning of liberal
arts

understand:
college study
skills

show:
relationship of first-
year goals to long-
term goals

show:
critical
thinking skills

show:
application of CT to
real-world issues

Evidence: coursework from three courses (general science, humanities, social science)
reflective writing in introductory text box & descriptions of evidence, career counseling data,
also Journals, other text, Moodle forums, etc.

Note: This e-portfolio submission must be 1 page, not including wall, friends, profile data or other sns
info. Links to Mahara coursework pages are allowed if linked to text which explains their relevance to
this submission.

End of Year Mahara Page Submission
Rubric
学年末ページ提出のルーブリック

	Bad	Acceptable	Good
Page Layout	Layout makes content hard to understand, contains inappropriate items 0points	Layout needs improvement 1points	Layout looks and functions well, contains title 2points
Reflective writing	Content missing, unreadable, or inappropriate 0points	Short, hard to read, lacking description 1points	Readable paragraph, describes page well 2points
General Science	Content missing or from a non-liberal arts course 0points	Title needs improvement, content not suitable 1points	Good title with proper content 2points
Social Science	Content missing or from a non-liberal arts course 0points	Title needs improvement, content not suitable 1points	Good title with proper content 2points
Humanities	Content missing or from a non-liberal arts course 0points	Title needs improvement, content not suitable 1points	Good title with proper content 2points
Active Learning	Content missing, unreadable, or inappropriate 0points	Short, hard to read, lacking description 1points	Readable journal or paragraph, describes AL experience well 2points
Goals and Tasks	Content missing, unreadable, or inappropriate 0points	Short, hard to read, lacking description 1points	Readable module or paragraph, describes goals/tasks well 2points
Submission	Problems with both screenshot and secret url 0points	Problem with either screenshot or secret url 1points	Proper use of screenshot & secret url 2points

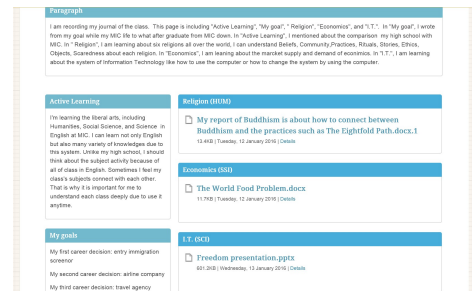
e-ポートフォリオ

Outcomes 成果

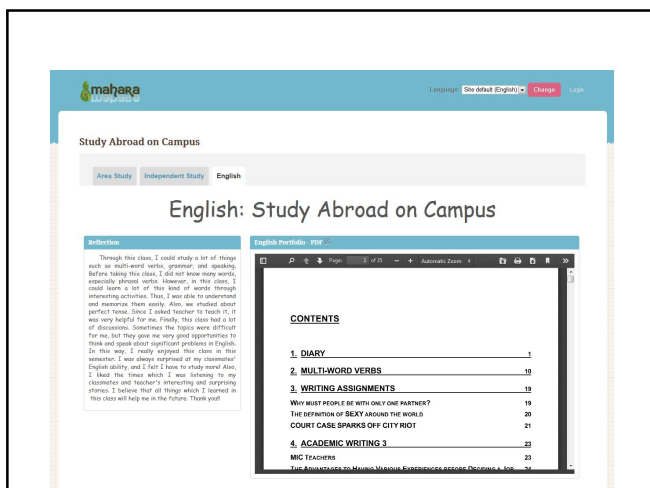
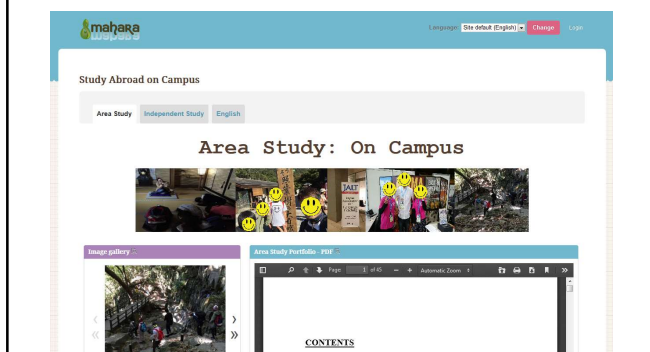
- e-portfolio course pages in Mahara (3 in total)
Maharaで授業ページの作成(3つの)
- Year-end pages: visualizing evidence of learning outcomes
年末のページ: 学修成果の証拠の可視化
- On-site SA e-portfolios assigned to sophomores on campus in fall
留学ポートフォリオ(キャンパス内のみ)の提出
- Faculty reappointment portfolios submitted in Mahara
Maharaで、教員の再任ポートフォリオ提出

The Final Product: 1st Year students (2015)

1年生の学年末マハラページの例



The Final Product: Study abroad 留学ポートフォリオの例



Curricular changes カリキュラム変更



Curricular Changes カリキュラム
変更

- Introduction to ICT course has become mandatory to all students
「情報通信技術概論」が必須科目になった
- Newly created courses had the e-Portfolio page included in their syllabi as a requirement
2016年度に新たに作られた科目で、e-ポートフォリオページ作成が必須となり、シラバスに明記されている

Introduction to Liberal Arts リベラル・アーツ入門
Introduction to Global Citizenship グローバル市民入門

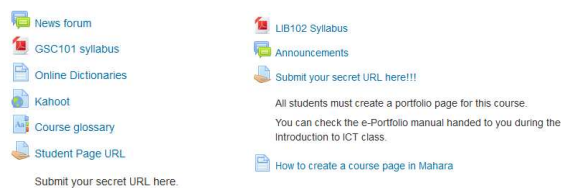
E-Portfolio Intrinsic to a Course
e-ポートフォリオの授業での使用







































































































































Making it Part of Students' Learning Experience
マハラを学生の学習経験へ

- Assignment submissions online
オンラインでの課題提出
- Make grades available to students and keep them up-to-date
学生が成績にアクセスでき、成績をアップデートできる
- Make sure students keep a class journal
授業の日記を必須とする
- Page assessment (optional)
ページの評価(選択)

Integrating it in the Moodle Course マハラのムードルへの統合

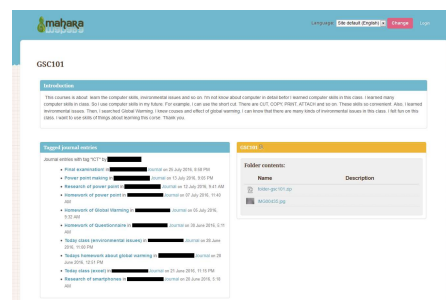


Integrating it in the Moodle Course マハラのムードルへの統合

The Final Product: Introduction to ICT

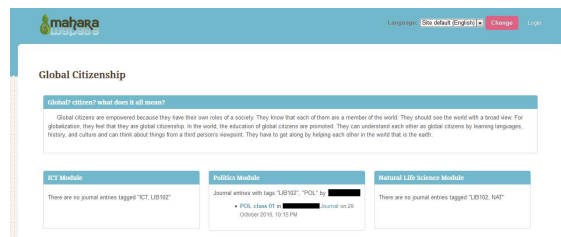
ICT入門コースでの例



The Final Product: Introduction to Liberal Arts リベラルアーツ入門での例



The Final Product: Introduction to Global Citizenship 世界市民入門での例



Home by [redacted] (@sky.miyazaki-mic.a): [redacted]

Journal: SCI151 - Home by [redacted] (@sky.miyazaki-mic.a): [redacted]
Student's vs Teacher's Journal : Typing

Posted by [redacted] on 21 December 2015, 6:02 PM

Today we learned about excel pro-
gram about this program, because
that we went to researched from s-
more than students, which teache-
car too. For students, the most co-
seem like more colorful than stude-
for both are silver.



I tried quickly type as possible as I. At first, I couldn't type just little quickly, but everyone around by me can type very quickly. Therefore, I disappointed about it. I practiced hard many times. Finally, I got 33 score. Another student's score is more better than me, but I think "The process is more important than result." So, I little satisfied it result. I will try without watch key board. And I want to become more quickly type.

ELEMENT	Exemplary (3 points)	Proficient (2 points)	Partially Proficient (1 point)	Unsatisfactory (0 points)	POINTS
Pre Production / Drafts	Student clearly have written several drafts before engaging in writing the final assignment. Effectively used mind mapping and/or brainstorming.	Student wrote at least a draft before submitting the final work. Mind mapping/brainstorming may be not present but review of draft might make up for it.	Student did at least one of the following: - draft - mind mapping - brainstorm	No drafts, no mind mapping and no brainstorming before start writing the final work.	___/3

UPLOAD: word file with your typing scores AND a paragraph explaining it.

Submission status


Submission status	No attempt				
Grading status	Not graded				
Due date	Tuesday, 8 December 2015, 1:00 PM				
Time remaining	Assignment is overdue by: 50 days 6 hours				
Grading criteria	Pre-Production / Drafts	No drafts, no mind mapping and no brainstorming before start writing the final work. <i>0 points</i>	Student did at least one of the following: - draft - mind mapping - brainstorm <i>1 points</i>	Student wrote at least a draft before submitting the final work. Mind mapping/brainstorming may be not present but review of draft might make up for it. <i>2 points</i>	Student clearly have written several drafts before engaging in writing the final assignment. Effectively used mind mapping and/or brainstorming. <i>3 points</i>

Thank you


Anderson Passos (apassos@sky.miyazaki-mic.ac.jp)
E-Portfolio Office (ap@sky.miyazaki-mic.ac.jp)



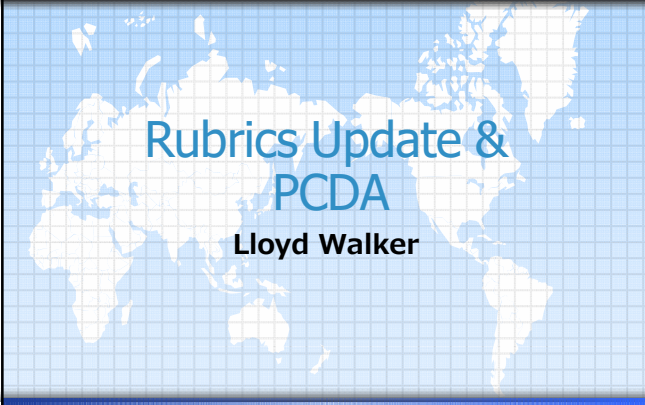
ルーブリック



AP Active Learning Symposium
APアクティブラーニングシンポジウム




大学教員共生支援プログラム



Rubrics Update & PCDA


Lloyd Walker



Rubrics PDCA: What We Have Done

これまで行ったこと


Education	Implementation	Evaluation
<ul style="list-style-type: none"> Assessed educational needs 教育的な必要性の調査 Performed Digital Faculty Development Seminar FDセミナーのオンライン実施 Performed Live Faculty Development Seminar and Workshop FDセミナーの実施 Performed additional One-on-One Tutoring, as needed 個別指導の実施 Began sharing rubrics in a shared file ルーブリックの共有 	<ul style="list-style-type: none"> Conceptualized and drafted college-wide templates 大学全体のテンプレートの概念化と作成 Requested and analyzed faculty feedback on templates 教員からのテンプレートへのリクエストとフィードバックの分析 	<ul style="list-style-type: none"> Evaluated faculty understanding of rubrics 教員のルーブリックの理解度の評価 Evaluated faculty attitude toward rubrics 教員のルーブリックに対する態度の評価 Evaluated current faculty use of rubrics 教員のルーブリック使用についての評価



Rubrics PDCA: What We are Doing

現在行っていること


Education	Implementation	Evaluation
<ul style="list-style-type: none"> Growing the shared rubrics file ルーブリックの共有の拡大 Continuing to meet with faculty, as needed 必要に応じた教員への対応 Individually explaining our rubrics-based syllabi to our students 学生へのルーブリック・ベース・シラバスの説明 	<ul style="list-style-type: none"> Including rubrics on syllabi シラバスへのルーブリック導入 Continuing analysis of faculty feedback on rubrics 教員からのフィードバックの継続的分析 Continuing modification of rubric-based syllabus templates ルーブリック・ベース・シラバスのテンプレートの継続的な改良 	<ul style="list-style-type: none"> Continuing evaluation of faculty attitudes toward rubrics 教員のルーブリックに対する態度の評価の継続 Continuing evaluation of faculty use of rubrics 教員のルーブリック使用についての評価の継続



Rubrics PDCA: What We Will Do

今後行うこと


Education	Implementation	Evaluation
<ul style="list-style-type: none"> Continue to share rubrics among faculty 教員間のルーブリックの共有の継続 Continue to meet with individual faculty, as needed 必要に応じた教員への対応の継続 Continue to give Faculty Development Seminars, focused on workshoping different types of rubrics for different classes and assignments 異なる授業と課題のための新たなルーブリックのワークショップなどのFDの継続 Student seminars 学生へのセミナー 	<ul style="list-style-type: none"> Enhance the modification of template rubrics ルーブリック・テンプレートの改良の促進 Increase the personalization of rubrics for each course コースごとのルーブリックの固有化の促進 College-wide integration of rubrics with working groups, including E-portfolio, Critical Thinking, & Active Learning E-portfolio, カリキュラム・シリングなどのワーキンググループとともに大学全体の統合したルーブリックの作成 	<ul style="list-style-type: none"> Continue to study the effect of rubrics on student and faculty communication, especially related to institutional, course, and personal goals 大学、科目、学生個人の目標に効果的な手段を模索することによるコミュニケーションの促進の継続 Continue to evaluate faculty use of rubrics 教員のルーブリック使用についての評価の継続 Assess effect of rubrics on student understanding, communication, and satisfaction 学生の理解力、コミュニケーション、満足度についてのルーブリックの効果の評価



PDCA: CHECK—one part of the checking process

Evaluation 評価
<ul style="list-style-type: none"> Evaluated faculty understanding of rubrics 教員のルーブリックの理解度の評価 Evaluated faculty attitudes toward rubrics 教員のルーブリックに対する態度の評価 Evaluated current faculty use of rubrics 教員のルーブリック使用についての評価

Next up: An introduction to some of our survey results
次: 学内の調査結果



Sample of Faculty use of rubric & faculty reflections

教員によるルーブリックの活用とフィードバック

- A survey regarding rubrics was administered to EDU and ILA faculty (ILA faculty included both Content and Language Faculty)
- 両学部の教員を対象にルーブリックに関するアンケートを実施しました

ルーブリック

PDCA: CHECK —one part of the checking process

Sample Survey Question 1:

- For Spring 2016, did you find the rubric useful?
MICルーブリックは役に立ちましたか。

Result: In spring of 2016, **60%** of faculty were **positive** about the **usefulness** of rubrics.

Significant positive feedback:

- 56% → "Rubric helped me to plan the objectives for the course."
授業の目標を計画するのに役立つ
- 44% → "Rubric helped to show students where their performance level stood."
学生にその時点での成績のレベルを示すのに役立った

PDCA: CHECK —Survey Results II

Sample Survey Question 2:

Did you alter the rubric to fit your course or activities in your course? If yes, why?
科目や授業活動に合わせてルーブリックを調整しましたか？調整した場合、なぜそうしたか？

Result: For faculty who said that they had altered the rubric to fit their own course, 67% gave the reason "The original rubric did not fit the content in my course" when asked for reasons why they altered 50% or more of the school rubric.
ルーブリックの内容を50%以上変更した教員の67%は、「この授業の内容に合っていないため変更した」と回答した。

PDCA: CHECK —Survey Results III

Sample Survey Question 3:

- With what kinds of activities did you use rubrics?
どのような活動にルーブリックを使用しましたか？

RESULT:

The majority of respondents who frequently or somewhat frequently, use rubrics used them on presentations 67%, and papers or essays 66%
ルーブリックをよく使用する教員の大半はプレゼンテーション(67%)及びレポートや小論文(66%)の評価に使用する

PDCA: CHECK —Survey Results IV

Sample Survey Result 4:

- 61% of respondents stated that they felt a Workshop on how to tailor the MIC rubric to personal needs would be useful.
61%の教員はルーブリックを個別のニーズ(目標)に合わせて調整する方法に関するワークショップや研修が必要と感じている

Rubric Samples —Please see Appendix 1 & 2


- An adaption of the institutional syllabus
全学ルーブリックの応用例①(米文学担当教員の事例)
- An example of an adapted rubric
全学ルーブリックの応用例②(心理学担当教員の事例)

資料① SYLLABUS RUBRIC EXAMPLE 1

This is a rubric outlining course objectives and explanations of what it means to proficiently master those objectives. After reading through the document below, write in what you think it means to exceed expectations and what you think it means to show that you failed to meet or even surpass the levels below. Circle or highlight the answers that best fit your current level of proficiency in the notes section, and answer questions for yourself.

	Developing	Proficient	Advanced
Critical Thinking through Active Learning (ability to identify and solve problems; information gathering; assessment of credibility)		Advanced Able to perform data analysis, gather and assess resources, and express opinions cogently. Able to ask and answer questions beyond comprehension level. Able to create and support an original argument.	
Communication Proficiency (presentations, social skills, email etiquette)		Advanced Able to contribute meaningfully to class discussions. Able to create a relevant response when asked to express an opinion or respond to a complicated situation. Able to research, prepare, and communicate ideas and questions to classmates and instructor orally and in writing.	
Global Perspectives (cultural relevancy, awareness of current and historical events and global issues)		Advanced Aware of current and historical events and world cultures. Demonstrates ability to learn about and understand cultural relevance of issues presented in texts and discussion.	
English Language Ability (reading, writing, speaking)		Advanced Proficient oral and written communication; does not rely only on familiar vocabulary but continues to build lexicon. May make some errors but advances beyond comfort zone, showing growth and effort.	

ルーズブリック

 The University of Chicago Master's International Course Description			
<p>Below is a table containing course descriptions and a synopsis of what students in this program are particularly trained to do. Please read carefully. Address the questions below. This is not a test. It is a tool to help you understand the program and to help you decide if it is the right program for you. It is not a test of your ability to do the program. It is a tool to help you understand the program and to help you decide if it is the right program for you.</p>			
Critical Thinking	Developing	Proficient	Advanced
<p>Learning</p> <p>Students will be able to:</p> <ul style="list-style-type: none"> analyze and synthesize information identify and evaluate the strengths and weaknesses of arguments identify and evaluate the strengths and weaknesses of arguments <p>Communication</p> <p>Students will be able to:</p> <ul style="list-style-type: none"> communicate effectively in writing communicate effectively in writing 	<p>Students will be able to:</p> <ul style="list-style-type: none"> analyze and synthesize information identify and evaluate the strengths and weaknesses of arguments identify and evaluate the strengths and weaknesses of arguments <p>Students will be able to:</p> <ul style="list-style-type: none"> communicate effectively in writing communicate effectively in writing 	<p>Students will be able to:</p> <ul style="list-style-type: none"> analyze and synthesize information identify and evaluate the strengths and weaknesses of arguments identify and evaluate the strengths and weaknesses of arguments <p>Students will be able to:</p> <ul style="list-style-type: none"> communicate effectively in writing communicate effectively in writing 	<p>Students will be able to:</p> <ul style="list-style-type: none"> analyze and synthesize information identify and evaluate the strengths and weaknesses of arguments identify and evaluate the strengths and weaknesses of arguments <p>Students will be able to:</p> <ul style="list-style-type: none"> communicate effectively in writing communicate effectively in writing
<p>Global Perspectives</p> <p>Students will be able to:</p> <ul style="list-style-type: none"> analyze and synthesize information identify and evaluate the strengths and weaknesses of arguments identify and evaluate the strengths and weaknesses of arguments <p>English Language</p> <p>Students will be able to:</p> <ul style="list-style-type: none"> communicate effectively in writing communicate effectively in writing 	<p>Students will be able to:</p> <ul style="list-style-type: none"> analyze and synthesize information identify and evaluate the strengths and weaknesses of arguments identify and evaluate the strengths and weaknesses of arguments <p>Students will be able to:</p> <ul style="list-style-type: none"> communicate effectively in writing communicate effectively in writing 	<p>Students will be able to:</p> <ul style="list-style-type: none"> analyze and synthesize information identify and evaluate the strengths and weaknesses of arguments identify and evaluate the strengths and weaknesses of arguments <p>Students will be able to:</p> <ul style="list-style-type: none"> communicate effectively in writing communicate effectively in writing 	<p>Students will be able to:</p> <ul style="list-style-type: none"> analyze and synthesize information identify and evaluate the strengths and weaknesses of arguments identify and evaluate the strengths and weaknesses of arguments <p>Students will be able to:</p> <ul style="list-style-type: none"> communicate effectively in writing communicate effectively in writing
<p>NOTE:</p> <p>Students will be able to:</p> <ul style="list-style-type: none"> analyze and synthesize information identify and evaluate the strengths and weaknesses of arguments identify and evaluate the strengths and weaknesses of arguments <p>Students will be able to:</p> <ul style="list-style-type: none"> communicate effectively in writing communicate effectively in writing 	<p>Students will be able to:</p> <ul style="list-style-type: none"> analyze and synthesize information identify and evaluate the strengths and weaknesses of arguments identify and evaluate the strengths and weaknesses of arguments <p>Students will be able to:</p> <ul style="list-style-type: none"> communicate effectively in writing communicate effectively in writing 	<p>Students will be able to:</p> <ul style="list-style-type: none"> analyze and synthesize information identify and evaluate the strengths and weaknesses of arguments identify and evaluate the strengths and weaknesses of arguments <p>Students will be able to:</p> <ul style="list-style-type: none"> communicate effectively in writing communicate effectively in writing 	<p>Students will be able to:</p> <ul style="list-style-type: none"> analyze and synthesize information identify and evaluate the strengths and weaknesses of arguments identify and evaluate the strengths and weaknesses of arguments <p>Students will be able to:</p> <ul style="list-style-type: none"> communicate effectively in writing communicate effectively in writing

1. An adapted Syllabus

1. **Use:** It was used in a 3rd & 4th year Abnormal Psychology Course.
3・4年次の授業「異常心理学」に使用
2. **Purpose:** It was used at the end of the term to help students understand the parameters of the assignment and for evaluating presentations
学期末の課題及びプレゼンテーションの評価基準への学生の理解を促進するために活用
3. **Criteria:** Criteria for the rubric language was chosen by the teacher but approved by the students in the class.
ルーブリックの評価項目は教員によって作成し、学生の承諾を得た

Appendix 1

4. **Description of the activity:** Students were placed in groups of four and one member of each group presented to their own group, while at the same time other members of the class were presenting to their own small groups. The members of each group were required to use the rubric to give feedback and a numerical grade to the speaker. Student feedback was taken into account, along with the PPT or flir, by the teacher during consideration of the final presentation grade.

学生は4人のグループに分かれ、それぞれのグループの代表が他の構成員に対して発表した。それぞれのグループでルーブリックに基づいて相互の発表に対するフィードバックを行い、点数で評価した。担当教員は学生からのフィードバック、パワーポイントや配布物の内容などを反映させるようにプレゼンテーションの最終評価を行った。

Appendix 1

5. **Reflection:** the teacher and students found it to be a useful tool. Students said that the clearness of the rubric helped them better understand the parameters of the assignment. The teacher stated that it made grading the presentations much easier. She will continue to use rubrics because they offer good guidelines before the assignment and help to maintain transparency and objectivity during the grading process.

教員及、学生両者ともルーブリックを「役に立つツール」として評価している。学生はルーブリックによってプレゼンテーションの作成基準が明確で分かり易いため課題の評価範囲がよく理解できたと述べた。教員にとってもプレゼンテーションを評価する上でルーブリックが大変役に立つと感じた。また、課題のガイドラインの明確化や評価過程の透明性及び客観性を担保することができることから、今後ルーブリックを継続活用すると述べた。

資料② Sample Rubric from a Psychology Course

	1	2	3	4	5	Score
Presentational material	Disorganized and lacks coherence in the use of the text/matrix.	The presenter seems to learn from the audience's reactions.	The presenter makes the presentation less awkward by using the text/matrix.	The presenter is confident, easy to talk at, visually interesting.	The presenter is confident, easy to talk at, visually interesting. The presenter is highly skilled at using the text/matrix.	
Availability of information	Information is too basic or too difficult. It lacks the information not available through the audience's observation.	Some information is basic or too difficult. It lacks the information not available through the audience's observation.	The presenter's presentation is so excellent that the more the presenter uses the text/matrix the more the audience wants to learn.	The presenter is confident, easy to talk at, visually interesting.	The presenter is confident, easy to talk at, visually interesting. The presenter is highly skilled at using the text/matrix.	
Planning (not for fear)	Early language effect (not encouraging)	Early language effect (not encouraging)	Early language effect (not encouraging)	Early language effect (not encouraging)	Early language effect (not encouraging)	
Anting 2 questions	Early language effect (not encouraging)	Early language effect (not encouraging)	Early language effect (not encouraging)	Early language effect (not encouraging)	Early language effect (not encouraging)	
Quality of research	Information is not relevant to the topic. The audience would not want to see the research.	Information is not relevant to the topic. The audience would not want to see the research.	Information is not relevant to the topic. The audience would not want to see the research.	Information is not relevant to the topic. The audience would not want to see the research.	Information is not relevant to the topic. The audience would not want to see the research.	
Questions	Presenter is developing presentation. The audience is not interested in the presentation.	Presenter is developing presentation. The audience is not interested in the presentation.	Presenter is developing presentation. The audience is not interested in the presentation.	Presenter is developing presentation. The audience is not interested in the presentation.	Presenter is developing presentation. The audience is not interested in the presentation.	
Content 2 questions	Presenter is developing presentation. The audience is not interested in the presentation.	Presenter is developing presentation. The audience is not interested in the presentation.	Presenter is developing presentation. The audience is not interested in the presentation.	Presenter is developing presentation. The audience is not interested in the presentation.	Presenter is developing presentation. The audience is not interested in the presentation.	
Conclusion	Presenter is developing presentation. The audience is not interested in the presentation.	Presenter is developing presentation. The audience is not interested in the presentation.	Presenter is developing presentation. The audience is not interested in the presentation.	Presenter is developing presentation. The audience is not interested in the presentation.	Presenter is developing presentation. The audience is not interested in the presentation.	

PDCA: ACTION —What We Will Do

- Continue to study the effect of rubrics on student and faculty communication, especially related to institutional, course, and personal goals
- 大学、科目、学生個人の目標に関連する学生と教員のコミュニケーションについてのルーブリックの効果に関する調査の継続
- Continue to evaluate faculty use of rubrics
- 教員のルーブリック使用についての評価の継続
- Assess effect of rubrics on student understanding, communication, and satisfaction
- 学生の理解力、コミュニケーション能力、満足度についてのルーブリックの効果の評価

ルーブリック

PDCA: ACTION —What We Will Do

今後行うこと

- We are working on the institutional rubric to achieve more clarity and emphasis on active learning and critical thinking outcomes

学修成果の可視化におけるアクティブ・ラーニングとクリティカル・シンキングのさらなる明確化及び重視を図るべく、全学ルーブリックを再考する

- In the next stage we will apply the rubric to the objectives of the Critical Thinking, Active Learning and e-Portfolio Working Groups

次の段階で、各ワーキング・グループの目標に合わせて有機的関連付ける作業に入る

Active Learning through Student Engagement & Total Participation Techniques

Active Learning Workshop 2016
Julia Christmas
Miyazaki International College

Active Learning—Key Idea I

- Learning is Clear & Engaging
 - Outcomes/goals/expectations are clear. (Can-do/Rubrics)
 - Students are engaged with each other, with the learning process, and with the content.

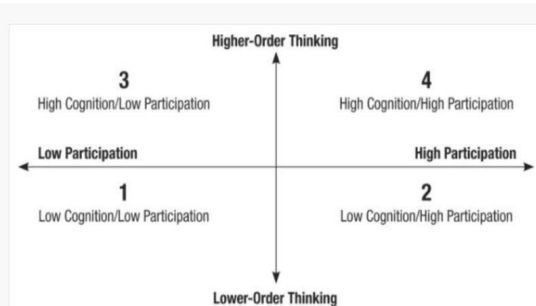
Key Idea II—Co-construction & Safety

- Learning is co-constructed and empowering.
 - Co-construction means learning is **not a one-way street**. Students learn from each other, from me and I learn from them as well.
 - Learning occurs, as often as possible, in a student-centered environment. The classroom a **safe place** for discussion and idea exchange.

Key Idea III—Empowerment

- Students feel powerful because they can see what they can do, understand where they need to make progress and know they can get help with what they can't do yet. (Because teachers use can-do lists and rubrics).
- Empowerment means students learn to value their own potential by looking at what they have already accomplished and helping them to make goals for their future.

Critical Thinking Connects with Engagement & Participation



Source: Himmele, P., & Himmele, W. (2011). Total participation techniques: Making every student an active learner. Alexandria, VA: ASCD.

Engagement Model of Active Learning

[The engagement model] “is aimed at helping you visualize the relationship between total participation and higher-order thinking in your classroom. Evidence of learning will occur when students are actively participating and developing higher-order thinking, as is the case when activities fit into Quadrant 4 in the model. Although all of the quadrants may reflect important aspects of your teaching, be sure to shift back to Quadrant 4 throughout your lesson to allow students to **process and interact** regarding the learning.”

(Himmele & Himmele, 2011, p. 14)

ワークショップ

Next up: Workshop Style

Let's try some Active Learning, Engagement classroom activities

- 1. With "Talk & Chalk"
- 2. Total Participation Techniques
- 3. Active Learning Engagement Activities

Active Engagement with "talk & chalk"

- 1. Teacher talks (lecture/explanation)
- 2. Pair, janken, winner shares
- Pause for "processing & digestion"
- Teach students to pause as they read too.

Expanded for more skills

- 1. Teacher talks e.g. comparatives & superlatives (Tokyo Tower/Sky Tree/Eiffel Tower)
- 2. Solo write/do (e.g. with vocab. or grammar)
- 3. Pair, Janken,—winner shares (with their partner & sometimes the whole class)
- 4. (optional) Change partners, Janken—winner shares

Total Participation Techniques

- Assigning Roles (Everyone MUST speak)
(One example)
 - a. Students learn how to make questions on a topic. (Food, sports, seasons, animals, music, etc.)
 - b. Students memorize ways to agree and disagree (e.g. "I agree because...", "Me too, because..." or "I disagree because...")
 - c. MODEL—Then, put students in groups and assign roles (write on board)

Roles continued—Hot Seat Game

AIMS: Question Making, Listening skills & 2-way communication skills practice, agreeing and disagreeing with reasons practice

Activity: Hot seat (Role 1 person is "in the hot seat")

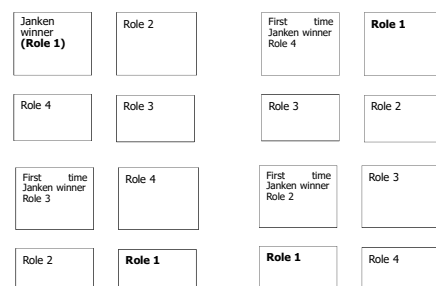
- **Plan: (This assumes that students can make questions, agree & disagree using because)**
 1. Generate possible topics on board and make groups of 4.
 2. Use one strong group to model roles in front of class.
 3. Use Janken to assign roles, or pass out numbers.
- **Role 1** is the winner at Janken.
- **Draw a diagram on the board to illustrate as necessary.**
- **Roles rotate clockwise four times.**

Roles—Hot Seat game (Model)

- Topics: Food, Seasons, Sports

HOT SEAT MISSIONS:

- **Role 1:** Choose the topic —and answer Role 2 person's question, etc.
- **Role 2:** Ask 1 question about the topic to the Role 1 person
- **Role 3:** Agree or disagree (using "because") with the Role 1 person
- **Role 4:** Ask a related (follow-up) question to the Role 1 person & React to the answer using agree/disagree and because.



HOT SEAT MISSIONS: (Make sure these are clear by modeling)

Role 1: Choose the topic —and answer Role 2 person's question, etc.

Role 2: Ask 1 question about the topic to the Role 1 person

Role 3: Agree or disagree (using "because") with the Role 1 person

Role 4: Ask a related (follow-up) question to the Role 1 person & React to the answer using agree/disagree and because.

ワークショップ

Missions can change:

- Role: “How about you?” (encourages silent group members)
- Role: Grammar assistant & Timekeeper
- Role: Question Writer
- Role: Dictionary/Fact Checker
- Role: Agree-er (must always agree)
- Role: Disagree-er (must always disagree)
- Role: The Questioner “Where did you get your information?” “Could you offer more details?” “How is that supported by the reading?”

Next up:

•3. Active Learning Engagement Activities

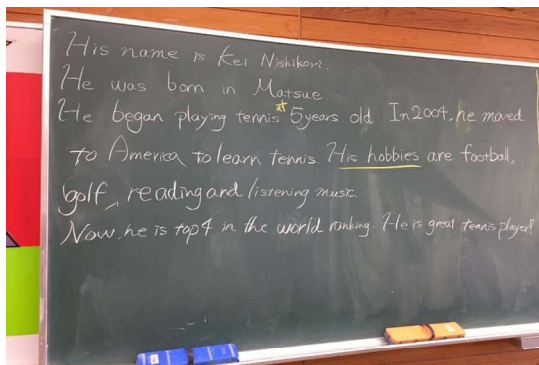
Active Engagement with 4 skills

1. Dictogloss –Sani Brown (Packet Activity 1)
2. Jigsaws (Packet Activity 2)
 - a) J.K. Rowling, Malala, (Timeline & Key words)
 - b) Shichi-Go-San, Kyari-Pamyu-Pamyu (Keyword maps)
3. Interview and share (Packet Activity 3)

Activity Packet 1-Dictogloss

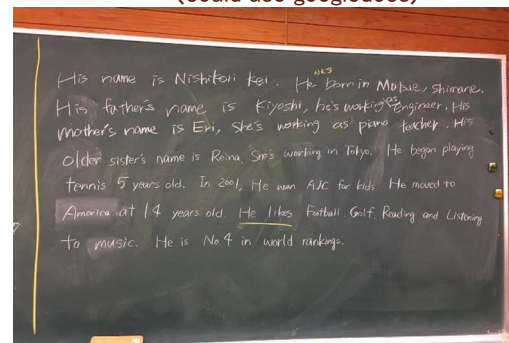


What it looks like 1...



What it looks like 2

... (could use googledocs)



ワークショップ

The Takeaway

- 1) “What do I want my students to be able to DO?” “Is this clear to me? Them?”
- 2) “How can I make my teaching more **engaging**?” (Interesting/relevant/Ss are DOING it—more **skills** are involved)
- 3) “How can I change my teaching to help more students learn?”
- 4) “How can I get them to realize and also SHOW me that they are learning?”

Thank you

Please contact me if you have
questions:
jchristm@sky.miyazaki-mic.ac.jp





宮崎国際大学のグローバル教育と AP事業への取組

大関智史
APアセスメントオフィサー
宮崎国際大学

1

宮崎国際大学

平成6年 比較文化学部 →平成18年 国際教養学部
日本で初めて英語でリベラル・アーツ教育を実践する大学

外国人教員が多数



少人数クラス




アクティブラーニング
クリティカル・シンキング

留学が必須




平成26年 教育学部 児童教育学科
総学生数：337人（平成29年度2月現在）



文部科学省 国際化推進プログラム

本学AP事業の目標



テーマⅠ：アクティブ・ラーニング（AL）

1. 実践しているALを体系化し、効果的なALを特定
2. 英語スキルを向上させるALプログラムの構築

テーマⅡ：学修成果の可視化

1. クリティカル・シンキング(CT)を客観的に測定するツールの開発
2. ルーブリック・ベース・シラバスの導入による学修のPDCAを確立
3. e-ポートフォリオを用いて学修成果の可視化

事業の全体図

The diagram illustrates the overall business structure, centered around the concept of AL (Assessment Learning). It is divided into two main vertical sections: the top section for 'ALのベスト・プラクティス' (AL Best Practices) and the bottom section for '学修成果の可視化' (Visualization of Learning Outcomes).

Top Section: ALのベスト・プラクティス (AL Best Practices)

- ALのベスト・プラクティス** (AL Best Practices) is the central focus.
- 発展・体系化** (Development and Systematization) is shown as a process leading to the best practices.
- ICTの導入等環境整備** (Introduction of ICT and environment improvement) is a supporting factor.
- 既に実践中のAL** (AL already being practiced) is the current state.
- 基準の明確化 伸長** (Clarification of standards, extension) is a goal or outcome.

Bottom Section: 学修成果の可視化 (Visualization of Learning Outcomes)

- 学修成果の可視化** (Visualization of learning outcomes) is the central focus.
- CAT等** (CAT, etc.) and **TOEIC等** (TOEIC, etc.) are tools or methods used for visualization.
- CT** (Creative Thinking) and **英語スキル** (English skills) are specific learning outcomes.

Right Side: 学修成果の可視化 (Visualization of Learning Outcomes)

- 学修成果の可視化** (Visualization of learning outcomes) is the central focus.
- 学修のPDCA** (PDCA for learning) is a cycle involving **Plan (計画)**, **Do (実行)**, **Check (検証)**, and **Action (改善)**.
- 学修のPDCA** (PDCA for learning) is a cycle involving **Plan (計画)**, **Do (実行)**, **Check (検証)**, and **Action (改善)**.
- 学修のPDCA** (PDCA for learning) is a cycle involving **Plan (計画)**, **Do (実行)**, **Check (検証)**, and **Action (改善)**.

Bottom Right: e-ポートフォリオ (e-Portfolio)

- e-ポートフォリオ** (e-Portfolio) is the central focus.
- 授業外学習機能** (Out-of-class learning function) is a feature.
- 【ルーブリック・ベース・シラバス】** (Rubric-based syllabus) is a component.
- ALと学修成果の対応マップ** (Map of AL and learning outcomes).
- ALと対応する学修成果の達成目標の明記** (Clearing of achievement goals for learning outcomes corresponding to AL).
- 達成目標のルーブリック評価** (Rubric evaluation of achievement goals).

Legend:

- AL = アクティブ・ラーニング (Active Learning)
- CT = クリティカル・シンキング (Critical Thinking)

[illegible]

テーマⅠ

ALの手法の体系化



AL体系化のためのマトリックス（表）の作成

教員との対話による
ALの把握





授業見学及び教員
へのインタビュー





AL把握のための調査

教員へのALに関するアンケートの継続
マトリックスで本学でのALの手法を記録

今後の活動

効果的なALの明確化



テーマⅡ 本学独自のCT測定テスト

TENNESSEE TECH UNIVERSITY
NSF
CRITICAL THINKING ASSESSMENT TEST

宮崎国際大学
クリティカル・シンキングテスト
(MICCAT)

MICCAT初版
計26問4択問題
6つCTの技能を測定

今後の活動
信頼性の高いテストに改訂

Figure 4
CT Pilot Test - Distribution of Results (All Years)

Number of Students

Score

テーマⅡ ルーブリック・ベース・シラバスの導入による学修のPDCAを確立

シラバスに盛り込んだ国際教養学部共通ルーブリック

例

	Developing	Proficient	Advanced
Critical Thinking Analyze issues, identify and evaluate evidence, and make a reasoned judgment.	Identify issues and evidence.	Analyze issues and evidence, and make a reasoned judgment.	Analyze issues and evidence, and make a reasoned judgment, and make a reasoned judgment.
Communication Communicate effectively in writing and speaking.	Communicate effectively in writing and speaking.	Communicate effectively in writing and speaking.	Communicate effectively in writing and speaking.
Global Perspective Understand and appreciate the diversity of cultures and societies.	Understand and appreciate the diversity of cultures and societies.	Understand and appreciate the diversity of cultures and societies.	Understand and appreciate the diversity of cultures and societies.
English Language Use English effectively in writing and speaking.	Use English effectively in writing and speaking.	Use English effectively in writing and speaking.	Use English effectively in writing and speaking.

今後の活動
ルーブリックの有効活用
3つのポリシーを盛り込んだルーブリックの開発

テーマⅡ e-ポートフォリオを用いた学修成果の可視化

Moodleと連携するMaharaを導入
学修記録として活用（学年末、授業等）

例

今後の活動
学修成果の可視化に向けた活動

来年度以降の活動予定

ワーキンググループ(WG)
連携の指針・目標を制定

アクティブ・ラーニングWGとクリティカル・シンキングWG
ルーブリックWGとe-ポートフォリオWG

効果的なアクティブ・ラーニングの検証

具体的にどんな手法が何に対してどのように効果があるのかを測定

MICCAT第2版
ルーブリックの具体的な活用法及びその効果
学習成果の可視化のためのe-ポートフォリオ活用

IV. 平成 28 年度外部評価委員会

1. 第2回 AP 外部評価委員会

日時：平成 29 年 3 月 24 日（金曜日）：14 時 00 分～17 時 30 分

会場：宮崎国際大学 2 号館 103 号室

外部評価委員：林透 先生（山口大学、大学教育センター 准教授）

藤埴智一 先生（宮崎大学、教育・学生支援センター 准教授）

柳澤 聡 先生（延岡星雲高校教諭、本学卒業生）

中村清子 様（UMK 報道記者）

三上将司 さん（本学国際教養学部 3 年生）

時間	スケジュール（予定）
14:00 14:15	<p><場所：2-103></p> <p>□全体会（挨拶及び出席者紹介）</p> <ul style="list-style-type: none"> 開会の挨拶（永田学長）、本学教職員の紹介、外部評価委員自己紹介
14:15 15:15	<p><場所：2-102></p> <p>□外部評価委員会（セッション1）開催</p> <ul style="list-style-type: none"> 委員長の選出 委員による資料の精査及び事前打ち合わせ
	休憩（10 分）＊但し、委員会の準備が出来た段階で質疑応答を開始する。
15:25 16:25	<p><場所：2-103></p> <p>□質疑応答</p> <p>プロジェクト全体に関して、また、ワーキンググループ(WG)の活動に対する質疑応答（内容は外部評価委員会による）</p>
	休憩（5 分）
16:30 17:00	<p><場所：2-102></p> <p>□外部評価委員会（セッション2）開催</p> <ul style="list-style-type: none"> 補足質問と総評の準備 <p>委員長を中心に補足質問の有無と委員会としての総評を議論する。 （大学側も質疑応答の際の問題点等を協議・検討する（2-103））</p>
17:00 17:30 (30 分間)	<p><場所：2-103></p> <p>□全体会（外部評価委員会総評（補足質問））</p> <ul style="list-style-type: none"> 委員長による総評及び（必要に応じて）補足質問 （必要に応じて）補足質問への回答 閉会の挨拶（西村学長補佐）

2. 外部評価委員長の総評まとめ

1. アクティブ・ラーニングワーキンググループへのコメント

宮崎国際大学 (MIC) のアクティブ・ラーニングワーキングの活動について高く評価できるのは、まず、自大学でのアクティブ・ラーニング (AL) の取組を基に、類型化しようとしている点である。平成 28 年度からは教員・学生アンケートを通して精緻化を図っていることも評価できる。また、ベストプラクティスにこだわらず、Preferred Practices という捉え方をしようとしている点は柔軟性があり、評価できる。今後は、アクティブ・ラーニングの類型化の公開を通して、現実の授業実践にいかに関わられるか、授業改善・学修成果に効果を発揮できるかが問われる。平成 29 年度以降の取組に大きな期待を寄せたい。なお、各委員からの主なコメントは以下のとおりである。参照願いたい。

【A 委員】

ベストプラクティスをどのように選定方法に関して、採用頻度や教員の好みだけでなく、英語能力、クリティカルシンキング能力を高めるという観点からもっとも教育効果が高いプラクティスとは何かを探る必要がある。また、リベラルアーツ教育への効果として何がベストを考慮すると、アクティブラーニングの意義について、ディシプリンによって異なる傾向を探るだけでなく、リベラルアーツ教育の到達度という幅広い視点から、普遍的な教育効果を議論する必要がある。どのような活動をアクティブラーニングとして定義するかに関して、普段の授業風景の中に、少人数の授業で教員と学生が常に対話しながら、学生に考えさせ、答えさせ、修正し、それを共有するというプロセスが観察され、それが宮崎国際大の教育のスタンダードになっている。これをアクティブラーニングとしてカウントするのか、それともしないのか。アクティブラーニングの定義はベストプラクティスの選定に大きな影響を与える。

【B 委員】

20 年近くの実績がある MIC での AL を体系化し 他大学でも実践できるようモデル化を目指す取り組みは 幅広い人々への AL の理解促進に繋がる重要な取り組みだと考えます。教員・学生へのアンケートのデータをもとに他大学の教員も使用できるサイト等の構築が可能になれば MIC の教育の特色になると思います。来年度は「AL 関連のアンケートを改良する」とのことですが、「教員の AL 手法について学生の認識の程度を確認する調査」は AP の成否に繋がることだと思いますので、より多くの学生の声を抽出し生かしていただきたいと思います。また AL を体系化できたあと、客観的に示す努力と工夫が必要だと感じます。具体的には AL の詳細な年間授業数の公表や学生の評価、学生の成績への効果の有無などです。

関連して、日頃若い仲間たちと向き合うなかで感じていることを述べます。自ら考え、発想し行動を起こせる若い人材は地方では少ないです。疑問や異なる意見に直面した際に、自らの考えを胸の奥にしまい込まず、周囲に促されずに、自ら論理的に相手に説明できる力は、実社会で真に求められています。これには語彙力が必要だと考えます。外国語で自らの考えを述べる力を身

につけることは現代を生きる上での必須事項です。2018～2019 年度は「AL と CT の発達に関連性を明らかにしたい」とのこと、非常に興味深く感じております。大学内の取り組みで終わらせるのではなく、他大学に事例を示せるよう研究を続けていただきたいと思います。

【C 委員】

「アクティブ・ラーニング」という言葉の定義が必要だと感じました。高校においても、AL の導入が求められ、それぞれが実践してはいるものの、教員が各自の認識で行っているため、手法の共有や評価の統一、効果の検証がなされていません。それぞれの教授、職員の AL に対する認識を統一することが肝要であり、課題でもあると改めて感じました。MIC における 36～37 の AL のパターンが学内外に示されることで、その手法と効果が客観的に分析され、より明確な AL のイメージが共有されることを期待しています。

【D 委員】

文科省が定めたアクティブ・ラーニングの線引きを超えて、宮崎国際大学らしくアクティブ・ラーニングを続けてほしいと思う。先生の「アクティブ・ラーニングを自分ではしている」という瞬間と学生の「アクティブ・ラーニングを私は受けている」という感覚が必ずしも一致しているとは限らないため、学生から意見を取り入れようとする姿勢は大変いいと思う。

2. クリティカル・シンキングワーキンググループへのコメント

クリティカル・シンキング (CT) テストについて、テネシー工科大学開発テストを試行した上で、自主開発した MIC 版クリティカル・シンキングテスト (MICCAT) を試行し始めたことは高く評価できる。試行結果を検証しながら、アセスメントツールとして定着することを期待している。今後、クリティカル・シンキングテストの結果が学生に可視化され、学修成果を振り返り、次の成長に結び付けられる環境整備が求められる。また、クリティカル・シンキングテストを授業ブレ・ポスト調査として活用する方策について、各授業の到達目標達成度を直接的に測定することが可能となり、今後の実施結果に期待したい。なお、各委員からの主なコメントは以下のとおりである。参照願いたい。

【A 委員】

CAT の限界を発見し、独自のテスト開発に着手することで AP 事業を大きく前進させた。特に、クリティカルシンキング測定のための MIC 版標準テストを英語で開発している点は評価できる。クリティカルシンキングには西洋スタイルの思考の文化が埋め込まれていると考えられる。言語操作能力を(1)語彙力、(2)文法力、(3)文章力、(4)クリティカルシンキングの4段階でとらえらるゝとすれば、高次の言語操作能力であるクリティカルシンキングの到達度は当然英語によって問われるべきである。また、よいテスト結果を目指して真剣に問題に取り組ませるために、学生に結果を通知することが重要である。それは学生の学習動機向上にもつながる。

【B 委員】

MIC での AP が一定の成果を得るには MICCAT がキーの一つだと感じました。関係者の御苦労は多いと思いますが、学生の CT スキルのデータが蓄積され授業を構築できれば、それは他大学にはない特別なものとなります。授業の独自性を誇れると思います。学生の立場に立った場合、CT の能力テストの結果はどのように反映されるのか、という点です。MICCAT はあくまでシステム構築の蓄積用なのか、それとも単位に含まれるのか。また、学生は相対、絶対それぞれどのように自分の CT の現状能力を知ることが出来るのでしょうか。システム構築の段階かと思いますが、成果や目的を学生に分かりやすく示す取り組みにも臨んでいただきたいと思います。AL と CT は密接な関係があると思います。学生が AL 環境のもと自然に CT 能力が高まるよう授業を工夫していただきたいと思いますし、教員の授業力も重要です。MIC には、大学は学びの場であるということを英語教育で体现するリーダー役になっていただきたいと思いますと考えます。CT は言語を問わず欠かせない能力ですが、外国語でこの能力を身につけられれば学生の将来の可能性は大きく広がると考えます。

【C 委員】

「クリティカル・シンキング」という一見、形而上的な能力を客観的に測ろうとする取り組みに興味を持ちました。CT スキルの伸長を測定することが学生の自信や動機づけにつながり、MIC の目指す学生像、授業像が教職員にも学生にもさらに浸透し、定着していくことと思います。MICCAT の具体的な中身を示していただけると、より踏み込んだ議論ができたのかと思います。

【D 委員】

クリティカル・シンキングテストの概要と効力が理解できて大変良かった。しかしながら、「テストを面倒くさい」と思っている学生が多いのは否定できない。そのため、テストの目的、後で得られる効果等を公表し、「開かれたテスト」にすることを心掛けた方が良いと思う。特に勤勉な学生は予定が詰まっている場合が多いため、あらかじめこのテストを実施する月（日程）を相当前に告知する、もしくは期末試験の時間割の中に組み込んでしまう等、それなりの対策が必要である。

3. e-ポートフォリオ・ワーキンググループへのコメント

宮崎国際大学 AP 事業取組においてウェイトが大きい点として、タブレット PC の全学生配布がある。タブレット PC の整備の主眼は e ポートフォリオの普及・運用にある。昨年度と比べ、リベラルアーツ入門などの新設科目での活用、さらには海外研修時での活用等、e ポートフォリオ普及に進展が見られた。今後は、クリティカル・シンキングテスト結果やルーブリック評価による振り返りなどに活用することが求められよう。このことによって、他のワーキンググループとの連携による相乗効果を期待したい。なお、各委員からの主なコメントは以下のとおりである。参照願いたい。

【A 委員】

保存した学習記録を学生がどのように活用するに関しては、例えば、1 年間あるいは 4 年間で何を学び、どのような成長を遂げたのかを学生自身が振り返り、それを記録として残すことによって、ポートフォリオの学習効果はいつそう高まると考えられる。

【B 委員】

タブレットを配布して学生の学びを支援することは必要なことであり、AL、CT の可視化にも不可欠なことだと考えます。ICT 化は必要で、web 上に記録を残すことで学修成果が可視化されることは学生にとっても大学にとっても貴重なデータになると考えます。教員と学生とのコミュニケーションも密になるのであれば、留学時も状況を確認できる有効なツールです。一方、企業ではヘルプデスクが重要な役割を果たしています。機器だけでなく、使いこなし方などのサポートが十分でなければうまく活用されないことになると思います。

【C 委員】

各学生の取り組みが一元化され、管理閲覧ができる点は自己の学びを客観視する上で、非常に効果的だと感じました。また、海外研修のポートフォリオをはじめとする課題の提出がネット上で行える点は、教員、学生双方にとって負担の軽減になると感じました。さらに、ループリックベースの自己評価やコメント機能が加わることで、MIC での学びがより具現化、視覚化されることになり、現代の学生には欠かせないツールになっていると思います。学習成果の一元管理から、より主体的で深い学生の学びを支えるものとして、どのように発展進化していくのか楽しみにしています。

【D 委員】

ポートフォリオも良い取り組みだと思う。リベラルアーツを取り入れている MIC にとって多岐にわたる分野は時間の経過で忘れてしまいがちだ。しかし、ふとしたところで「こういった学習をしたな」と記憶を引っ張り出したいときに一つのホームページに整理しておくのは大変良い。これは提案だが、クリティカルシンキングスキルは約 11 種ほどに分かれていると聞いたので、ポートフォリオのページをそのスキルごとに整理するというのはどうだろうか。「この課題はこのスキルを養った」という明確な実感も沸いて学生のモチベーションも上がるのではないだろうか。

4. ループリック・ベース・シラバスワーキンググループへのコメント

大学共通ループリックを策定し、各授業科目において学生に明示している点は高く評価したい。しかし、各授業科目におけるパフォーマンス評価としてループリックがどのように設定され、成績評価等に活用されているかについて、より詳細の説明を次年度以降求めたい。AP 事業において求められている点として、ループリックがいかに成績評価等に活用されているかを説明することが重要である。また、他の委員のコメントにもあるが、ループリックは完璧ではなく、常に調整

を要するものであり、その調整方法や調整前後の改善状況などを具体的に示すことは、他大学にとって非常に参考となるであろう。モデルケースとなるような取組を期待したい。なお、各委員からの主なコメントは以下のとおりである。参照願いたい。

【B 委員】

ルーブリックは学修成果を可視化する意味で MIC・AP のもうひとつの柱だと思います。問いへの答えだけを導き出すだけでなく、問いをどう答えに導き出したか、が問われる中では、学生に学修の到達度合いをはっきりと示さなければ 明確な学修意欲を持てないのではないかと考えます。WG 資料の学生への調査で示されたアンケート結果は貴重なものだと考えます。教員が学生全体の理解度を測れるとともに、学生も他の学生の理解度合いを見られるからです。次年度以降の活動予定にあるように、他大学の活用に学び、より学生個人の学修成果とその可視化に繋がる形を構築していただきたいと思います。

【C 委員】

学生の自己評価のみならず、大学や学部、授業の狙いを明確にする上で非常に効果的なものであると考えますが、大切なのは各評価基準の文言かと思います。さらに研究を重ね、教育効果の高いルーブリックの活用を是非今後ご紹介いただきたいです。

【D 委員】

ルーブリックは学生の目標を明確化できる点でいいと思う。しかし完璧なルーブリックは存在しないため、学生の「ルーブリックをこう変えた方がいいと思う」といった意見を回収する機会があったほうが良いと思う。

5. 全体についてのコメント

事業全体及び各ワーキンググループの取組について、どのような目標を設定し、平成 28 年度においてどこまで達成できたのか、今後の課題は何なのかといったことに絞り込みながら概要説明、質疑応答ができると、大学側、外部評価委員側にとって、より効率的かつ効果的なのではないかと感じた。また、高等教育特有の専門用語などについて、一定の事前説明等が必要であると感じた。社会（大学生・高校生・保護者など）に分かりやすく説明するという点において重要な点と思われる。なお、各委員からの主なコメントは以下のとおりである。参照願いたい。

【A 委員】

MIC 版 CAT の英語による開発が本年度のもっとも価値ある取り組みであり、他の事業の意義を高める中心的な事業であると感じた。効果的な標準テスト開発に向けて WG 間の連携が進んでいる。開発中の標準テストが一定の水準で完成すれば、このすぐれた取り組みの他大学への波及効果が期待できる。

【B 委員】

e ポートフォリオ (epf) とルーブリック (rb) は教育界にいない者にとっては理解が難しい分野でした。国際的に見て epf と rb は日本の大学が遅れている分野なのではないかと考えていて「epf は AL・MICAP 推進のインフラ」という昨年の外部評価委員会のコメントに大きく頷いてしまいました。国際情勢の変化はあるにせよ、グローバル化の流れは止まらないでしょう。今こそ MIC の出番ではないでしょうか。語学の学修成果を客観的に示すのは難しいと思いますが、AP の成果としては①他大学のモデルを目指す②他がまねできない独自モデルを作ることだと思います。相反する内容ですが、MIC は本来他にない英語での授業を 20 年近くに渡って積み上げてきた経験があります。AP 期間中の他大学への視察、シンポなど交流を通して、その優位性を是非とも PR して頂きたいと思います。

【C 委員】

現役学生の頃から幾度となく耳にしてきた「クリティカル・シンキング」は、MIC の教育の根底をなすものであると考えます。AL を通して CT スキルを育てるという MIC の教育がこの研究を通してより洗練されていくことを期待しています。一方で、他大学で行われている AL の手法やその目標との差別化が必要であると感じます。AP の目的は、日本の高等教育の質の向上だと思いますが、大変な時間とエネルギーを割かれている先生方の姿を見ると、卒業生としては、MIC のブランディング（教育力向上と学生確保）につながっていくべきだと感じました。この研究をエンジンとして、MIC がさらに発展し、日本の教育をリードしていく存在になることを期待しています。

6 総評

宮崎国際大学 AP 事業の取組は、これまでの自大学での教育方針や教育実践を基礎に進められており、全体的に安定感があり、補助期間中に確実な成果が挙げられることが強く期待できる。また、宮崎国際大学でなければ取り組めないような独自性が、アクティブ・ラーニングの推進や学修成果の可視化の取組において随所に見られ、他機関に対して、一つのモデルケースになるものである。その上で、AP 事業 3 年目を終え、かつ、平成 29 年度が中間評価の時期であることを踏まえ、平成 29 年度以降に取り組んでいただきたい課題を列举しておきたい。

- (1) テーマⅠ・Ⅱ複合型の取組として、類型化されたアクティブ・ラーニングのうち、個々のアクティブ・ラーニングの実践を通して、10 数種類あるクリティカル・シンキングのどのスキルが育成・強化されるかについて、その関係性を概念図化しておくことを求めたい。そのことによって、アクティブ・ラーニングを通した学修成果を可視化することができ、宮崎国際大学 AP 事業の独自性や特徴をアピールすることにつながるはずである。

- (2) 外部評価委員には、現役学生、卒業生、ステークホルダーの方々が含まれており、今回の外部評価委員会の質疑応答を通して明らかなように、宮崎国際大学の取組が各方面から評価されていることを重要なエビデンスとして活かしていただきたい。特に、宮崎国際大学が育成する力として長年育んできた「クリティカル・シンキング」の学生・卒業生への浸透度、さらには、現役学生にとって一見理解しにくい「クリティカル・シンキング」が学修プロセスを通して徐々に理解が深まる実態を成果として活かしてほしい。
- (3) 学生が多様化している現状において、「入試成績、学業成績、クリティカル・シンキングテストなどの直接評価」と「アンケート調査などの間接評価」を活用した多角的分析に取り組み、貴学の教育改革に活かすことを期待したい。
- (4) 貴学の AP 事業の数値目標の進捗状況において、授業外学修時間などの幾つかの項目において、今後、更なる充実が求められる項目が見られ、今後 3 年間での目標達成に期待したい。
- (5) 国際教養学部での取組を推進しながら、もう一つの学部である教育学部への波及に適宜取り組んでいただきたい。

V. 本学 AP 事業のこれまでの成果

Progress Toward Miyazaki International College's AP Objectives

Benjamin A. Peters, Vice President
Miyazaki International College



Miyazaki International College (MIC) continues to make progress toward achieving its AP objectives of improving both Active Learning and the Visualization of Learning Outcomes. During the 2016-2017 academic year, MIC's AP Working Groups' activities centered on analyzing active learning, assessing critical thinking skills, and improving the visualization of student progress through e-Portfolios rubrics. This is a brief overview of some of our tangible achievements.

After observing and measuring active learning activity at MIC, the Active Learning Working Group (ALWG) reported on the group's classification of active learning activities and the results of research conducted on faculty and students. The ALWG classifies active learning activities with two measures. One is classification of activities as "outward" (interpersonal strategies) or "inward" (intrapersonal strategies), and the other is classification of activities as "prepared" (prepared or rehearsed strategies) or "extemporaneous" (impromptu strategies). The ALWG's research shows that the most frequent active learning activities employed by MIC faculty are outward and extemporaneous, for example informal debates. The second most frequent are inward and prepared, for example writing one's reaction to a text. One important finding of their research into students' views of their own participation is that 95% of students report that they persist with challenging learning activities even when they do not first succeed. I believe this reflects the cultivation of the students' diligence and their strong determination to succeed.

This year, the Critical Thinking Working Group (CTWG) designed and administered a pilot critical thinking test. The practice and mastery of critical thinking through active learning has been a core educational objective of MIC since its founding. Through the AP project the CTWG aims to evaluate students' progress in mastering critical thinking skills and create a test instrument that helps to visualize those learning outcomes. The CTWG reported on the design of MIC's Critical Thinking Test, including

the kinds of CT skills it measures, the test format, and the results of a pilot test administered to first-, third-, and fourth-year MIC students in the fall of 2016. Taking into account the preliminary results, the CTWG will refine the test instrument and begin official testing of CT skills in the next academic year.

The e-Portfolio Working Group (ePWG) developed criteria for student e-Portfolio submissions and their assessment. The MIC portfolio system, which employs the Mahara platform, is intended to guide students in the visualization of outcomes of active learning across the four years of college. The ePWG has directed the phase-in of the e-Portfolio, including its inclusion in core SILA first-year courses and the study abroad program. All first-year students in the required ICT, Introduction to Liberal Arts, and Introduction to Global Citizenship courses as well as all second-year students completing study abroad now submit assignments through their e-Portfolios on the Mahara platform.

After research and faculty consultation this year, Rubric Working Group (RWG) developed an institution-wide rubric, and all classes are currently using rubric-based syllabi. The purpose of including a rubric in course syllabi is to help students understand the learning objectives related to the college's Diploma Policy and to track their progress toward achieving the objectives. MIC faculty members may amend and supplement the institution-wide rubric, and the RWG has surveyed them on the results of such usage to continue to improve the institution-wide rubric.

From the beginning of Miyazaki International College's AP project in 2014, it has been a faculty-led initiative. Currently more than one-third of MIC faculty members are on an AP Working Group, and the college has several staff members with assigned roles in the project, including two professional staff in the AP Office. MIC has made steady progress toward achieving its AP project objectives thanks to the dedicated efforts of everyone involved. Now that the Working Groups have finished the steps outlined in the first three years of the AP plan, they are moving toward increased coordination and further integration of their aims.

VI. 参考資料

1. MIC-AP ニュースレター



CONTENTS

- 2016-2017 Project Summary • Active Learning Symposium
- Working Group Highlight : MIC Critical Thinking Test

2016-2017 Project Summary

The Acceleration Program for University Education Rebuilding (AP) project at MIC completed its third year. Starting in April, 2016, rubric-based syllabi started to be incorporated into the School of International Liberal Arts (SILA) and data were collected to understand faculty use of rubric-based syllabi and identify their strengths and weaknesses. In May, MIC's own critical thinking test (MICCAT) started to be developed and its first edition was created. This pilot edition of MICCAT was administered to SILA students to examine its effectiveness. The AL Working Group held two FD seminars, in addition to a presentation and a workshop that were held at the AL symposium. Following on from the last year, e-Portfolio orientations were held several times so that MIC students can make effective use of e-Portfolio. All the AP activities were fruitful, leading to further advancement of the AP project.

Issued by the e-Portfolio Center
Miyazaki International College
1405 Kano, Kiyotake,
Miyazaki 889-1605, Japan

MIC-AP Goals

Theme I : Active Learning (AL)

1. To identify and categorize AL teaching strategies in use at MIC, and determine effective AL teaching practices
2. To create AL program to improve English skills

Theme II : Visualization of Learning Outcomes

1. To develop critical thinking assessment tool
2. To establish a PDCA cycle of learning by introducing rubric-based syllabi
3. To visualize learning outcomes through e-Portfolio

ACTIVE LEARNING SYMPOSIUM 2016 in TOKYO

Miyazaki International College (MIC) held its 2016 Active Learning Symposium in Odaiba, Tokyo on Saturday, November 12th. Vice President, Dr. Peters, opened the symposium with an explanation and overview of the MIC-AP project. Professor Anne Howard and Lecturer Cathrine-Mette Mork, representatives of the Active Learning Working Group (ALWG), led the keynote session entitled, "Measuring Active Learning Activity at MIC". They reported on the group's classification of active learning activities and the results of research conducted on faculty and students.



What is the e-Portfolio? e-ポートフォリオとは？



Orientation for faculty and students
教員と学生へのオリエンテーション



Associate Professor Anderson Passos from e-Portfolio Working Group (ePWG) led a session on visualizing outcomes of active learning with e-Portfolios. He showed examples of students' e-Portfolio pages and explained the phase-in of the e-Portfolio, including its inclusion in core courses and the study abroad program.



The final session was an active learning workshop led by Professor Julia Christmas, who taught the participants about different AL techniques by which to engage students in the learning process. Participants came not only from the Kanto area, but also from a farther field, such as Hokkaido. During the Q&A session, the participants actively asked questions and expressed their opinions, which gave important feedback on our AP project.



Lecturer Christopher Johnson, a representative of the Critical Thinking Working Group, reported on the group's progress in designing and administering an original critical thinking test.

Working Group Activity Highlight :Developing MIC Critical Thinking Test

Development of MIC Critical Thinking Assessment Tool

Since our inception, the School of International Liberal Arts offers a unique educational in English, which enables students to develop their critical thinking skills through active learning. However, it is difficult to examine whether those skills are developed without a reliable instrument to measure them. Therefore, the purpose of the Critical Thinking Working Group (CTWG) is to develop a critical thinking assessment tool for MIC students.

MICCAT First Edition

Based on MIC's experiences of administering the Critical Thinking Assessment test developed by Tennessee Technological University, the CTWG started to develop MICCAT. The critical thinking skills to be assessed were identified, and then the first edition of MICCAT with items targeting those skills was created.

Initial Administration

The first edition of MICCAT was administered to SILA 1st, 3rd, and 4th year students to examine its effectiveness and identify areas for improvement. MICCAT consists of 26 questions, targeting different critical thinking skills such as inductive and deductive reasoning, thinking through different perspectives, and identifying relevant information. MICCAT was created in English, and English proficiency is likely to influence the test results. One goal is to modify MICCAT so that it can accurately and reliably measure critical thinking skills.

MICCAT Skill Composite

Two Competencies

Deductive Logical Inference
Inductive Logical Inference

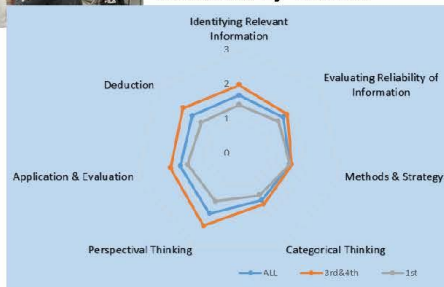
Subskills

Identifying Relevant Information
Evaluating Reliability of Information
Methods & Strategy
Categorical Thinking
Perspectival Thinking
Application & Evaluation
Deduction

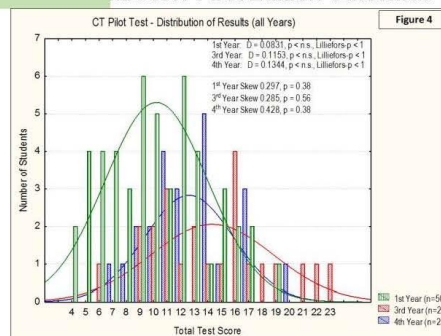
MIC Students Taking MICCAT



Subskills by Grades



MICCAT First Edition Outcomes



2016-17 AP Major Activities

Apr	Rubric-based syllabi incorporated into SILA
May~	Development of MICCAT first edition
Jun	Tablet & e-Portfolio Orientation for Students 1st FD on Active Learning
July	Administered questionnaires from each WG
Oct	MICCAT Pilot Test
Nov	2016 Active Learning Symposium 2nd FD on Active Learning
Dec	FD on Development/Outcomes of MICCAT
Jan	e-Portfolio Orientation for End-of-Year Page
Jan~	Analysis of WG activities
Mar	2016 External Evaluation Committee

2017- 2018 AP Plan

Apr~	Deliver Second CT Pilot Test Create Goals of Collaboration among WGs
May	Tablet & e-Portfolio Orientation for students FD on Use of the Institutional Rubric FD on Active Learning
Jun~	Modification of the Institutional Rubric
Oct	Deliver Third CT Pilot Test
Nov	FD on Integration of Rubric into e-Portfolio
Dec	2017 Active Learning Symposium
Jan~	FD on Development/Outcomes of MICCAT
Mar	Analysis of WG Activities 2017 External Evaluation Committee

(日本語版)



宮崎国際大学
Miyazaki International College



文部科学省から認定された
大学教育再生加速プログラム

MIC-AP NEWSLETTER

Newsletter of MIC-AP 平成 28 年度版(平成 29 年 3 月発行)

CONTENTS

- 今年度事業の概要 ●アクティブ・ラーニング シンポジウム
- ワーキンググループ活動ハイライト: クリティカル・シンキングテストの開発

平成 28 年度事業の概要

平成 26 年度に文部科学省・大学教育再生加速プログラム (AP) テーマ I・II に採択された本学の AP 事業は、3 年目を終えました。今年度の 4 月から国際教養学部においてルーブリック・ベース・シラバスの本格的運用が開始され、教員の活用状況及びルーブリック活用における問題点・改善点を把握するためにアンケート調査が行われました。5 月からは本学独自のクリティカル・シンキング・アセスメントテスト (MICCAT) の開発が行われ、10 月にはその初版の有効性・改善点を把握するために、国際教養学部の学生に対してテストが実施されました。アクティブ・ラーニングに関しては、学内で FD を 2 回行ったほか、東京でシンポジウムを開催し、成果発表を行うとともに、ワークショップも開催しました。e ポートフォリオの運用は、昨年度に引き続き、学生へのオリエンテーションを多数行うことで、その活用法を学生に周知することができました。今年度の各ワーキンググループの活動は、来年度以降の本事業の更なる飛躍につながる充実したものでとなりました。

発行: 宮崎国際大学 e-ポートフォリオセンター
〒889-1605 宮崎県宮崎市清武町加納丙1405番地
TEL 0985-85-5931 FAX 0985-84-3396
URL: <http://www.mic.ac.jp/>

本学の AP 事業の目標

テーマ I : アクティブ・ラーニング (AL)

1. 実践している AL を体系化し、その成果を検証して、効果的な AL の手法を提示する。

2. 英語スキルを向上させる AL プログラムの構築

テーマ II : 学修成果の可視化

1. クリティカル・シンキング (CT) を測定するツールの開発
2. ルーブリック・ベース・シラバスの導入による学修の PDCA の確立
3. e-ポートフォリオを用いた学修成果の可視化

2016 アクティブ・ラーニング シンポジウムの開催

平成 28 年 11 月 12 日 (土) に「2016 アクティブ・ラーニング シンポジウム」を東京・お台場の国際交流館で開催しました。はじめにピーターズ副学長が開会の挨拶をし、その後本学の AP 事業の概要を説明しました。それに引き続き、アクティブ・ラーニングワーキンググループ (WG) に所属するアン・ハワード准教授とカタリーナ・モーク講師が、「本学におけるアクティブ・ラーニング (AL) の可視化」と題した講演を行い、AL の概念的分類、及びその分類に言及しつつ、本学で使われている AL の具体的手法について発表しました。また、学生の AL における学習行動についてのアンケート結果の発表も行いました。



What is the e-Portfolio? e-ポートフォリオとは? Orientation for faculty and students
教員と学生へのオリエンテーション



e-ポートフォリオについては、パソス准教授が、本学での e-ポートフォリオ導入から使用までの過程を発表しました。また、国際教養学部生の年度末ページ、留学ポートフォリオ、本学の授業で使われている e-ポートフォリオの具体例も紹介しました。ルーブリック・ベース・シラバスについては、ウオーカー学部長補佐が、平成 28 年度 4 月よりシラバスに導入した全学的ルーブリックに関する教員への調査、ならびに本学教員が使用したルーブリックの具体例を発表しました。



クリティカル・シンキング WG は、ジョンソン講師が現在開発中の本学独自のクリティカル・シンキングテストに関して、これまでのテスト開発への取組と 10 月に行ったパイロットテストの結果を発表しました。



最後は、クリスマス教授が「アクティブ・ラーニングワークショップ」を行い、授業をより学習者の学び重視にするための具体的な教授法に参加者体験型のワークショップで紹介しました。関東のみならず、北海道や福岡など遠方からの参加者の方々もいました。質疑応答セッションでは、参加者から様々な質問・意見が飛び交い、今後の本学 AP 事業発展の参考となる意見も多く聴かれたことから、有意義なシンポジウムとなりました。

ワーキンググループ活動ハイライト:クリティカル・シンキングテスト開発

本学独自のクリティカル・シンキングテスト(MIGCAT)の開発

本学の国際教養学部では、開学当初から授業を英語で行い、アクティブ・ラーニングを通して学生の考える力（クリティカル・シンキング）を育成するという独自の教育法を行ってきました。しかし、効果的なアクティブ・ラーニングが学生のクリティカル・シンキングを育成するといっても、その伸長度が測れなければ、本当にその能力が育成されているのかを把握することはできません。そこで、具体的にクリティカル・シンキング能力を可視化するために、本学独自のクリティカル・シンキングテストを開発しています。

MIGCAT 初版の作成

昨年度に米国テネシー工科大学が開発した CAT を実施したことで得た経験及び知見に基づき、本学独自のクリティカル・シンキング能力を測定するテスト（MIGCAT）の開発が行われました。本学が重要と考えるクリティカル・シンキング能力を明確化し、その能力を測るための質問が盛り込まれた MIGCAT の初版が作成されました。

テスト実施の様子



試験の実施

MIGCAT 初版の有効性の検証と必要な改善点を把握するために、国際教養学部 1、3、4 年生に対してテスト（英語）が実施されました。MIGCAT 初版は全 26 問から構成され、クリティカル・シンキング能力に欠かせない演繹的及び帰納的思考法、様々な視点から考える力、適切な情報を把握する能力などを測定するようデザインされています。英語で作成されたテストであるため、受験者の英語力の影響を慎重に分析・検討しつつ、より多くのデータを収集・分析し、改訂を重ね、一歩一歩信頼度の高い宮崎国際大学クリティカル・シンキングテスト（MIGCAT）を作っていきます。

MIGCAT が測定する能力の構成

上位能力

Deductive Logical Inference
Inductive Logical Inference

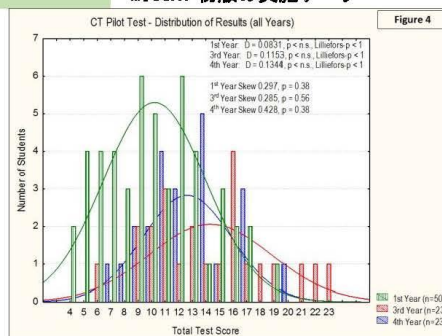
具体的な下位能力

Identifying Relevant Information
Evaluating Reliability of Information
Methods & Strategy
Categorical Thinking
Perspectival Thinking
Application & Evaluation
Deduction

学年別・CT 能力の達成度



MIGCAT 初版の実施データ



平成 28 年度の主な活動

- 4 月 ルーブリック・ベース・シラバスの本格的運用開始
- 5 月～ MIGCAT の開発
- 6 月 新入生にタブレット端末を貸与
第 1 回アクティブ・ラーニング FD 実施
- 7 月 各ワーキンググループからのアンケート調査の実施
- 10 月 MIGCAT の開発の継続および試験の運用
- 11 月 2016 アクティブラーニング・シンポジウム開催
第 2 回アクティブ・ラーニング FD 実施
- 12 月 MIGCAT の開発と成果に関する FD 実施
- 1 月 学年末ページ・e ポートフォリオ（学生作成）のオリエンテーション実施
- 1 月～ 各ワーキンググループの活動成果分析
- 3 月 平成 28 年度外部評価委員会開催

平成 29 年度の主な活動予定

- 4 月～ ワーキンググループ連携の目標及び指針の策定
MIGCAT 第 2 版の実施及び結果の分析
- 5 月 学生向け e ポートフォリオ オリエンテーション実施
ルーブリックの活用法に関する FD 実施
アクティブ・ラーニング FD 実施
- 6 月～ ルーブリックの改訂
- 10 月 MIGCAT 第 3 版の実施及び結果の分析
- 11 月 ルーブリックの e-ポートフォリオ導入に関する FD の実施
- 12 月 2017 アクティブ・ラーニング・シンポジウム開催
- 1 月～ MIGCAT 第 3 版の実施結果に関する FD 実施
- 1 月～ 各ワーキンググループの活動成果分析
- 3 月 平成 29 年度外部評価委員会開催

2. 宮崎国際大学 AP プロジェクト・メンバー

- アクティブ・ラーニング WG
 - Gregory Dunne (Group Leader)
 - Anne Howard
 - Cathrine Mork
 - Aya Kasai
 - Haruko Aito
- e ポートフォリオ WG
 - Debra Occhi (Group Leader)
 - Anderson Passos
 - Yukichi Shimizu
 - Adam Murray
 - Mai Sakakura
- ルーブリック・ベース・シラバス WG
 - Katherine Bishop (Group Leader)
 - Lloyd Walker
 - Julia Christmas
 - Koji Watanabe
- クリティカル・シンキング WG
 - Christopher Johnson (Group Leader)
 - Benjamin Peters
 - Yuko Matsumoto
 - James Furse
- AP 事務局 e ポートフォリオセンター
 - Satoshi Ozeki
 - Masae Nishinaka
- 宮崎国際大学・AP 事業推進者
 - Masateru Nagata (President)
 - Naoki Nishimura (AP Project Leader)
 - Benjamin Peters (Vice President)
 - Micheal Thompson (Dean: School of International Liberal Arts)
 - Nobuhiro Fukuda (Dean: School of Education)
 - Lloyd Walker (Manager of Academic Affairs)

平成 28 年度年次報告書
大学教育再生加速プログラム (AP)
[テーマⅠ・Ⅱ複合型]

発行

宮崎国際大学 AP 事務局

〒889-1605 宮崎県宮崎市清武町加納丙 1405 番地

TEL : 0985-85-5931

本書に記載された記事の無断転載・複製を禁じます